狼の騎士

守水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
狼の騎士

【Ｎコード】
Ｎ５５０１Ｔ

【作者名】
守水

【あらすじ】
貴族になることを夢見る青年・ゼルは、王都での剣術試験の末に、大貴族・フェルティアードの下へ入ることに。しかし彼の冷たい態度は、ゼルに疑念を抱かせる。そんな中、王宮ではある決闘沙汰が起き……

「風奔り、」

ここまでか。

両手に伝わる、刃物を携えた柄の感触。しかしその刃は、敵に対抗するにはあまりにも頼りないものだった。二振りあるとはいえ、その長さは向かってくる長剣の半分にも満たない。自分の本来の得物などは、はるか遠くへ弾き飛ばされていた。走って拾い上げようにもこの人数。たどり着く前に刺し貫かれるのは目に見えている。

荒い息を吐いていた唇が、歪んだ笑みを描く。相手の隙を見つけたからではない。己が置かれたこの状況を嗤ったに過ぎなかった。

（やつらめ……。何度もそれらしい動きを見せていたが、ここまで大きく出るとはな）

突き出した閃きが、男の胸に突き刺さった。そいつが手にしていた剣を奪おうとしたが、間髪入れずに別の敵が襲いかかってくる。彼はやむなく防戦に徹するしかなかった。これでは銃に弾を込めるどころか、抜くことすらままならない。

（よくもこんなに手練を集められたものだ。金にものを言わせたか）

数人を切り伏せてはいたが、未だ十を越える男達が残っていた。これほどの生き残りを兵が見逃すわけがない。おそらく味方側に身を隠していたのだろう。ということは、かくまっていた者がいたか。

すでに赤みを帯び始めていた服を、剣がかすめた。命中こそしなかったものの、その攻撃は彼にまた新しい外傷を加えた。体を覆う外套などは穿ち切り裂かれ、もはや見る影もない。

剣術に長けた彼だが、一人ずつならまだしも、複数の切っ先が一度に飛んでくるとなれば、その全てを防ぐことなどできるはずもなかった。足は次第に背後の地面しか踏むことができなくなり、その地も密集する木々の根で覆われたものとなっていた。

一人の剣が彼の脚をえぐり、文字通り支えを失った体ががくりと倒れかかる。片膝をつき腕でこらえたが、満足に動けなくなったの

は明らかだった。
　そんな状況下でも、あの笑みはまだ彼の顔に貼りついていた。血に塗れ、欠け始めていた短剣を構える。数え切れぬほどの衝撃を、彼の手はこの短剣を通して受けている。とっくにしびれていたが、すべての指は縄で縛りつけたかのように柄を握っていた。
（……馬鹿だな、わたしは。早く諦めていれば、こんなことにはならなかった。死んでしまったら、望みを持つことすらできないというのに）
　剣が輝くのは、葉の間から差し込む陽光のせい。その光も森も、この血なまぐさい場にかすんでいたようだ。今になって、人間達の争いに蹂躙された自然が、美しく映った。
　柄を握り締める皮手袋が、締め付けられた音を立てる。彼の心臓に牙を剥こうとしていた刃が、その動きを止めたように見えたのは、幻だったか。
　一陣の風が、彼の髪を撫でた。それとほぼ同時に、突然横合いから飛び出してきた影が彼の視界を遮った。
　新手か。この場に新たに現れるであろう者といったら、彼にとっては新手以外の何者でもなかった。しかし研ぎ澄まされた彼の感覚は、その影からは一欠けらの殺気も拾わなかった。
　己の勘を不審がる間に、金属が打ち合わされる、甲高い音が響く。一瞬、自分の短剣が立てたものかと思ったが、それは変わらずに彼の手の中に収まっていた。では今の音は何だ？　彼はゆっくりと、目の前の影の正体を理解し始めた。
　薄汚れた外套。首をもたげれば見覚えのある色の髪。彼を背に敵兵と対峙しているその人物は、彼がよく知っている男だった。

第一節

旅立ちには困難が付きまとうものだ、と誰かが言っていたのを聞いたことがあるが、行く手を遮るほどの困難もあるのか。

澄み切った空には、なんとか目で見える距離のところに少しの雲が浮かぶだけ。やっと暖かくなってきたそよ風が、その真っ白な雲を溶かし込んだようなやわらかい金色の髪と、対照的にくすんだうぐいす色の外套を揺らしていた。馬を下りることも忘れ、光を内に秘めたような碧眼をしばたたかせて、青年――ゼルは、その惨状を目の当たりにしていた。

彼の眼前に横たわっていたのは川だった。泳いで渡れぬこともないが、その広さは、尋常ならざる労力が必要なのは明らかであった。しかし実際に彼を足止めしていたのは川ではなく、その川を渡るための橋であった。

「これは……よわったな」

木造でありながら堅固であったはずの長い橋は、無残な有様になっていた。川を渡る道となっていた板は所々に大きな口を開け、その下の水流を容赦なく見せつけている。街道を支えていた何本もの頑丈な柱は、折れかかっているもの、砕けたものばかりに目が行ってしまうほどに崩れていた。経た年月が味方しなかったのもあるだろうが、主たる原因はまた違うものであることは疑いようはなかった。

もちろん、そんな崩壊寸前の橋を渡る者などいなく、渡らせるわけにいくはずがない。橋の入り口は、固く縛られた縄で閉鎖されていた。おそらく向こう側も同じ状態だろう。

「これじゃ、渡し舟が出てるとこまで行かなきゃならないな」

同年代と比べると、まだ少年らしさが残る顔をややしかめ、ため息をつく。どの道を行こうかと思案しながら、川向こうに広がる深い森を眺めていた時だった。

ふと、しばらく蹄の音しか聞かなかった耳に、人の声と水音が届いた。見ると、土手を下った川辺で、数人の子ども達が水遊びをしている。子どもの親とみえる大人もそばにいた。

しばらく寒い日が続いていたけど、今日は一段と暖かいからな。はしゃぐ彼らに、ゼルは自分を元気に送り出してくれた村の子ども達を重ねていた。

「そちらのお方ー。向こうにご用ですか？」

眺めていた場所よりもさらに手前、橋のほぼ真下から、その声は聞こえた。覗きこむように見やれば、舟が数隻浮かんでいる。ゼルに呼びかけた男は、ちょうど舟から河川敷に足を踏み下ろしたところだった。

「ええ、でもまさか橋が壊れてしまってるとは。……あの、もしかしてそちらは」

地に足を降ろして、ゼルは舟の男に声を張り上げた。手綱を引き土手を下りながら、川に揺られる舟に視線を向け、彼は男におそるおそる問いかける。

「ああ、わたしたちゃセドの方で渡し舟を出してるもんです。こないだの大雨の増水に加えて、どでかい流木やらが橋をぶっ壊しちまったって聞いたんでね、ここを通る人が不便だろうってことで、数人こっちへよこされたんですよ」

長年この仕事に従事しているのだろう。親しみを感じさせる笑顔で、船頭の男は事の次第を話した。ゼルはと言えば、目的の日まで到着できないのでは、とさえ憂慮していたので、彼の話を聞くなりぱっと顔を輝かせた。

「よかった！　セドまで行かなくてはと思ってたところだったんです。すぐに出して頂けるんですか？」

「もちろん。今しがた、お客さんと同じ年頃の旅人さんが乗って行ったところなんですよ。ほら」

川の中腹へと差し出された手の先には、ゆったりと進む一隻の舟があった。舟を漕ぐ男の他に頭がもう一つ、そして馬が、いびつな

橋の影が落ちているせいではっきりとではないが、確認することができた。
「さ、どうぞ。橋が直るまでの間の渡しなんで、お代はいりませんよ」
小さく頭を下げ、ゼルは船頭に続いて舟に乗り込んだ。馬もさして暴れることなく、大人しく同乗した。
「お客さんはここを超えて、どこまで行きなさるんで？」
舟がじりじりと動き出し岸から離れると、船頭が口を開いた。
「そう遠くじゃありませんよ。ベレンズまでです」
「ほお！　ではさっきの方と同じですな」
まるで級友を見つけたかのような、嬉しげな口調だった。
「あの人も？」
「ええ。それに格好も似てなさる。とすると……お客さん、別れが惜しかったんじゃありませんか？　何が起きるかわからない二年というのは、中々長いものですよ」
昔を思い出しているのか、その言葉は年長者らしい落ち着いた語気に変わっていった。
「まあ、惜しくなかったと言えば嘘になりますけど、でもぼくはそれ以上に自分の夢を叶えたいと思って」
「いいねえ、そんな自信満々に夢がある、なんて言う子に会うのは本当に久しぶりだ。で、どんな夢なんですか？」
「ぼくは――」
青年の返事は、川をつんざいた金切り声に打ち消された。
声の主は、先ほど彼が目を向けた集団の中にいた、一人の女性だった。その驚愕と悲愴に歪んだ顔を見つめることもなく、ゼルの目はその女の直視する先に向けられる。
子どもがいた。しかし集団ではなく、一人でである。その上子どもは、あろうことか川のほぼ中間へと流されそうになっていたのだ。
「なんてこった、あんなとこまで行くなんて！　あそこは大人だって足が届かないんだぞ」

にわかに船頭の顔つきが変わった。女性の叫び声に止まっていた腕に、再び力がこもる。幸い川の流れは急ではなかったが、早く助け上げなければ子どもの体力が持たないのは必至だ。ゆっくりと舳先が子どもへ向けられた、その時だった。小さいがはっきりと、何かが水に飛び込む音が響いたのは。

音がしたのは、水遊びをしていた子どものいる川岸とは反対側からだった。糸に引かれるように、ゼルと彼が乗る船頭の首が回された先には、もう少しで岸に着こうとしていた舟と、そこにたたずむ一頭の馬、そして川を突き進む白い波に「お客さん！」と叫ぶ船頭がいた。

「あれ……もしかして、先に乗ってたっていう人じゃ」

「どうもそうらしい。勇気は買うが、泳いで助けるにゃ危険すぎる。お客さん、ちょいと寄り道してもいいですか」

「もちろんですよ！　ぼくも手伝います」

「すいませんねえ。おぉい、デーズ！　おまえも馬降ろして来い！」

馬だけぽつんと舟に残されていた船頭は、この呼びかけに大きく頷くと、対岸に待機していた別の船頭に馬を任せ、舟の向きを変え救出に向かった。その間に、勇敢な旅人は溺れていた子どもにたどり着き、その腕に抱えようとしていた。しかし子どもは相当怖かったと見え、差し出された両腕に見向きもせず、覆いかぶさるようにその頭にしがみついてしまった。

「まずい！　今度はあの兄ちゃんが溺れちまうぞ！」

ゼルの舟と、救出者が第二の被害者になってしまった現場まで、まだかなりの距離があった。船頭だけが乗った舟も向かっては来ているが、子どもにおぶさられて足の着かぬ川で、どれだけ持ちこたえられるのか。焦ったように水をかく櫂が、身を乗り出したゼルの頬に飛沫を散らした。

「……すいません、先に行ってます！」

「え？　お、おい兄ちゃん！」

かなぐり捨てた外套に姿をくらましたように見えたのは、ほんの

一時だった。次の瞬間には、青年の身は大きな水柱を立てて、水中に消えていた。

止める暇もなく飛び込んでしまった若い客に櫂をぶつけまいと、その動きをしばし固めてしまったためか、馬を乗せたままの舟は本来の到着予定よりほんの少しだけ遅れてそこへたどり着いた。その頃には、先に助けに向かった旅人を負かすほどの早さで泳いだ青年は、溺れかかっている男の頭を、誰にも渡さないとばかりに抱え込んでいる子どもを、なんとか引きはがして自分の腕に抱いていた。

「先にこの子を！」

舟に振り向きざま、ゼルは子どもを押し付けるように船頭に差し出した。船頭はしっかりと子どもを抱き受け、泣き声を鎮めようともう大丈夫だよ、と優しく言い聞かせた。

その光景を目に映すこともなく、彼はすぐさまもう一人の救いを求める人間に腕を差し伸べた。それに応えようとした手は、しかし救出者の指を力なく撫でただけに留まり、その体ごと闇のような深い青に飲み込まれようとしていた。

何事かを叫ぼうと開かれたゼルの口内に、ざばりと水が流れ込んだ。それは自身のかいた腕が起こした波だったのだが、そんなことを厭う間もなく、彼の頭は水中に潜った。

勢い込んだため、大量の泡がしばし視界を遮ったが、それが晴れるとゼルの両眼ははすぐに旅人を捉えた。まるで人形のように僅かばかりの流れに揺られ、しかし確実に沈みつつある体を彼は引き寄せ、しっかりと両腕で抱えると、何度も水を蹴って水面から顔を出した。

飛び込んだ時に身軽になっていたとはいえ、旅人の服はたっぷり水を吸い込んでいたし、彼は意識も失っているらしく、ゼルは自ら重りを背負ったようなものであった。おまけにがっしりとした体躯のようで、小柄な青年には空っぽの舟が近づいてきても、そこに旅人を乗せてやる力が残っているはずもなく、沈まずにいようとするだけで精一杯だった。

「大丈夫か！　よし、引き上げてやるからな」
無人の舟を寄せた船頭が、バランスをとりながら旅人の両わきに腕を引っかけ、ゆっくりと舟の中に乗せ入れた。この時ゼルは力を振り絞り、思い切り彼を舟へ押し上げたつもりだったのだが、実際にはさほど持ち上げられてはいなかった。この最後の労力を使い果たし、疲弊しきったゼルの顔を見て取った船頭はすぐさま、へりを掴んだ彼の手首をつかみ、舟へ上げた。
絶えず風をはらんでいるような長髪も今ではしとどに濡れ、雨だれのように水を落とし続けている。倒れこむように座ったゼルは、今まで息をするのを禁じられていたかのように、長い深呼吸を一つした。それが疲れきって陰鬱な気分からではなく、人を助けられたという悦びからきたものだということは、直後に表われた、どこか泣き笑いにも似た、しかし満面の笑みと誰もが言える笑顔が物語っていた。
しかしその目を助けた人物に向けた時、ゼルはそんなのんびりとしている場合ではないことを思い出した。例の旅人はまだ倒れ込んだままである。船頭が呼びかける横に、彼も慌てて腰を上げて駆け寄った。
「ああ、お客さん、お客さんの馬なんですが、あの子どもを親のとこに返してくるって言うんで、ちょっと遅れて来ますが、大丈夫ですか？」
「ええ、構いませんよ。でも大丈夫かな、この人……。しっかり！　聞こえますか？」
ゼルが肩を揺すると、旅人はわずかに声を上げ、咳き込んだ。頭が傾ぎ、水に濡れたせいでなお輝かしい金髪が、日の光を受けきらりと光った。
「よかった！　意識はあるみたいです」
「よし、じゃわたしは舟を岸につけるから、その人を頼みますよ」
船頭はそう青年に言い残し、櫂を手に舟を漕ぎ出した。それでも旅人は舟上にいる間目を覚まさず、船頭が岸に着いたことを知らせ

ると、ゼルは彼を背負って陸に下りた。
旅人がうっすらと目を開けたのは、船頭が広げた大きな布の上に、彼を横たえた時だった。
「気づきましたか？」
日差しを受けた瞳は川よりも深い、しかしゼルの瞳より幾分か青みの強い色をしていたが、眩しかったのか、すぐにまぶたで閉じられてしまった。
再びそろそろと開けられた双眸が自分を映したのを、ゼルは確信した。目の前の状況を把握しきれていないようで、丸くなった目はじっと彼を見つめていた。
「あなた、は……」
「あ、怪我とかはしてないですか？　どこか痛めたりとかは」
まだ本調子ではないらしく少し咳き込みながら、旅人が自分で起き上がろうと手足を動かすのを、ゼルは軽く支えてやりながらその身を案じた。
「い、いえ、痛みはどこも。あれ、ここは？」
「川を渡った対岸です。あなたが助けた子どもは無事ですよ。もう一人の船頭さんが家族のところへ送って行ってくれました」
肩に貼りついていた、細く束ねられている髪を後ろへやりながら、旅人は川とその向こう岸を眺めた。ちょうど子ども達と家族がいるところに舟が着けられ、あの声を上げていた女性が助けられた子どもを胸に埋めているところだった。そして船頭と二言三言交わすとこちらを向き、大きく頭を下げた。
「ほら、あれはあなたにですよ。あの子を助けたから」
「よかった、無事だったんだね。……ん？　でも確かおれはあの子にしがみつかれてしまって、それでやばいと思って……」
だんだんと川での記憶が戻っているらしく、夢見心地だった顔に渋い表情が浮かんだ。無理やり思い起こそうとしているのか。だがひそめられた眉が元に戻るのに、そう時間はかからなかった。
「そうだ、誰かがおれを支えてくれたんだ。じゃ、きみが」

たった今気づいたかのように、旅人はまだ小さく滴を落とす青年を凝視した。ゼルは、彼が大きな怪我もしていないことに安堵し、笑みを返しただけだ。しかし次の瞬間その微笑は一気に吹き飛ばされ、代わりに残ったのは予想外という杭に引き残された、純粋な驚きだった。

「ありがとう！　きみがぼくを助けてくれたのか、本当にありがとう！」

よくそのまま背中から倒れなかったものだと、ゼルは己に感心した。突然旅人が抱きついてきたからである。背に回された腕の力の強さに心の中でほっと息をつき、普段ならふざけ半分でしか聞かなかった感謝の言葉の中に、心のこもった響きを感じ取った。

「いやすまない、ぼくは重たかったろう？　人を助けるにはいいけど、助けられるにはこの上なく不便な体だもんな、ぼくは」

「いや、そんなことは……ちょっとあったけど」

恩人の肩にしっかりと両手を乗せ、やんちゃそうな笑顔で問いただしてきた旅人は、ゼルの答えに気分を害した風など微塵も見せず、逆に待っていたかのように破顔した。村の子ども達によく似た屈託のない、そして豪快さも含んだ笑顔だった。

「そうだよな、重いはずなんだ。それだっていうのに、ぼくを抱えたってんだから大したもんだよ。しかも水の中で！　きみは命の恩人だよ」

そう言って、旅人はまたゼルを抱きしめた。ゼルが苦笑しながら彼の背中に伸ばそうとしていた手は、船頭のよく通る声に動きを止めた。

「お客さん！　どうもお待たせしました、馬が着きましたよ」

青年が移した視線の先を、やっと恩人を解放した旅人も見つめた。栗色の毛並みの馬を乗せた舟が、そろそろ岸に着こうとしていた。

「きみの……ってことは、きみもどこかへ行く途中なのかい？」

「うん。でもきみが行く場所と同じなんだ」

「ってことは、ベレンズに？」

「そう！」
まさか道中で目的を同じとする人に会うとは思わなかった。向こうも同じように思ったらしく、ゼルの弾けるような笑顔を見て、意外そうに驚いていた旅人もそれになった。
「これは嬉しいな、恩人と一緒に旅ができて、その上少なくとも二年は顔を合わせられるなんて！」
「そう何度も恩人なんて呼ばないでくれよ。ぼくはジュオール・ゼレセアンっていうんだ。でもみんな下の名前を縮めてゼルって呼んでくれる」
「こっちこそ、助けてもらった身なのに名も名乗らず申し訳ない。ぼくはデュレイ。デュレイク・フロヴァンスだ。改めて礼を言うよ。ありがとう、ゼル」
「こちらこそ。よろしくな、デュレイ」
立ち上がりながら名乗った二人は、しっかりとお互いの手を握りしめた。

第二節

川を越えてすぐに広がる森は、ウォレトの森という立派な名前があったが、それよりも有名になってしまった異名を持っていた。『夜の森』と聞けば、行ったことがない者であっても、それがベレンズの南にあるあの森のことだとわかってしまうのである。

『夜の森』と呼ばれるようになったのは、太陽の光が差し込む隙間もなく、うっそうとしていて、昼間でも夜闇が森を覆いつくしているように見えるからであった。きっと通ったら山賊に襲われるに違いないと、ウォレトから離れた場所にいる者ほど思い込む傾向が強かったのだ。

しかし実際のところ、旅の者がこの森で襲われるということは滅多に起きなかった。確かに深い森であることは事実だが、街道となっている部分は切り拓かれている。月明かりでも、影が道に落ち、頭上には空が広がるのだ。道を通るだけならば、いたって安全な場所なのである。

かと言って、別段目を止めるものがあるわけでもなく、歩いて通りたいと思うところではない。馬に乗る者ならばなおさら、走って通り抜けてしまうだろう。

当初のまま一人であったなら、ゼルも早くこの森を抜けようと馬に拍車をかけていたはずである。しかし実際には、立派な栗色の馬はその腹を蹴られることはなく、ゆったりと歩を進めていた。その隣には同じ栗色の、しかしやや明るい毛並みを艶めかせた馬が並んでいた。そして馬上の人間は、少しばかり堕ちかけてきた陽光を浴びながら、話に花を咲かせていた。

「リクレアか、にぎやかなところだと聞いてるよ」

「なあに、これから向かうベレンズに比べたら、ぼくの町なんか取るに足らないさ」

「そんなこと言ったらデュレイ、ぼくの村はどうなるんだよ」

「いいじゃないか、小さい町ってのは憧れるよ。うるさくないし、何よりのんびりできるし」
「きみはそう思うのか。ぼくに言わせたら、のんびりしすぎて退屈なぐらいだよ」
　子どもが遊べってはしゃぐから、ずっとってわけじゃないけどね、と加えると、デュレイはさも楽しそうに笑った。
「子どもと遊ぶか、そりゃいいな」
「ぼくが出発する時も、みんな口を揃えて貴族みたい！　って言うんだ」
「きみのことをか？」
「うん。小さい村だからね、本当の貴族なんて見たことないから、ぼくが王宮に行くためのこの服装ですら、貴族みたいに見えるんだろうね」
　確かに、ゼルとデュレイの身なりは、国王に仕える貴族に比べれば質素なものだった。襟付きのゆったりとした衣服を身に着けていたが、それを覆う厚手のベストは地味な色合いだし、凝った飾りもなければ刺繍もない。よく似ているものを挙げるなら、長靴と革の手袋ぐらいだろうが、貴族ならばきれいに磨き上げられているはずだろう。
「なるほど。剣も持ってるとなればなおさらだろうな」
「ぼくが戦争に行くんじゃないかって、心配してくれる子もいたな」
「いいなあ。おれなんか先生に“おまえは図体がでかいから心配ないだろう”なんて言われたぞ」
　いじけたように話すデュレイに、ゼルは思わず吹き出してしまった。
「そっか、学校とかもちゃんとあるんだよな。ウェールじゃ、叔父さんが先生みたいなもんか」
　ゼルの頭を、自分を送り出してくれた叔父の姿がよぎった。
「おじさん？　きみのとこには、物知りな人がいるのかい？」
「うーん……そうだね、王宮がどんなところかとか、ベレンズに行

った時恥をかかないようにって、色々教えてくれたんだ。それに小さい頃から、ずっと剣術も習ってたし」
　途端に、ゼルを覗きこんでいたデュレイが、さらにまじまじと見つめてきた。
「なんだそりゃ、王宮に詳しくて剣まで教えてくれるなんて！　よほどの実力者なんじゃないのか？　その人」
「いや、叔父さんの兄弟がね。ぼくの父さんなんだけど、貴族までにはいかないものの、結構活躍してたらしいんだ。それで色々聞いてたんだって」
「へえ……。でもきみの言い方だとお父さんは……」
「うん、死んじゃってる。だいぶ前にね」
　ふっと影が落ちたデュレイの表情をかき消そうと、ゼルは気になどしてないと言うように笑いかけた。
「そう暗い顔をしないでくれよ、せっかく連れができたってのに」
「ああ、ごめんな……。嫌なこと聞いてしまったかと思って」
「大丈夫、もう慣れっこさ。それより今日の宿だけど、きみもメンクに泊まるのかい？」
「ああ。あそこまで行けば距離的に安心できるし」
「よし、じゃあ少し急ごうか。ちょっと話し込み過ぎたな、ここからあそこまでは結構かかるぞ」
　そうゼルが言った時には、森もその出口を現していた。ゼルが川に着くまでに見てきたものと同じ、畑や家々が点在するのどかな風景が広がっていたが、その先には二人が目指すメンクの町がある。
「この時期だから、ぼくらと同じくベレンズに行く人はだいぶ減ってると思うけど」
「だといいな。よし、競争がてら走ろうじゃないか、ゼル」
「うわ、なんか負けそうだな」
　ゼルには、デュレイの乗る馬がかなり立派なものに見えていたのである。デュレイのほうは、ゼルの呟きは聞こえていなかったようだった。それというのも、競争しようと言い出してすぐ、彼は馬を

走らせにかかったからである。
「わ、ちょっと待ってくれよデュレイ！」
待っていたとばかりに駆け出したデュレイの馬を、ゼルは慌てて追いかけていった。

二人がメンクに着いた頃には、東の空は黒の如き青色に変わり、その反対側は沈みつつある太陽の色に染められていた。町の入り口である石造りの門を抜け、馬を降りた旅人達は最初に目に入った宿屋へ足を運んだ。いくつかの窓から、もう灯りがこぼれている。裏手にある馬小屋と宿とを往来していた宿の者をつかまえ、ゼルが宿泊したいという旨を伝えると、彼は困ったような顔になった。
「よわりましたね、もしかしたら満室になってるかもしれません。今日はとてもお客様が多いんですよ」
「そうなんですか？　デュレイ、もしかしたら、ぼくらみたいに今ベレンズに向かってる人が……」
「ええ、あなた方のような風情で、若い方ばかりですから。きっとほとんどが今年の徴兵で王都に行く方々でしょう」
それでも彼は、亭主に様子を聞いてくると言い残し、宿の奥へ引っ込んでいった。代わりに現れた使用人が、椅子に掛けてお待ちくださいと二人を広間へ促した。もし泊まることができなければ意味はないが、馬を一時的に小屋へ入れてもらうこともできた。
「いや、まさかこんなにいるとはね」
二人は一階の隅にある椅子に腰を掛け、宿の様子を眺めていた。広間と、宿の者がたたずむ奥をしきるカウンターは、確かにまだ手続きを済ませていないらしい若者でごった返していた。戸口を見れば、また新たな顔がいくつも覗く始末である。
「本当だよ。ちょっと甘かったのかな、ゼル」
「こんなに遅く出発する人が多いだなんて。のんびり屋はぼくみたいな田舎者で十分だよ」

「いや、意外と街のやつらの方が、こういうのを見くびってたのかもしれないぞ。おれみたいにさ」
そう言って顔を綻ばせるデュレイに、ゼルもつられて口角を上げた。
「お客様、お待たせしました」
最初に話しかけた男が、小走りで二人のいるテーブルに姿を見せた。
「真に申し訳ございません、やはりお部屋の方はすでに満室でございまして」
「やっぱりか……」
ゼルはは息を吐いたが、当然のことだと思った。同じ用向きの、しかも同年代の者に出会えた嬉しさで、ついゆっくり話して来てしまったのも、こうなってしまった原因だろうなと考えていたのだ。
「あちゃあ……。ゼル、ごめんよ」
「え？」
宿の者以外から聞くとは思わなかった詫びの言葉を発したのは、他ならぬデュレイだった。
「だってほら、今日一番旅の足を引っ張ったのはぼくじゃないか。ぼくがあんなことにならなければ」
「そんな！　きみのせいだなんてこれっぽっちも思っちゃいないよ」
ゼルは思わず身を乗り出していた。丸机の木目に落とされた瞳はまぶたに陰り、快活にしか映らなかった鮮やかで深い青は、今では自責の念でその光を放っているように見えた。
「今さらそんなこと言ってもしょうがないのはわかってるんだけど。いや、ほんとにごめん」
「そう落ち込むなって。でもな……」
これがあのたくましい体を持った男かと疑ってしまうほど、小さく縮んでしまったデュレイの肩を叩きながら、その言葉の後半はゼル自身にしか聞こえない声量に押し留めた。同時にデュレイが背を向けている、宿の出入り口に視線を移す。この宿に泊まれないとわ

かった者が、ぞろぞろと出て行くところだった。他にも宿屋はあるだろうが、おそらく今立ち去った旅人で埋まってしまうだろう。となれば、ここは急いで彼らの後を追ったほうがいいのか。いつの間にか、カウンター回りの宿泊客も一組だけになっていた。それ以外はグラスを手にくつろぐ者、まだ忙しそうに歩き回る宿屋の者ばかりである。

「とりあえず、他の宿をあたってみよう。ここにいても泊まれないんだし」

「申し訳ありません、お客様」

「いえ、とんでもないです。さ、デュレイ」

すっかりしょげてしまったデュレイが、ゼルにはやはり子どものように見えた。先に席を立つと、ゼルは子ども達を慰めた時のように、そっと肩に手を乗せた。見上げてきたデュレイの表情が、よく落ち込んで泣きそうになってばかりいたリトという子にそっくりだったので、ゼルは小さく吹き出していた。

「な、なんだい、そんなに変な顔してた？」

「ごめんごめん、違うんだ。今のきみの顔が、ぼくの村にいた子にあんまり似てたんで、つい」

そう言うゼルを見て、やっと大きな子どもの面差しが明るくなった時だった。

「失礼。旅の方とお見受けしますが」

丁寧な落ち着いた声が、そっと背後から響いた。見ると、ゼル達とよく似た服装の男が、こちらに進めていた足をちょうど止めたところだった。その後方に、カウンターに手をのせたままこちらに体を向けている男がいた。どうやら宿泊客の一組らしい。

「ええ、そうですが」

「こちらに泊まられる方ですか？」

背格好と顔つきから見ても、自分よりはるかに年長者なのは明白だった。ゼルの馬よりも、さらに彩度を落とした栗色の長髪をもつその男は、しかしまるで目上の者と話しているかのような口調だっ

た。
「いえ、ちょうど満室になってしまったと聞いたので、別の宿を探しに行くところなんです」
「お二人ですか？」
「そうです」
「……ふむ」
ため息のように小さく、一人納得したような音を吐くと、「しばしお待ちを」と連れの男のほうに引き返していった。そして短く言葉を交わしたのち、床に靴音を響かせながら戻ってきた。
「あなたがたがよろしければ、わたしどもの部屋をお譲りしたいと思うのですが、いかがですか？」
穏やかな弧を描いた唇が発した台詞は、その意味を理解したゼルとデュレイの顔をたちまち吃驚の色に染め上げた。
「おっと、宿の方に聞くのを忘れてましたね。客が勝手に部屋を移動しては、やはり困りますか？」
「え、あ、いえそんなことはありませんが、お客様方は二部屋お取りになっているのですか？」
「ええ。しかし泊まれぬ方がいるとなれば、一部屋ずつなどと贅沢は言っていられませんから」
「あ、あの！　でもぼくらは他の宿が空いていれば」
つかの間のあいだ、呆然と宿の人間と男のやりとりを見ていたゼルが、我に返ったように口をはさんだ。
「あんなに人がいたのですから、他ももう埋まっているでしょう。遠慮などいりませんよ。ああ、それとも、素性も分からぬ者からでは受け取れませんかな」
「えっ、いえ、そういうことでは」
穏健な男とは対照的に、まるで目の前にしているのが国王かなにかでもあるかのように、しどろもどろになってしまったゼルへ、男は自分の名を名乗った。
「わたしはルーテス・シーク・ノル・リエッタ。しがない貴族です」

「きっ、貴族の方でいらっしゃったんですか！？」
「あまり言いたくはないんですがね」
即座に身を正したゼルと、音すら立てて盛大に立ち上がったデュレイを見て、身の上を明かした男は寂しそうな笑みを浮かべた。
「国王陛下に仕える新兵を、野宿させるわけにもいかないでしょう。失礼、ベレンズに向かわれる方で間違いありませんか？」
「ええ、その通りです、えっと……リエッタ卿。真に恐縮ですが、ご厚意に預かってよろしいでしょうか」
「もちろん。その言葉を待っていましたよ。では、案内していただけますかな」
「はい、ただいま」
満足そうに目を細めると、リエッタは立ち尽くしていた使用人に声をかけた。使用人は弾かれたように明瞭な声で答え、部屋の確認にその場を離れた。

第三節

やや音が気になる急な階段を上がりきると、突き当りから左右に伸びた廊下があり、それをはさむように扉が等間隔に並んでいた。先頭を歩いていた使用人はその廊下を左に折れ、数歩進んだところで足を止め、手にしていた鍵を左側にあった戸の鍵穴にさし込む。こもった金属音を立てて錠が外れたのを確認すると、使用人はその鍵をリエッタに手渡した。

「こちらと、この隣のお部屋がお客様がお取りになった二部屋でございます。どちらをお譲りするかは、お客様が決めてくださってかまいません」

「間取りは大差ないのですか？」

「ええ、同じ造りになっております」

「そうか。ではゼレセアン君」

一、二歩程度離れていたゼルに、リエッタは向き直った。ゼルはといえば、普段どおりちょうどよく力の抜けていた体に、また力を入れなおして返事をしようとしたところだった。しかし使うべき口にまで無駄な力を込めてしまい、舌がこわばって言葉を発することはできなかった。ゼルに肩を並べているデュレイは、今力強く押したらそのままの姿勢で、丸太のように倒れてしまうのではないかと思うほど、ゼルには一本の棒に見えていた。

「この隣の部屋を、あなた達にお譲りしましょう」

「あ、ありがとうございます、リエッタ卿」

「ありがとうございます！」

聞こえなくては失礼だと思ったのか、デュレイの感謝の言葉は、その場にいた人が全員目を丸くするくらい大きかった。たくさんの目が自分に向けられていることに気づいたデュレイはすぐさま下を向いたが、その顔が真っ赤になっていたのまでは隠し通せなかったらしい。くすりと微かに笑ったリエッタは、今しがた鍵を開けても

らった部屋の扉を開けた。
「お客様方、夕食と朝食なのですが、この混雑ですのでお部屋にお運びすることになりますが、よろしいですか？」
部屋に踏み入ろうとするリエッタの足を止めたのは、少々早口の男の声だった。
「ああ、もちろんですよ。それとわたしどものほうは、朝食はいりませんので」
「お出かけが早いのですか？」
「ええ、日が昇る頃に出る予定なもので」
「そうですか、ではその頃に馬を出せるよう、手配しておきます」
「それは有難いですね」
「どちらとも寝台は一つしかありませんので、簡易のものですがすぐ寝具をお持ちいたします」
使用人はそう告げ、四人が承諾したのを見回すと、ゼルに鍵を渡した。その間部屋に入ったリエッタは、扉の取っ手に手をかけていた。
「ではお二人とも、ゆっくり休まられてください」
「お気遣い感謝します、リエッタ卿。貴方方もどうぞごゆっくりと」
いかにも貴族らしい、しかし自分にはもったいなさ過ぎると感じるほどに慇懃なリエッタの礼の奥で、先に部屋に通されていた連れの男が小さく頭を下げている。それを見届けて、ゼルは深々と頭を垂れた。静かに閉じられた扉の音を聞いて、ゼルは大きく息を吐いた。
「すごいな、ゼル。ぼくなんかがちがちになっちゃって、話すどころじゃなかったよ。しかもついさっきなんか……」
友人の声に振り向けば、先ほどの失態を思い出したのか、また頬を赤く染めているデュレイがいた。
「ぼくだってずっと緊張しっぱなしだったよ。まさか宿で貴族に会うなんてね」
階下に向かった使用人に軽く会釈をして部屋に入りながら、ゼル

はだんだんと平静さを取り戻していた。
「まったくだめだな、こんなに固くなっちゃ、ベレンズにいるうちの半分気絶してたなんてことになりかねない」
「心配しすぎだよ、デュレイ。ほら、今は息抜きしようじゃないか」
寝台が一つしかないということは、一人部屋なのだろう。しかし二人が通されたのは、一人用には十分過ぎる広い部屋だった。さすがに寝床をもう一つとなれば無理があるが、戸棚や鏡が備えられており、入り口からまっすぐ見える窓の下に、整えられた寝台があった。
「ゼル、風呂もなかなかだよ。早めにお湯も用意してもらう？」
ひとまず床に荷物を置いたゼルに、一足先に浴室を覗きこんでいたデュレイが呼びかけた。
「気が早いなあ、デュレイは。先に夕食のほうが来ちゃうんじゃないか？　それともなんだい、デュレイは風呂好きなのかい？」
「いや、そこまでってわけじゃないけど。ついいろいろ気になっちゃうんだ」
部屋のほぼ中央にあるテーブルと椅子は、一階でゼル達が休んだものとよく似ていたが、やや小さかった。デュレイはその椅子に外套を引っかけ、寝台に腰を下ろして部屋を見渡していたゼルに視線を移した。
「でもよかったね、無事泊まれて」
「本当にね。もしかしたら、あの人達もベレンズに行くのかもしれない。明日はずいぶん早くここを出るみたいだからあいさつはできないだろうけど、もし向こうで会ったら改めてお礼を言わなくちゃね」
「今度はぼくもしっかりしなきゃな。ところでゼル」
大きく頷いたデュレイは、椅子に座りながら話題を切り替えた。
「なんだい？」
「そのベッドなんだけど、きみが使っていいぜ」
「えっ？　い、いいよぼくは。宿の人が持ってくるって言ってたや

つでいいよ」
「そう言うなよ、きみはぼくを助けてくれた人なんだ。寝る場所くらいいいほうを使ってほしいんだよ」
布団の中に強いばねでも仕込んであったかのように、ゼルは一瞬で腰を浮かせていた。それを見たデュレイは立ち上がり、もう一つの椅子にかけようとしたゼルのそばに歩み寄った。
「でも、それを言ったらきみだって溺れかけた身だ。意外と体が疲れてるかもしれないし」
「ぼくを抱えたきみが言う台詞じゃないだろ」
半ば呆れたように返され、ゼルがまたそれに反論しようとした時、控えめながらもはっきりと戸が叩かれた。
「お待たせいたしました、お客様。寝具をお持ちしました」
そういうわけで、寝床の譲り合いはしばし延期されることになった。

備え付けのものよりも二回りほど小さい布団が部屋の片隅に設置された頃、入れ替わるように夕食が運ばれてきた。本来ならば一人分の食器が悠々と広げられる卓も、さすがにもう一人分ともなると窮屈そうに見えた。しばらくは使用人が一人二階に待機しているので、用があれば言いつけてほしいと給仕係が残して去っていったところで、二人は向かい合って席につき、食事を始めた。
「ぜう、ほの、いみはさ」
「……ごめんデュレイ、何言ってるんだい……？」
口に放り込んだばかりの肉を飲み込まないうちから喋ったため、デュレイの言葉はゼルでなくても理解することは不可能だったに違いない。小さく「ごめん」と手を振ってから、デュレイは下を向き、肩を上下させて食べ物を腹に押し込んだ。
「ふう、すまない。そのさ、ぼくらはこれから兵役に就くわけだけど、きみはこの貴族の下で働きたいって希望はあるのかい？」

「いや、特に思ったことはないな。でも誰の隊に入るかは、試験で決められるって聞いてたんだけど」
「うん、まあそうなんだけどね。誰か憧れてる人でもいるのかなと思って」
今度はサラダを平らげようとしている友を眺めながら、ゼルはふうんと相づちを打った。
「ありゃ、あっさりしてるなあ。実はあんまり乗り気じゃないとか？」
「まさか！　ぼくは一兵士としてベレンズに行くことをずっと待ち望んでたんだよ！　絶対に功績を挙げて、貴族になってやるんだ！」
さっきの淡白な態度はどこへやら、前のめりになるほど一変して活気に溢れ始めたゼルに、デュレイはぽかんと口を開けて完全に動きを止めていた。手にしたフォークから野菜がこぼれ落ちたのにも気づいていないようである。
「……いやびっくりした。きみってばものすごくやる気満々じゃないか。そう積極的なら、貴族ならみんな欲しがるんじゃないかな」
「でも試験で振り分けられるんだろ」
「試験ったって要は剣の技術さ。その勢いで挑めば、大貴族の目に止まるのも夢じゃないぜ」
まるで自分が当事者であるかのように、デュレイの声は半ば上ずっている。
「そんなもんかなあ」
ゼルは照れくさくなってごまかそうとしたつもりだったが、デュレイには全く通用しなかった。
「きっとそうなるさ！　後々戦争が激しくなった時、困らない程度にがんばればいい、なんてくらいにしか考えてなかったおれが馬鹿らしく見えるよ。がんばれよ、ゼル！　応援してるぜ！」
そう言って、デュレイはお祝いだとばかりにメインの肉を一切れ、ゼルの皿に移した。ゼルは慌てて戻そうとしたが、いいから食べてくれと押し切られてしまった。

「リクレアでも、きみみたいなでっかい夢を語るやつはいなかった。なんだか久々にすっとした気分になったんだよ、遠慮するな！」
――ここで無理やり断わったら、デュレイのことだ、さっきみたいにしょんぼりしてしまうだろうな。そう思い、ゼルは礼を言って肉に手をつけた。それを見たデュレイは満足そうに笑って、椅子にもたれながら水の入ったコップに手をかけた。
「大貴族に引き抜かれたら、さぞいい生活ができるんだろうな」
「おいおい、もう引き抜かれたあとの話かい？」
「大貴族と言えば、エルジーノ卿にジェンタス卿、あとは……そうだな、ゲルベンス卿や……」
嬉しそうに天井を見上げ、貴族の名を連ねるデュレイが、ふとゼルに目を戻した。ゼルはなぜか、難解な言葉を連ねられた子どものように、目を見張っている。
「どうしたんだい？　ゼル」
「いや、ずいぶん詳しいんだなと思って」
「え！？　詳しい、って……有名な貴族だよ？」
「そうなの？」
「お、おいゼル、きみ貴族になりたいって言ってたけど、貴族のこと全然知らないのかい？」
今度はデュレイが前のめりになる番だった。
「貴族については勉強したよ、もちろん。ただその名前を知らないだけさ」
「きみのおじさんは教えてくれなかったのか？」
「そんなとこかな。叔父さんが言うには、人づての先入観や、個人の見方が混ざったことを聞くよりも、自分が接して感じたことを信じろって。だから叔父さんはどんな貴族がいるか、ってことについては何も言ってくれたことはなかった。名前ぐらいはいいって言ってくれたんだけど、それはぼくが断わったんだ。名前も知らないで行ったほうが、おもしろいかもしれないと思って」
さも当然のごとく言われ、デュレイは感心したように唸り席に落

ち着いた。
「そうか、噂に惑わされないようにしたのか。確かに貴族の噂はよく流れるけど、どんな尾ひれがついてるかわからないもんな」
「やっぱりあるんだ、噂とか」
「大貴族ともなると、悪いものは滅多にないけどね」
なんたって貴族階級のお手本だもんな、と呟いて、デュレイは水を一息に飲み干した。ゼルも、自分の皿に残っていた野菜を口に放り込む。続けてそっと皿に寝かせられた食器が、上品な金音を立てた。
「そうそうデュレイ、寝る場所のことなんだけど」
「うん」
「やっぱりぼくがこっちで寝るよ」
ゼルの指した指を追ったデュレイの目に、使用人が運んできた簡易型の寝具が映った。そしてゼルは彼の口が動いて言葉を遮って、理由を続けた。
「だってきみ、窮屈そうじゃないか」
確かに、ゼルのように小柄な体型なら十分だが、大の大人や、将来偉丈夫になるのは必至であろうデュレイには、いささかこじんまりとしすぎていた。もちろん何もないよりはいいのだが、せっかく普通の寝台があるのだから、ゆったりと寝てほしい。ゼルはさっと席を立つと、自分の荷物を小さな寝台の上にどさりと落とした。
「こっちのほうがぼくにぴったりだよ。あまり大きいベッドは慣れてないんだ」
荷物に続いて、ゼル自身もそこに陣取った。かと言って、ゼルの家のものと同じ大きさというわけでもなかった。
「ゼル……。ごめん、気を遣わせてしまって。でも、実はぼくもちょっとせまそうだなって思ってたんだ」
「ははっ、ほらな」
「それじゃゼル、代わりと言っちゃなんだけど、きみが先に風呂に入りなよ。食器を片付けてもらうついでに、お湯も頼んでくるから」

デュレイは、ゼルが椅子が倒れるのではないかと思うほど、勢いをつけて立ち上がっていた。慌てたように椅子の背を支え、はにかんだ笑みをゼルに向ける。ゼルもそれに笑顔を返したが、デュレイは照れからか、その青い目を泳がせて、駆け足で部屋を後にした。

第四節

歌が聞こえる。

霧がかかったようにおぼろげな、それでも男の声だとわかる歌。美しい、とは感じない。ただひたすらに暖かく、優しい声。

時折夢で聞くこの歌は、例えるならなんだろうか。そう思った途端、ゼルの意識は急速に目覚めてきた。いつものあの声はあっという間に掻き消え、朝を告げる鳥のさえずりと、男の声がする。叔父さんか、リックが起こしに来たんだろうか。そう思って身をよじると、素足が外気に触れた。

（あれ）

布団から足をはみ出すほど、自分は寝相が悪かっただろうか。不思議に思って両目を開ける。木の天井が見えたが、それはまったく見覚えのないものだった。

「あ……そっか」

一瞬でも、本気でここはどこだろうと不安になった自分が、馬鹿らしく思えた。なんのことはない、ここは宿の一室だ。川で助けたデュレイクという青年と共にメンクにたどり着き、そこで丁寧な貴族に会い、部屋を譲ってもらったのだ。

半身を起こし、大きく背伸びをする。また男の声が聞こえた。廊下ではなく、宿の外で話をしているようだった。

（もしかして、あのリエッタって人かな）

やわらかい風のような金髪も、今ではまるで荒風のように跳ねていた。そんな状態の頭をかきながら、ゼルは身を乗り出して窓から外を覗いた。窓の真ん中にベッドが横たわっているので、さすがにまだ眠っているデュレイをまたいでまで、外の様子を見ようとまでは思わなかったのだ。

デュレイの足元からぐっと首を伸ばすと、馬の背に乗った男が二人、亭主らしき人物と話をしているのが見えた。顔まではわからな

かったが、二人の髪の色は、あのリエッタという貴族と、その連れと同じものだった。話はほぼ終わっていたようで、ゼルがあの二人らしい、と思った時には、二頭の馬は颯爽と走り出して行った。ゼル達がこれから向かう方向と同じだったため、やはり彼らもベレンズに行くのだろう。

姿勢を戻してデュレイを見ると、これまた幸せそうに眠りこける顔があった。じっと見つめていたら、笑顔で寝ているのではないかと錯覚してしまいそうである。

（よっぽどいい夢でも見てるんだろうなあ）

息を吐くように苦笑して、ゼルは自分の寝台に腰を下ろし、着替えを始めた。早く起きてしまったため、ついのんびりゆっくり服を替えていたせいか、朝という時間が妙に時が過ぎるのが早いせいもあるのか、大体の身支度を整えた頃に、使用人が部屋の扉を叩いてきた。返事をして戸を開けると、食欲をそそられるような香りが漂ってきた。

「おはようございます。朝食をお持ち致しました」

小さく礼をし、テーブルに置かれた二人分の食事は、昨晩と同様に半透明の覆いがかけられていたが、その芳香は部屋中に広がった。鳥達の声や人のざわめきよりも、この音も立てずに入り込んだ侵入者の存在は、未だ睡眠を貪っていた青年を目覚めさせるのにうってつけだったらしい。使用人が戸を閉めた時、むっくりとデュレイが起き上がった。

「やあ、おはようデュレイ。ちょうどよかった、たった今朝食が来たとこだよ」

机上を軽く整えていたゼルが、寝ぼけ眼のデュレイに呼びかけた。

「あー、おはようゼル。なんかいい匂いがするなあと思って……」

「今言ったじゃないか、朝食が来たとこだよって」

笑いながら、ゼルは覆いを取り去っていた食事を指差した。数度瞬きしてから、ごしごしと目をこすり、また開けられたデュレイの目は、すっかり光を取り戻していた。

「えっ、もうそんな時間になってたのか？」
「まあ、朝食の時間としてはちょっと早い程度かな」
デュレイの枕元によりかかったゼルが答える。
「いつもより寝過ごしちゃったみたいだ。ゼル、先に食べてていいよ。おれもすぐ着替えるから」
うなずいて、ゼルは席についた。やはり川での一件で疲れていたんだろう。背後ではデュレイが着替えているようだったが、ずいぶんとやかましく音を立てている。
「デュレイ、何をそんなに焦ってるんだよ。ゆっくりでいいんだぞ」
椅子の背にひじをかけ、ゼルの振り返った先には、わたわたと服を着込むデュレイがいた。
「いや、待たせちゃって悪いかと思って。よし、とりあえずこれで」
「デュレイ、服。裏返ってるぜ」
「え、あ」
ゼルを見、そして自分の胸に落としたデュレイの顔が、一瞬で朱に染まった。すぐにその服を脱ぎ始めたデュレイには、困ったように微笑しながら食事に戻ったゼルは見えていなかった。

朝食を終えて一時間ほどのちに、二人は宿を出発した。このメンクからならば、速歩で向かえばベレンズにはその日の内に着く。再びのんびりとした景色を見ながらの旅が始まったが、だんだんと家の数は増えてきている。そしてはるか遠くには、巨大な山々の連なりが、その雄姿を見せ始めていた。
「ゼル、あれがウィロウ山脈だ。やっぱりまだ雪をかぶってるな。もうそろそろベレンズが見えてくるよ」
見たことのない山並みに圧倒されながらも、ゼルはデュレイの説明を聞き漏らすことはなかった。右手に広がっていた丘の陰から、一面に広がった緑豊かな農地と共に、ゼルが目指してきた場所が現れた。

そこに広がっていたのは、メンクの比ではない、広大な街並みであった。その一部は頑強そうな城壁で囲まれ、鮮やかな色の屋根が景色を彩っている。まるで蜘蛛の巣か細かい木の根のように、大小の道が街に張り巡らされていた。その中で一際目立つた建造物に、ゼルは引きつけられていた。

ベレンズの街が華やかであるなら、それは清楚な美しさを放っていた。見る者に調和と安定感を与える左右対称の造りは、白を基調とした、光り輝いているようにさえ見える壁で築き上げられている。静かに、そして堂々と鎮座するそれは、紛れもなくベレンズを治める王の館であった。中心部にある抜きん出た高さの建物が、きっと国王のいる所なのだろう。

王都を見下ろすようにそびえている山は、さっきの山脈の一部だ。大地を覆う森が山のふもとを囲み、その木々の波は街のすぐ裏まで押し寄せていた。

いつの間にか馬の足をゆるめていたゼルに、デュレイは自分の馬の手綱を引いた。それに気づいたゼルも馬を止めたが、その目は眼下に顕在する王都しか映していなかった。

「すごい……。王都なんだな、ここが」

「そうさ。ここがぼくらの国の首都、ベレンズだ。さあ、行こうゼル」

再びデュレイの馬が駆け出す。その蹄の音に、ゼルは呆然とベレンズを見つめる自分に気づいた。デュレイを追うのに拍車をかけ、その間にまた街並みを見る。その瞳は、揺るぎない志気で輝いていた。

門をくぐる前から、にぎやかな人々の声はゼルの思考を奪うばかりだった。すでに馬を降り、デュレイと並んで大通りを歩いていたが、きょろきょろと辺りを見回すゼルは、デュレイに微かに笑われていることには気づいていなかった。

「うわあ、家も大きいのばっかりだ。もしかして全部二階があるのかい？」
「まあ、ほとんどはそうじゃないかな。この辺は商店が多いからね。一階部分が店、二階が住居ってつくりがほとんどだから」
「へえ……。あ、あれがさっき見えた門？」
人の頭の隙間から、城壁が見えてきた。そしてそこには、開け放された門があった。
「そう、ベレンズ城下町の入り口だ。でっかいだろ？」
「でかいなんてもんじゃないよ。目が眩みそうだ……」
「大げさだなあ、ゼルは」
門を見上げながら、ゼルはデュレイに続いて城壁の中へ足を踏み入れた。ベレンズに入ってから、わずかにデュレイが先導するような形になっていたのである。
「あれ、そういえば、今のとこには門番とかは？」
「門番が置かれるのは、戦争になった時ぐらいさ。あそこで人の出入りを制限するほど、ベレンズは厳しくない。王宮の門にならいつでもいるよ」
城下町は、さらに込み合ったつくりになっていた。建物は横に伸び、高さも二階建てで済むものは見当たらない。一つの巨大な家にたくさんの人が住んでいるのは、宿に住み込んでるみたいだ、とゼルは思った。
外観の装飾に目を引かれるものもめずらしくなかった。太い通りの他にも細道がいくつも枝分かれしていたが、道は例外なく平らに舗装されていた。
「さて、ぼくらが泊まれる宿は……っと」
デュレイが懐から取り出した手紙を確認している時、ゼルは一つの建物に釘付けになっていた。
「よし、ここをまっすぐで……。王宮に近いんだな」
「デュレイ、あれは神殿ってやつかい？」
「うん？　ああ、そうだよ」

肩を指先で叩かれ振り向いたデュレイは、それを見てすぐ肯定した。王宮には届かないにしろ、大きい部類に入るその建物は、広さもさることながら、天を突くような高さを持っていた。宮殿よりも豪華さはなかったが、それは単に、建造物がどれだけ光を跳ね返しているかどうかの点に限った場合の話である。

建物自体が彫刻であるような装飾の細密さ、光を内部に取り入れるための色のついたガラス窓などは、”尖塔を伴った質素な建物”と感じたゼルを、実はそんなことはないと考え直させるものだった。そしてなにより、この敷地の入り口には扉を持たない門があったのだが、動物や植物を形象したその荘厳さは、まるで異界との境目だった。

「キトルセン大神殿。国で一番大きな神殿さ。初代キトルセンが建立したものだからかなり古いけど、どうだいこのたたずまい。ぼくも数度来てるけど、いつも見とれてしまってるよ。エンデル神も、きっと満足されているだろうな」

ゼルはデュレイのその言葉に、受け流すように相づちを打っただけだった。そのつもりはなかったのだが、冷たく当たったようにとられただろうか。ゼルはふっと心配になり、デュレイの顔を覗き見たが、彼は気に障った風もなく、「さ、行こうか」と笑顔でゼルの歩みを促した。

十分ほど歩いたところで、デュレイは一軒の宿の前で足を止めた。一階の屋根に近い所に札が掛かっており、そこには『白鳥亭』と書かれていた。

「確か、ぼくらが王宮に召集されるまで宿泊できる、宿屋の一覧にあったとこだね」

「そうだよ。ちょっと馬を頼む。部屋が空いてるかどうか聞いてくるよ」

手綱を取り、宿に入っていくデュレイの背を見届けてから、ゼルは改めて街並みを見回した。時折通り過ぎる馬車は、やはり身分の高い人が乗っているのだろうか。相変わらず高さのある家屋の間か

ら、そう遠くない場所にある神殿の先端が、半ば黒く染まって覗いていた。
「ゼル、お待たせ！」
ぼんやりと黒影を見ていたゼルは、跳ねるような友の声で即座に振り向いた。
「部屋が取れたよ。確認のために国王からの手紙を見せてくれって」
デュレイに続いて現れた男の手には、さっきまでデュレイが何度も目を落としていた便箋が握られていた。ゼルは裏手から回ってきた使用人に手綱を任せ、荷物をあさって手紙を取り出した。
「どうぞ」
男は渡された手紙にさっと目を通した。しばし凝視していたのは、末尾にあった国王の署名だろう。幾分か険しくなっていた目つきが緩んだかと思うと、男は顔をあげうなずいた。
「相違ございません。どうぞ、ごゆっくりくつろいで下さい。お手紙はお返し致します」
丁寧な手つきで返された手紙を、二人は軽く会釈して受け取った。男が開け放した扉を、デュレイが通る。ゼルは名残惜しげに尖塔を振り返り、友の後を追った。

第一節

太陽がまだ頭上にたどり着かないこの時間は、日が当たっているとはいえ、吹く風には冷たさを感じた。細い路地を小さな風が抜けていく。それになびいた外套を、ゼルはぐっとつかんで体に引き寄せた。そして、まだ人通りの少ない道の先を見据えた。

その通りのつき当たりに、王宮の建つ地への黒塗りの柵門を認めた時、ゼルは心音が高鳴るのを感じた。その両脇には、デュレイの言っていた通り門番が二人控えている。

「いよいよだね、ゼル。手紙はちゃんと準備してる？」

「もちろん。ほら」

ゼルは、右手にしっかりと握り締めた手紙をデュレイに見せた。

「あまりくしゃくしゃにしないほうがいいぞ。王宮に入るのにあそこで一回、入ってからも一回。それに所属を決めるための試合の時にも見せなきゃならないんだ」

「ほんと詳しいんだな、デュレイは」

「いや、おれの友達がね、王宮で務めてるんだ。だから彼が教えてくれるんだよ」

「へえ、きみもすごい知り合いがいるんじゃないか！」

「きみのとこのおじさんにはかなわないよ」

照れたように笑い、デュレイは歩きながら手紙を取り出した。王宮に近づくにつれ、門扉の向こうの様子が露わになり、緑が覆う広い庭を隔て、閉ざされた宮殿の扉が垣間見える。そちらに視線を集中させていたゼルは、突然兵士が視界をふさいだことに驚き、見えない壁にぶつかったかのように、がくんと足を止めた。

「手紙をお見せ願えますか」

感情を伺えない事務的な声は、門番の一人が発したものだった。王と、王に仕える貴族の居城の入り口を守っているためか、武装したその兵の言葉は、ゼル達が新兵であることを予測した上でのもの

だった。
　二人が手紙を見せると、その男はうなずいて、もう一人に合図をした。重苦しい音が、門に向かい合った兵の手元から鳴っている。それが静まると、通りと王宮の境界である巨大な門が、ゆっくりと押し開けられた。
「どうぞ。中に入りますと案内の者がおりますので、その者の指示に従ってください」
　たたまれた紙を再び持ち、二人はゆっくりと歩を進めた。門が閉ざされた音は、頭に響くほど大きく鋭かったが、遠目でも美しかった宮殿と、周りの庭のきらびやかさを目の前にしていたゼルの耳には、ほとんど届いていなかった。
　芝生を縫うように整然と走る舗道を踏みしめ、ゼルの目は徐々に迫る白亜の宮と、木々の生い茂る広場を何度も行き来していた。あまりそんなことをしていては、田舎者丸出しになってしまうと思い、なるべく控えようと意気込んでいたのだが、王宮に入る前からこの調子である。ゼルの小さな目標は、すでに崩れてしまっていた。
「……これ、自分で開けるのかな」
「多分……」
　扉を前にして、デュレイが呟いた。描かれたベレンズの紋章――白銀の狼――が、二人を見下ろしている。王宮に入らなければどうしようもないのだが、この重厚で豪奢な扉は、触れることすら憚られるような雰囲気をまとっていた。
　拳を握り締めているのは、デュレイも同じだった。ゼルは意を決してデュレイよりも一歩進み、蔓が彫り上げられた取っ手の片方に手を伸ばした。
　大して力を込めていなかったというのに、扉は呆気にとられるほど簡単に開いた。王の住居の玄関が、こんなにも軽くていいのだろうか。ゼルは一瞬不安を覚えたが、それも扉に張り付くように立っていた男の存在で、すぐ消え失せることとなった。なんのことはない、ゼルが引くと同時に、宮殿の中にいた人物も、同じ側の扉を開

けていたのである。
「ようこそ、我がベレンズの新兵となるお方ですな。さ、まずは中へどうぞ」
ゼルと目が合うなり口を開いたのは、門番とは打って変わって、爽やかな声の男だった。二人が中に入ると、男はゆっくりと扉を閉めた。身に纏った外套は黒と見紛う赤色をしており、その胸元には留め金らしきものも見える。銀の金具に、外套の色とは対照的に透き通った薄い赤色の宝石が、小ぶりながらも輝いていた。
「ご案内が遅れて申し訳ない。早速ですが、お手紙を拝見したいのですが」
道中出会ったリエッタという男のように、しかし彼よりも幾分若く見える目の前の男は丁寧な物腰だった。口元に浮かぶ人の良さそうな笑みを眺めながら、デュレイとちょっと似てるな、とゼルは思った。
二人はほぼ同時に、男に手紙を差し出した。男はまずデュレイの手から受け取り、もう片方の手に移してから、ゼルの手紙を引き取った。そして二枚の紙を重ね、その文面を追う目は、やはり一番下で動きを止めていた。
「ありがとうございます。早速待合室の方へご案内しますので、ついて来てください」
返された手紙をしまいながら、二人は左手へ歩き出した男の後に続いた。王宮に務めているのであろう人間と接するのに精一杯で、ゼルはやっと回りを見回すことができた。
遠ざかりつつある入り口の広間には、訪問者を迎えるように壁を埋め尽くすほど大きな絵画が飾られていた。じっくり見たわけではないので詳細は覚えていなかったが、おそらくアミスの神々を表したものだろう。あれだけの大きさなら、神話に登場する神全てが描き起こされているに違いない。
広間と同じく静かな廊下は、ゼルが思っていたよりも狭かった。太陽が窓の形をした光を、敷物に覆われた床と、王宮と同じ白の壁

に落としていた。
光をふんだんに取り入れた通路は、その倍以上の幅はある廊下の横切りによって、終わりを告げた。二人を先導する男が、そこを右に曲がる。ここでは、眩しいばかりの石壁は姿を隠し、代わりに落ち着いた乳白色の上に、赤土色を主とした模様を緻密に織り込んだ壁紙が飾っていた。少し進んだ右手側には窓が並んでいたが、反対側は扉がずらりと並ぶばかりであった。そのせいなのか、あの通路で目が慣れてしまったのか、ゼルはこの空間を少し暗く感じた。
その後も、案内の男は何度か道を折れたのだが、壁の灯台や、明り取りの天窓などを見ては、その度に感嘆していたので、歩みが緩んだ時、ゼルは自分が王宮のどの辺りにいるのかさっぱりわからなかった。できるだけ早くに、この宮殿の造りを頭に叩き込みたかったというのに。
せめて目印らしいものだけでも見つけようとすると、通路の終端を、壁の代わりかのように、大きい窓がはめ込まれているのが目に入った。暖かな緑色が、春の日差しと共に廊下を照らし出していた。
「ではお二人とも、こちらです。もうしばらくしたら順に呼ばれるので、それまで待っていてください」
男がドアの一つを開けた。中の様子が見えるより先にあふれてきたのは、大量のざわめきだった。
促された二人が入り口に歩を進めると、かすかに話し声が静まり、近くにいた者はゼル達に目を向けたりもした。どこを見ても、派手ではない外套に、腰に剣を吊った若い男ばかりである。
「なるほど、ここが待合室なんだ」
ゼルは、部屋を埋め尽くす人込みに分け入らず、静かに閉じられた扉側の壁に背を預けた。体格に比例して高い身長を持つデュレイは、首を伸ばし気味にして部屋を見回している。爪先立ちしたって見えない景色を彼は見てるんだろうな、と思うと、ゼルはまた自分の小ささを見せ付けられるような思いがした。しかし、騒いだところで成長に変化が現れるわけでもない。悔しがる顔を見せまいと、

ゼルはそっと顔を伏せた。
「ん？」
長靴ばかりが視界を埋めると思っていたゼルの目は、全く異なる物を映した。光を反射するそれは、一見して金属であることがわかった。しかし輝きを発したのは一瞬で、すぐに新兵の影がそこに落ち、そこに物があることすらわからなくなっている。この混みようでは誰も足元など見ないのだろう。いつ床に落ちたのかはわからないが、今まで踏まれずにいたことが奇跡に近い。
人に話しかけるためであったなら、少し躊躇したかもしれない。しかし相手は無機物で、踏みつけられそうになっても声を上げることなどできないのだ。ゼルはぐいと人の波を掻き分け、わずかにかがんでその金物を取り上げた。すぐさま引き返すと、デュレイと目が合った。突然その場を離れ、しかも同年代とはいえ、今見たばかりの人達の中に入っていったのに驚いたらしい。
「ゼル、どうしたんだい？　誰か知り合いでも？」
「いや、違うんだ。こんなのが落ちてて」
手を開くと、そこにあったのはペンダントのようだった。一対の翼を模した飾りと、首にかける環の部分は、重さを感じさせるような落ち着いた銀色をしている。
「誰かの落し物かな」
「だと思うな。王宮だって、こんなのを置きっぱなしにするわけないだろうし」
そう言ってゼルは辺りを見回し、ふと一人の少年に目を止めた。この人だかりの中では、誰かが視線を向けていると、逆に目立ってしまう。じっとこちらを見ているその少年は、ゼルがどんな人間なのかを探っているような様子ではなかった。ただ必死に一点を見つめている。ゼルは、すぐにその少年が自分ではなく、自分の手元を見ていることに気付いた。
相手は声を上げたのか、一瞬口を開けると、人垣にも構わず一直線に走ってきた。

「すみません！　あの、失礼ですがあなたが持ってるのは」
「えっ？　ああ、これ」
半ば閉じていた手を広げ、ゼルは彼にペンダントを見せた。それを確認するなり、少年は目に見えて顔を輝かせ、安堵したようだった。
「よかった。ここに入ってから落としたことに気付いたんで」
「これはあなたのだったんですか」
はい、と返事した相手を、ありえないはずなのに、自分より年下に見えてしまったのも無理はなかった。ゼルよりわずかばかり背は高いが、短い金髪の下にあるのは、同じ年とは思えないほどの童顔だった。デュレイが粗野だとは言わないが、相手を気遣うような丁寧さがにじみ出ているようである。光の粒を散らした川面を思い出させるような水色の瞳が、ゼルの青い両眼を見据えた。
「ありがとうございます、拾って頂いて。お名前はなんとおっしゃるのですか？」
「ジュオール・ゼレセアンです。でも長いから、ゼルって呼んでくれれば」
言いながら、ゼルは少年にペンダントを手渡した。彼はそっと手に収めて、
「ではそう呼ばせてもらいますね。ぼくはエリオ・ウィッセルと言います。そちらの方はご友人ですか？」
「ぼく？　ああ、ゼルが認めてくれるなら友人かな」
「何言ってるんだよ、当然だろ」
ふざけた口調にゼルが突っ込むと、はにかんだ二人につられるように、エリオも笑った。暖かい春風が人の姿をとったら、こんな笑顔を見せるのかもしれない。
「ぼくはデュレイク・フロヴァンス。デュレイって呼んでくれ。それと、そんなかしこまったしゃべり方なんかしなくてもいいんだぜ。えーっと……同い年だろ？」
言ってから不安になったのか、デュレイの語調はだんだんしぼん

でいってしまった。それを支えるように、エリオは間を置かずに、高めだが落ち着いた声で答えを返した。
「ええ、見ての通り、義務年齢の中では最年少です。すいませんね、ちょっと緊張してしまったみたいで。デュレイが年上に見えたもので」
「第一印象はそうかもしれないけど、意外とおもしろいとこもあるんだぞ。ここに来る途中貴族の方に会ったんだけど、その時なんか……」
「お、おいっ、ゼル！」
顔を真っ赤にしながら、必死になってゼルを止めようとした。わかりやすい反応をするところが、やっぱり子どもみたいだな。ゼルはそんなデュレイの態度を、不謹慎だと思いつつも面白がりながら、話の続きを語ろうとした時だった。
部屋の扉が開け放たれ、男が姿を現した。ゼル達を部屋まで案内した男ではなかったが、同程度に身分の高い者であることは、色は異なるものの、宝石を飾った金具が物語っていた。
途端に、部屋を満たしていた話し声は、まるで最初からなかったかのように消え去った。男が、手にしていた紙に目を落とすと、ゼルは場の空気が一層沈み込んだように感じた。しかしそれは恐怖などではなく、一種の緊張であった。
「次に呼ばれる者は廊下へ。エリオ・ウィッセル……」
続けて男が読み上げた名前を、ゼルは記憶に留めることはできなかった。名を呼ばれた当の本人――目の前の少年の目つきが、にわかに変わったからである。優しげな色は残したままだったが、淡々と文面を読み上げる男を見る目は、まるで別人だった。ゼルは、獰猛な野生の動物というのを見たことはなかった。だが、聞いた話から想像するだけなら、獲物を見つけ動物はこんな目をするかもしれない。柔和な印象を受けたこのエリオという男も、やはり兵としての意気込みを持ってここに来たのだろう。
「ぼくの順番が来たみたいだ。それじゃゼル、デュレイ、機会があ

ればまた会いましょう。ゼル、見つけてくれて本当にありがとう」
そう告げたエリオの目からは、あの鋭さにも似た眼光はなくなっていた。踵を返し部屋を出て行くまで、ゼルは彼の背中を見送った。

第二節

エリオが去ってから、新兵を呼ぶ男と、新たに入って来る青年達は後を絶たなかった。そのため、一度に十人程部屋を出て行っても、この空間にいる人数はさして変わることはなかった。

「なあゼル、ここに入ってからどのくらい経ったかな」

「結構待ったとは思うけどね。顔ぶれも大分変わってきたから、そろそろぼくらも呼ばれるさ」

とは言え、デュレイ越しに扉を見つめてばかりいると、時が経つのを遅く感じてしまう。ずっとデュレイと街や王宮の話をしてはいるが、その話題も徐々に尽き始めていた。

そんな時に、再び開いた扉から現れた宮廷の男が、とうとう二人の名を読み上げた。その他にも、同時に呼ばれた数人が、入り口に集まってくる。そこで一人一人、また名前を確認すると、男は自分について来るように告げ、歩き出した。ゼル達を案内した男とは違い、ちくりと刺すような緊張感を纏っていた。

男は、ゼルが抜けてきた、王宮とを繋ぐ通路の入り口を通り過ぎ、突き当たりに向かっていた。廊下に沿って右に折れて進むわけではないことは、次第に遅くなる男の足取りで判断していた。

「レイ・ストロン、ジュオール・ゼレセアン、ラジッド・セアスはこちらだ」

その扉は、今までゼルが眺めてきたものと同じく、重厚感のあるものだったが、本当にそれだけであった。装飾もなければ、形状に関しても美しさの欠片もない。王宮の玄関で感じた近寄りがたさとは全く別の、跳ね除けられるような印象を受けた。

デュレイを含む残りは、隣の扉の横に並ばされていた。やはり同じような種類の戸だ。誘導されていく時、デュレイが小さく手のひらを見せたので、ゼルも同じように返してやった。

ゼルはまた壁にもたれたが、今度は試験場の部屋がすぐ隣という

違いがある。はっとなって背を浮かせ辺りを見ると、案内した男はもと来た方へ戻っていくところだった。静かな広い廊下は、時折部屋を行き来する侍女が早足で通るばかりで、ゼルはそれに軽く頭を下げたりしていた。

「次の者」

低く太い、それでいてすっと芯の通った明瞭な声が扉を開いた。そこに顔を向けたのはゼルだけでなく、その前と後ろにいた青年もだった。しかしせり出していた柱のせいで、声の主の姿は見えない。前に並ぶ青年の脇に出てまで覗こうとは、さすがに思えなかった。

はっきりとだが、やや震えのある声で返答したのは、もちろん先頭の青年だ。名前を聞くどころか、顔もよく見ていなかったが、部屋に入っていく彼に、がんばれよ、とゼルは心の中で呟いた。

一人分空いたところを進み、ゼルは調子を整えるために息をつき、天井を見上げた。円弧を描くそこには、幾何学模様に見える絵図が張り巡らされていたが、よく見ると植物を模しているようだった。

すでに試験場の一歩前にいるのに、ゼルはその実感が沸いてこなかった。真剣での勝負ではないにしろ、相当の技術を持った人間と対することになるというのに。もちろん勝てるはずはないし、勝とうとも思っていない。ただ、相手に臆して自分の力を出し切れなかった、という結果にはしたくなかった。

相手は一体どんな人なのだろう。屈強な男か、それとも素早い身のこなしで翻弄してくるのか。そんな想像をして、ゼルはすぐにその続きを考えるのをやめた。どんな相手か目星をつけたところで、今の自分がそれぞれに合った対抗策を取れるわけがない。この試験は、腕の良し悪しではなく、その癖や傾向を判断するものだと聞いていた。ならば見誤られることがないよう、自分らしさを惜しみなく見せられればいいのだ。

そんな固められた意志の強さを確かめるように、意外に大きな音を立てて扉が開いた。途端に鼓動が速くなる。宮殿を前にした時の比ではない。

とうとうおれの番か。そっと首をめぐらせると、先ほどの青年がこちらに背を向けて、ゆっくりと扉を閉めるところだった。そしてゼル達がいるのを忘れたかのように、廊下に出た彼は左右を見渡し、待合室のあった右手へ歩いて行く。彼をずっと目で追うと、その姿はこの試験場と同じ並びにある、突き当たりに近い部屋へと消えて行った。

一人の試験が終わって次が呼ばれるまで、少し時間があるらしい。おそらく、どこの所属にするかを審議しているのだろう。ということは、実際に剣を交える試験官の他に、複数人が中にいるのか。

ほんの少し足を動かすと、腰の剣が壁にぶつかった。中に入れば無用の物となるのに、ゼルの手はその鞘をしっかりと握り締めていた。

平凡な村から来た若者が、貴族になる。ありえないわけではないが、容易なことではない。それでも、ゼルはその目標を揺らがせたことはなかった。まだどこの領地にも属さない自分の村を、自分の手で豊かにしたい。親友や、今まで育ててくれた叔父のためにも。

そう叔父に意気込んだら、そんなことより生きて無事に帰ることだけ考えていろ、と言われたっけ。その時の彼の、悲しさと呆れの混ざった顔を思い出して、ゼルは口元を緩ませた。

「次の者」

開音が声そのもののようだった。厳格さが音になったようなあの低い声は、ゼルの姿勢どころか顔つきまで正す威力を持っていた。

「はい」

吸い込んだ空気を喉に溜め、振り返らないまま力強く一息に返事をする。上ずるかもしれないと思った己の声は、意外にも低音になって出てきた。そしてやっと入り口に体を向けたゼルは、そこに立つ男を振り仰ぐことになった。

小さな青年とは対照的に、相手を見下ろしている巨人は、磨き抜かれた鋼を思わせる色の瞳をわずかに細め、道を開けるように部屋の中へ一歩だけ下がった。それが部屋へ入れ、という合図だという

ことは、すぐに理解した。
男の夕日を思い起こさせるような、かろうじて金色の髪は、一分の乱れもなくまっすぐに揃えられていた。その色は獅子のような剛勇さをかもし出していながら、荒々しさまでは感じられない。それでも、今まで見てきた貴族とは比較にならない気高さが、ゼルの肌を服の上からちりちりと焼いてくるようだった。進める足どりが一瞬遅れたのは、そのせいだったかもしれない。
固く閉じられた口元を、壮年らしく髭が覆っている。試験場に入ったゼルは、もう一度この貴族の顔を見ようとしたのだが、目立たぬよう見上げた視界に入ってきたのは、それだけだった。ゼルが正面に向き直るのとほぼ同時に、背後の扉が閉じられた。
部屋の中は、扉と同じく殺風景なものだった。人の住まいというよりは、小さい闘技場である。壁は一面白っぽい青で染められ、窓など一つもない。家具らしいものといえば、名簿とおぼしき紙と、それよりも一回り小さい紙が無造作に重ねられたもの、そしてペンが投げ出された、小さく簡素な机ぐらいだ。
そしてこの空間にいた人の数は、ゼルの予想を裏切るものだった。ゼルを招き入れた長身の男と、部屋のほぼ真ん中に立ち、こちらに横顔を見せている異様な風体の者との、たった二人だけだったのである。
「手紙を頂けるかね」
頭上から落ちてきた催促に、ゼルは現実に引っ張られた気分になった。それほど、これから剣を交える相手らしい人の格好に、目を奪われていたのである。ゼルは貴族を相手にしている、という緊張感が湧き上がる前に、機械的に手紙を取り出し、男に渡していた。
外気にさらされた彼の額に、わずかにしわが寄ったように見えたのは、自分の手紙がずいぶんとしわくちゃになっていたからだろうか。思い過ごしだと信じたいが、もしそうでなかったら。顔が熱くなりそうなのを、ゼルは必死で押し留めた。
「……結構。では外套と剣をこちらに」

男の後ろには、壁に沿わせられた横長の机があった。手紙を手にしたまま、彼はゼルが最初に見つけた机へ歩いて行く。その背では、ゼルが最初に見たものではない、碧色の長い布がたなびいていた。

外套を脱ぎ、帯から剣を外して、音を立てないようそっと横たえてから、ゼルは目だけを先の貴族に向けた。腕をついて紙に何かを書き込んでいる様は、少し辛そうな体勢にも思える。よれた紙切れが、不安定な紙の塔に乗せられたところを見ると、あれはどうやら新兵に送られてきた手紙の束らしかった。

「では、ジュオール・ゼレセアン。これより、きみの配属を決定するための試験を行う」

顔を上げたかと思うと、男はそうまっすぐに言い放った。ゼルは反射的に「はい！」と叫んでいた。体もすっかり強張ってしまっている。これではデュレイのことをとやかく言うことなどできない。そんなゼルの心中を察したか、男は厳しい表情を和らげた。

「そう緊張しなくていい。これは技術の高い低いを見るものではない。稽古だと思ってもらってかまわん。ただし、出し惜しみはしないように」

堅固さが減った口調のおかげで、戒めが解かれたようになった体にとって、最後に添えられた一言は、適度に身を引き締めてくれるものだった。

再びそばまで来た男は、ゼルが外套と剣を置いた机の陰から、一本の剣を取り上げた。ゼルが持つものとよく似た、飾り気のない質素な、細身の剣。しかし、その刀身に鋭い輝きは見受けられない。

「使ってもらうのはこの剣だ。見ての通り稽古用のものだが、使い勝手はそう変わらない。本物よりも少し軽いかもしれないな」

言い終えると、男は剣の中ほどをつかみ、持ち手をゼルに向けて差し出してきた。腕を見られるものといっても、きっと些細な動作まで評価の対象になっているに違いない。右手で柄を握ると、男の手が剣から離れた。それを見計らって、ゼルは叔父に教えられていた通り、得物を胸の前に引き寄せ、一礼した。しっかりと目を伏せ

ていたせいで、ゼルは男が満足そうに頷いたのを見ることはできなかった。
「では、試験官の正面に」
「はい」
踵を返し、中央へと歩を進める。足元を見ると、途中から床の色も壁と同じものになっていた。その領域に踏み入った時、ゼルの皮手袋はきつく剣を握り締めていた。

第三節

あの貴族が言うのだから間違いないのだろうが、ゼルは未だに、対面する人間が試験官であると信じられないでいた。わずかでも気を抜いたら、眉をひそめたくなるのを我慢し、今一度その風貌を見回す。

模擬とはいってもこれから闘うというのに、体はすっぽりと外套で包まれ、つばの広い帽子のおかげで、容姿はほとんど窺えない。唯一見えた顔の下半分も、布で包まれている。

それらは、ゼル達新兵がまとう色となんら変わりはなかったが、得体の知れない者と向かい合っている気分になった。ゼルでなくとも、平凡に暮らす民から見たら、こんな帽子は見栄を張っているようにしか思えない。しかし、わずかに揺らいだ外套の裾に目をやれば、剣の先が覗いていた。

「二人とも、構え」

いよいよだ。ぶれることなく掲げられた剣を追って、ゼルも右腕を上げた。直立不動の姿勢だった相手は、その動きと共に片足を一歩下げた。ゼルはやや遅れてそれに倣ったが、足も剣先も震えているのがわかった。さっき動いたのは幻だったのかと思ってしまうほど、対峙する彼は微動だにしない。

「始め」

剣術試験の開始を知らせるにしては、ずいぶんとあっさりしたかけ声だった。だが、そこに気を取られてしまうわけにはいかない。目の前に強敵がいる。そのことが、ゼルの心の大半を占めていた。意識を自分の右手に、そして正面へと正す。

すでに踏み込んできていると思っていた相手は、意外にも腕を傾けてすらいなかった。こちらの出方を待っているのか。目を凝らしても、彼の顔は完全に幅広のつばに隠されている。

このまま様子を見ていても仕方がない。対する敵が動かなければ

剣を振るえない、などと評されたくなかったし、何よりゼル自身、そうする性格ではなかった。

相変わらず像のような試験官に、ゼルは先手を打った。すると彼はゼルの攻撃に応え、剣を交えて半歩引いた。村で稽古をした時とほぼ同じ感触。易々と流されてしまったものの、やっと反応を示したことに、ゼルは小さな手ごたえを感じていた。

間を置いては相手に余裕を与える。そうわかっていても、ゼルは己のために一息置いた。少しでも油断すれば、自分の手から剣をからめとるなど造作もない相手のはずだ。そうなったら、試験は終了してしまう。

試験官はというと、また同じように固まってしまっていた。今は斬り込み方でも見られているのか。それならば、とゼルは続けて剣を突き出した。先端は当然のように彼に届くことはなく、さらに彼は一歩も退かずに、ゼルの連撃をさばき切っていた。

こちらの動きは完全に読まれているようだ。予想していたことだったが、今までの努力をあざ笑われているようで、ゼルはふつふつと怒りが沸いてくるのを感じた。どうにもやり切れない。しかし高ぶった感情のままに行動して、事がうまくいったためしなどないことは、ゼル自身がよく知っていた。それでもやはり、一歩だけでもこの相手を退かせてやりたい。ゼルは剣の感触を確かめるように柄を握り直し、見えぬ試験官の目をにらんだ。

意図せず漏れた裂帛の息と共に、ゼルは剣を振るった。下手に攻撃を重ねず、相手の隙を見つけ、狙うように。

じり、と相手の靴が床を這う。少しずつ押せている。試験官はなんとかその場で耐えているようだが、ゼルとの距離はかなり狭まっていた。その気になれば、顔を覗き込めそうである。ゼルがもう一押し、と得物を振った時だった。

痺れまで伴った衝撃が、ゼルの右手を襲った。剣を奪う動きではなかったため取り落としはしなかったものの、軽くつかんでいただけなら、剣は壁に打ち付けられていただろう。

突然の反撃はゼルの身体だけでなく、思惑にも歯止めを与えた。そうだ、自分などが押し切れる相手のわけがない。彼は少し手を休ませていただけなんだ。どうやら今度は、おれが彼の剣をさばく側らしい。でも――

腕の痺れが薄れてくると、それを待っていたかのように相手の猛攻が始まった。今までの動きが緩慢に見えてしまう。一歩どころか、ともすれば壁まで追い詰められそうな勢いである。

しかし、ゼルはそうならなかった。いや、そうすることを無理やり禁じたのだ。剣を恐れてひけば、その分隙を作ることになる。そこを突かれ、またひく。隙ができる。叔父に幾度となく教え込まれたことだ。自ら攻撃をしやすい点をつくるなど、ゼルにとっては最も許せないことだった。

そうは言っても、まだまだ未熟な青年が、腕の立つ剣士に敵うはずもない。下がるまいと床を踏んだ足は、徐々に壁へと吸い寄せられようとしている。ここは下がらなければ苦しいか。驚くほど滑らかな動きで、ゼルの手から剣が絡め取られたのは、ちょうどそんなことが頭をよぎった瞬間であった。

喉元に突きつけられた剣に薙がれた空気が悲鳴を上げたが、それは模擬剣の落下音にかき消されていた。ゼルは剣を落とされた時の格好のまま、試験官の得物で縫い止められていた。

「そこまで」

静寂を割ったのは、あの貴族の声だ。剣が下ろされると、緊張の糸が切れたのか、どっと疲労感が押し寄せてきた。思わず膝が折れ、目を伏せてしまう。試験の空気に耐えられなかった、と見られそうだったので、ゼルは傍らに落ちた剣を拾い、立ち上がることにした。呼吸を整えながら、彼らからしたら、こんなものごまかしにもならないだろうな、と苦笑した。無論、顔には出さなかったが。

「試験は終わりだ。ここを出たら右に行って、五つ目の部屋で待っていたまえ。前の者が入っていったと思うが、わかるね？」

「はい」

返した剣が、立てかけてあった場所に戻されるのを眺めてから、ゼルは男を見上げて答えた。彼がうなずくのを見て、ゼルは自分の剣を取り、外套をかぶると、「失礼致します」と一礼して、無駄な音を立てぬように部屋を後にした。

「おもしろい子だね」
机へ向かう歩みを止めたのは、くぐもった声だった。大柄な貴族は、その言葉の意味を問いただす。
「何がだい？　さして腕があるとは思えなかったが」
その質問のどこが面白かったのか、小さく鼻で笑った試験官は、口元に手をやった。布に隠されていた唇からこぼれた音は、明瞭なものに変化している。
「あなたが気付かないわけはないでしょう。今の子……ゼレセアンでしたっけ？　わたしの反撃にひこうとしなかった。隙を与えるまいとしていたようでしたよ」
「確かにな。あそこまでひるまないやつも珍しい」
「だからおもしろい、と言ったんですよ」
念を押すような言い草に、貴族は口の端を吊り上げた。まるで待ちわびていたものが現れたかのように。
「つまり、あいつのところへやれと？」
「あの方もさっきの子も、お互いどう出るか見ものですね」
「まったく、他人事だな」
「おや、わたしはあなたの心中を代弁したまでですよ」
「余計なお世話だ」
喉を鳴らして笑った貴族は、机にたどり着くと、ペンを取り名簿の上を走らせた。

「やあ、ゼル！」

デュレイが部屋に入ってきたのは、新兵達の山からエリオを見つけ出し、話が弾み出した頃だった。試験を終えて一安心したのか、今度の室内は待合室よりも大きな声で満たされている。
「どうだった、そっちは」
エリオにも会釈を返して、デュレイは少し遠慮がちに聞いてきた。
「最初はいけるかなって思ったんだけど、やっぱり無理だったね。相手に失礼がないようにだけは心がけたけど、どうなるのかな」
「きみが精一杯頑張ったなら、経験豊富な人達だ、きっとわかってくれてるよ」
デュレイが入ってきてから、三人ほど新たな入室者があった後、なんの前兆もなしに談笑の波がすっと引いた。ゼルは扉を見たが、案内の貴族が現れた様子もない。ゼルの疑問を解いたのは、その静まり返った場所に広がった、あることを知らせる声だった。
「諸君、試験の結果が出揃った。この隣の部屋へ移動し、自分の所属を確認したのち、速やかに退出するように」
同時に、青年達の靴が床を鳴らし始めた。別の部屋に通じる扉があり、皆そちらへ移動しているのだ。ゼルは人垣のせいで、気付くことができなかった。
別室へと吸い込まれる行列に混じり、三人がその部屋に入った頃には、最初のほうに入室したらしい者達が、廊下に出る出入り口から出て行くところだった。
隣室には、壁を埋め尽くさんばかりに貼られた巨大な紙があり、頭文字の順に名前がずらりと書き連ねられていた。その名前の先頭には、様々な色の紙が貼り付けられている。そのほとんどには、色紙の下部に名前が追記されていた。
「おれの名前は……ああ、あった。ローデル卿だ」
その身長のおかげか、真っ先に自分の所属を見つけたのはデュレイだった。ゼルも必死に名を探すが、爪先立ちしても、眼前で絶えずたくさんの頭が動くので、すぐに見つけられない。
「大丈夫かい？　ゼル。ぼくも探すよ」

「ごめん、わざわざ。……あっ、見つけたよ、デュレイ」
「本当かい。で、何色だった？」
紙の下にある名は、どうやら貴族のものらしかった。色だけで判別できないのは、それが位ごとに貴族に与えられる宝石の色だからだ。一つの色、つまり一つの階位に一人しか貴族がいない、というのはまずありえない。
ゼルは、自分の名前とその頭に貼られた紙の色しか確認できず、名前まで読み解くことはできなかった。しかし、デュレイに色だけでも伝えれば、どの位の貴族かわかるだろう。もちろん、階位の高低で一喜一憂することはしないが。
「色は緑だったよ」
「わかった、緑だな。……えっ、何だって！？」
友の所属を見つけて教えてやるいという、小さな使命のようなものを感じていたのか、デュレイの目は食い入るように壁の紙をなめていた。その彼が突然叫んでゼルを振り返ったのだ。
「な、何って何が？」
当然ゼルも驚いた。エリオも、何事かと名前の一覧から視線を外している。
「ゼル、本当に緑だったのか？」
「う、うん。ほら、あそこだよ」
あるはずのない色と見間違いでもしたのだろうか。それにしてもデュレイの驚き具合、というよりも焦り具合は普通ではなかった。自分も不安になって、名前があった辺りを指差しながら、もう一度目を凝らす。
前後に並んだ別の名前と、取り違えてしまったか。人の波に埋もれていても、今度はすぐ名前を見つけられた。頭文字の前には、やはり緑の紙があった。
「本当だ……。確かに緑の紙だな」
「どうしたんだ？　そんな嫌そうな顔して。その緑色の貴族は、何か問題のある方なのか？」

驚愕を通り越し、青ざめてさえいる友人を見上げる。王宮のことなら一通り知っている彼が、こんな様子を見せるのだ。ゼルが不安にならないわけがなかった。
しかしゼルの問いかけに、デュレイはそんな負の空気を拭い去るように、
「まさか！　緑と言ったら、貴族の中でも最高位の方にしか与えられないジルデリオンの色だよ」
「じゃ、つまり大貴族？」
「大貴族中の大貴族さ。今じゃたった一人の、あの色を許された方だ」
「じゃあなんでその……怖がってるんだ？」
自分が“緑の大貴族”のところに行かされるわけではないのに、デュレイはさも己のことのように反応しているように見えた。そしてにじみ出てくる感情は、純粋な驚きから小さな嫌悪になり、今では恐怖とも取れるものになっていた。
「最初に言っておくけど、決して悪い方じゃないよ」
やや言葉に詰まりながら、デュレイは口を開いた。
「と言っても、もちろんぼくは会ったことなんかないけどね。ただ、すごく厳しいって聞いてるんだ」
デュレイは首を紙に向ける。ゼルもそれに続いた。
「ほら、緑の紙が貼られてる人を数えてみなよ。あの方のところに配属される人は、いつも少ないんだ」
色だけなら、ゼルもざっと見ることができた。そう言われれば、黄色や白、紫がある中で緑色はよく映えていたが、その数は少ない。デュレイが話を再開させていなかったら、全部で何人いたか把握できるほどだった。
「噂じゃ人間不信だからだ、なんて言われてるけど、実際のところは本当かどうかわからないよ」
「なんだ、悪い噂もあるんじゃないか」
「大貴族にとっちゃ、その程度ならあってないようなものさ。何せ

相応の力がなきゃ、その位まで上がることなんかできないんだし」
確かにそうだな、と納得したゼルの肩を、エリオの声が叩いた。
「ゼル、きみはどこになったんだい？」
「えっと、緑の……。ところでその方はなんて言うんだい、デュレイ？」
デュレイが言おうとした言葉は、エリオに引き取られた。
「フェルティアード卿か！　ぼくもそうなんだよ。長い付き合いになりそうだね、ゼル」
差し出された手を握り返しながら、ゼルはその大貴族の名を反芻した。フェルティアード。最高位の者にしか許されない、ジルデリオンを持つという貴族。
ベレンズの民からしたら、名も知られぬような村から来た自分が、そんな貴族の下へ置かれるというのはなんだか畏れ多いような気がした。だからと言って、辞退したいとも思わないし、まず許可が下らないだろう。
（しかし、ちょっとまずいこと聞いちゃったかな……）
相手がどんな人間なのかは自分で判断したい、と心に決めていたせいもあって、デュレイから聞いた大貴族の人となりは、ゼルの思考の芯を揺らがせていた。

第一節

広間を見下ろすのは、いくつもの目。しかしどれも生きているもののそれではなかったので、ゼルはさして緊張することなく、彼らを眺めていた。

描かれた人間――ではなく、神々の顔立ちには、目立った特徴はなかった。悪く言ってしまえば、どれも似たり寄ったりである。彼らを区別するのは顔ではなく、彼らの持つ力なのだから。

身近に感じたいがために、人間が人の形で絵に表しただけに過ぎない彼らは、絵画においては不思議な人物として描かれる傾向があった。服装は、はるか昔に消え去った一枚布を巻きつけただけの、素朴だが異彩を放つものが多く、そして彼らは例外なく、その身に“力”を纏わせていた。水の神ウェルアなら輝く飛沫を、植物の神ジュルドなら葉と蔓を。

そして絵の一番上、その中心に、光を背負った神があった。表情が不鮮明なのは、何も画家が手を抜いたからではない。描けなかったのだろう。全ての神を生み出すとされている、太陽神エンデルの尊顔を。

「ゼル、そろそろだよ」

ゼルの目を一枚絵から背けさせたのは、やわらかいエリオの声だった。ゼルと目が合うと、彼はにこりと微笑んだ。

「その絵、好きなのかい？」

「いや、こんな大きいのは初めてだったからさ。さすがは王宮だと思って」

「そうだね。でもキトルセンだと、彫刻がすごいよね」

「あのおっきな神殿？」

「うん。そっか、ゼルはまだ行ったことがないのか。休みの日にでも案内するよ」

「ありがとう」

試験から一晩明けた王宮の広間は、新兵でごった返していた。彼らをある区分に従ってまとめているのは、闇の中で見るような赤色の外套をなびかせた男達がほとんどだ。デュレイから聞いた話では、彼らも貴族なのだという。ただ、貴族の中では階位が低く、さらに上の位にいる貴族に付き従っているため、彼らは騎士と呼ばれる身分の者だった。

ゼルは叔父に、貴族から認められ騎士になれなければ、おまえの夢は叶わないも同然だ、と諭されていた。容易なことではないのと、ゼルには平凡な暮らしをしてほしい、という思いからの言葉だったのは、言われた本人もわかっていた。

点呼を取り、全員がその場にいることを確認すると、彼らは青年達を連れ、広間を去っていく。これから二年間、それぞれの新兵の師となる貴族と顔合わせをするのだ。案内する騎士は、きっと各々の貴族が召し抱えている者だろう。昨日ゼル達と最初に会った男も、どこかの騎士だったに違いない。

「エリオ・ウィッセル、ジュオール・ゼレセアンはいますか？」

「はい、います」

呼んで来てくれたエリオについて行く途中で、二人の名が叫ばれた。はきはきとした返事をしたのはエリオだ。周りに比べ、かなり小さい班をつくっているところがある。それがかの大貴族の教えを請う、全員だった。

「エリオ・ウィッセル・ル・セド。それにジュオール・ゼレセアン・ル・ウェール。間違いありませんね？」

「はい」

手にした名簿と二人を行き来した瞳は、金よりも落ち着いた、しかし茶というには透き通った光を放つ色をしていた。新兵を引き連れる役なのだろうが、それが女性であることがゼルには意外だった。宮廷付きの女官にしては、ずいぶんと短い黒髪だ。結わえてもすぐにほどけてしまいそうである。

なめらかで淀みない語調は、場慣れしている証だろう。ゼルと同

年代でないのは、露ほども緊張の色を見せない態度が物語っていた。
「皆揃ったようですね。では、これからの二年間、あなた方が頼りにするべき方の元へ案内します」
一瞬だけ、彼女と視線が重なった。そこに鋭いものを感じて、ゼルは思わず目をそらそうとしたが、彼女のほうが先に踵を返していた。気のせいだと思い込むには、いささかはっきりとし過ぎた眼光だった。知らぬ間に何か失礼な言動を取ったのか。
女性はというと、名簿を小脇に抱えて歩き出している。青と緑が溶け合った、貴族の夫人を思わせるほど華美でない、飾り気の薄いドレスは、比較的高めの身長を持つ彼女をさらに細く見せているようだ。
廊下を曲がる時に彼女の横顔を盗み見ると、身分の高さの象徴にも思えた肌の白さは、特に際立っていなかった。屋内にいることが多いから、街の女性には透き通るような肌の持ち主が多いのだろうか、とも考えていたが、化粧のせいもあるかもしれない。そうすると、固い表情を崩さない彼女は、化粧を好まない性格なのか。
礼儀や作法には厳しいはずの王宮で、一定の嗜みとして化粧もあるだろう。人前に出ているというのに、それを拒絶できる身分の女性なんだろうか。
そんな想像をしているうちに、女性が足を止めた。前回とは全く違う理由からだが、ゼルはまた、道順を頭に叩き込むことができなかった。
女性が前にしていたのは、一つの扉だった。しかしそこには、待合室となっていた部屋とも、試験場だった部屋とも違うものがあった。よく似ているといえば、王宮の入り口で感じたようなもの。一介の民が、いや兵ごときが、触れてはならないような扉。
つやのある木製のそれは、素材は他となんら変わりはないのに、いかめしく凝った装飾と縁取りのおかげで、ゼルの目には全く異質なものに映った。
女性の手がためらうことなく、取り付けられた金属の輪にかかる。

重苦しく鈍い音が、二度鳴った。それに応えるように、室内から声らしき響きが聞こえたが、その内容まではわからなかった。真正面にいた女性だけが聞き取ったらしく、失礼致します、と言いながら、輪にかけていた手を取っ手に移した。

扉は、かちゃりという音以外何も立てずに開いた。女性が体を滑り込ませるように入室し、口を開く。

「フェルティアード卿、今期の新兵をつれて参りました」

部屋の貴族は、それに対しまた何か言ったようだったが、廊下に待機させられていたゼルには、声はおろか姿さえ見えない。扉は細くしか開いていない上、女性の体がそのわずかな視界を遮っていたからだ。しかしそれもわずかなあいだで、女性が内側からドアを開け広げてきた。漏れた光の上を歩くように、先頭にいた者から順に中へ入って行く。

顔が見えるよう、一列に並んだ同期の横につきながら、ゼルは部屋の主をやっと見ることができた。寝台ほどもある机と、背後にある眩しいまでの光を放つ窓。その狭間で立ち上がった男こそ、大貴族と称されるフェルティアードその人だった。

ゼルよりも長い漆黒の髪は、貴族らしく肩まで伸びていたが、試験場にいた貴族とは比べ物にならないくらいにうねっている。どう見ても手入れされているようには見えない。これで大貴族か、としかめそうになった顔が、硬直した。

逆光のせいで読み取れなかった顔の奥で、金色の目がこちらを見ていた。黒を混ぜたような紅が、瞳孔の周りに散っている。樹液が固まったものを宝石として売っているのを見たことがあったが、あの石そのものみたいだ、とゼルは思った。

そんなことを思い出しながらも、目が合った時の射抜かれるような感覚は、未だゼルの心臓を騒がせていた。まるで獣に狙いを定められたようだ。

ゼルに続いて隣に並んだエリオも含め、フェルティアードは目だけを動かし、新兵を一瞥した。その表情は固い、という程度では済

まなかった。不機嫌そうにつり上げられた眉に、鉄扉の如く引き結ばれた唇。歓迎などとは程遠い態度である。
彼の口髭は刈り揃えられていたが、顎鬚のほうは、髪に隠れた耳の辺りまで顔を縁取っているように見えた。年の頃は四十半ばだろうか。一見して粗野とも取れなくない風貌は、すっと伸びた背と、何事も隠し通せなさそうな目で、打ち消されているようであった。
「わたしのところへ寄越されるとは、きみ達も不運だな」
第一声がそれだった。試験場の貴族に似た、低く落ち着いた声だったが、街中でこんな声が聞こえたら、ついその主を見つけたくなりそうな、不思議と惹きつけられる響きがある。しかし今の言葉には、かすかに嘲りの色が見えた。
「わたしは他の者ほど暇ではない。よって、きみ達に直接何らかの指導を行うことはまず不可能だ。そこは了承して頂こう」
開口一番の台詞にわずかな怒りがちらついたが、二言目の内容には納得した。二年間の師とはいえ、何から何まで一人の貴族に教わるわけではない。ここが特異なだけで、普通ならこの倍では済まない数の兵を、貴族は受け持っているのだ。剣の指導や軍の基本は、その貴族の騎士、あるいは幹部兵が行うことがほとんどである。
「心得ております」
発言したのは、先頭近くにいたため、列の端に並んだ青年だった。ゼルが少しだけ身を乗り出して見ると、短い黒髪の下に、きっと締まった表情があった。凛とした声色は、大貴族という身分に対して遜色のないものだったろう。
「お喋りなやつだな」
しかしながら、彼はそれをにべもなく一蹴した。その唇が、わずかに形を変える。
――このフェルティアードという貴族も笑うのか。意外だったが、もちろんこちらまで笑いを誘われるような、明るく優しい笑みではない。紛れもなく、侮蔑を含んだ嘲笑であった。
返された青年は羞恥からか、赤くした顔を隠すように伏せた。そ

んな彼を気にした風もなしに、フェルティアードは机の前に回り込んできた。暗い青色の外套が斜光のせいで明るく見え、それを留める金色の金具には、深すぎる森を彷彿とさせる深緑の宝石が灯っていた。

「意気込みを語る自己紹介は結構。名前だけ順に言ってもらおう」

机を滑った手が、一枚の薄い紙を取った。光に透けて反転した文面には、短い文字列が箇条書きになっている。どうやら、彼に渡されていた新兵の名簿らしかった。

「アールズ・ケイ・ル・ベレンズです」

「ラジッド・セアス・ル・ベレンズです」

二人目が、先ほどの気の毒な青年だった。彼らに続いた兵も、ほとんどがベレンズ出身の人間だ。やっぱりこれだけ巨大な街だからか、と聞いているうち、あっという間にゼルの番になった。

「ジュオール・ゼレセアン・ル・ウェールです」

名乗る度に一人一人の顔を見ていた目が、ゼルの前で細められた。あの威圧のある視線が、今度は自分だけに向けられている。

「ウェール？　聞かん地名だな」

「ここから南の方にあります、小さい村です」

そうか、と呟いて次を促した大貴族に、ゼルは安堵の息をついた。いつの間にこんなに空気を溜めていたのか、自分でも驚いてしまう。エリオの口が閉じると、フェルティアードは薄紙を戻し、言った。

「早速だが、これより国王陛下に謁見する。今期兵の代表として、陛下と国に対し尽力することを誓うものだ。ベレンズの者なら知っているな」

頷けなかったのは、ゼルとエリオを含む、地方から来たわずかな人数の新兵だけだった。ゼルなどは瞬きすらできていない。そんな彼に、フェルティアードが気付かないわけがなかった。

「どうした、ル・ウェール。陛下にお目通りするのが不服かね」

とうとう自分にまで、あの不気味な微笑をされてしまった。背筋だけでなく、舌まで凍らされるようだ。明らかに問いかけの口調に、

ゼルはなんとか答えを絞り出した。
「いえ、とんでもないです」
もう少し丁寧なほうがよかったか。しかし早く返答しなければ、という焦りから早口になっていた言葉は、すでに口から出ていった後だった。
それにしても、まさか国王に面会することになるとは思わなかった。兵全員が国王に会うことは、数の多さからして難しいため、一人の貴族の指導下にある新兵が代議するのはわかる。それが大貴族なのも、腑に落ちないところなどない。そんな立場にいるというのが、ゼルにとっては自分にそぐわない気がして仕方がなかった。
「ならば、くれぐれも陛下の御前でそのような醜態を晒すな」
当たり前だ。ゼルは口にこそしなかったが、顔つきはやや険しくなっていた。突然国王に会う、なんて言われたから驚いただけで、事前に説明されるなら心の準備はできる。
「もちろん、そんな真似は致しません」
黙っていようとしたのに、一瞬だったがゼルを支配した感情は、いらぬことまで口走らせていた。しまった、と我に返ったと同時に、複数の視線が自分に集中したのを感じる。ここでまた顔に出したら、さらに何か言われてしまう。それだけは避けようと、ゼルはぐっと口をつぐんだ。
きつく睨んでくると予想した大貴族に、意外にも虚を突かれたような表情が見えた。が、ゼルはおそらく見間違いだろう、と己に言い聞かせた。今度はどこか、からかいまで入り込んだ笑みが現れたのだ。
「よかろう。その言葉を偽る行動はしないことだな」
言い終わるやいなや、彼はゼル達が入ってきた扉へと歩き出した。エリオの脇を通り過ぎると、ついて来い、という抑揚のない声がかけられた。

第二節

階段を上って通されたのは、控えの間のようだった。ゼル達新兵が入った扉の正面には、王宮の玄関と同じ造りの、二枚の戸からなる部屋の入り口がある。違いといえば、その扉の中心に、ベレンズの紋章が浮き彫りにされている点ぐらいだ。

もし実在したら、人間など丸呑みにできそうなほど巨大な狼の頭部と、それを円形に縁取る蔦と葉。ベレンズに伝わる銀狼伝説が、その由来になっているらしいんだっけな。ゼルは話の中身を思い起こそうとしたが、結局それは叶わなかった。

フェルティアードのものと、何ら変わるところのないような豪奢な部屋に、ゼルはつい目を奪われてしまったからだ。すぐそばに大貴族がいるので、はた目からはそうは見えなかったが、ゼルを含め誰も彼も、その目を忙しそうに辺りに走らせていた。

あの女性も、彼らと共にここまでやって来ていたのだが、彼女は先に謁見の間に入っていっていた。

一通り部屋を眺めていると、最初こそ豪華だとか高そうだと思えた家具を、ゼルは段々と違う視点で見るようになっていた。絵画を縁取る額、手元を照らすための傘のついたランプ。簡素なそれらしか知らなかったゼルの目には、どうも使い勝手が悪そうに映るのだ。

「フェルティアード卿、国王陛下がおいでになられました」

それでも、最後に頭上のシャンデリアに釘付けになっていた時、紋章の向こうから女性が姿を現した。ゼルが勝手に、これは貴族専用なのでは、と推測していた椅子に、腕を組み一人腰掛けていたフェルティアードがゆっくりと立ち上がる。

「入室する時は一列に、わたしが足を止めて端に移ったら、その横に順に並べ」

それだけ告げて、フェルティアードが扉へ向かうと、女性が先にそれに触れた。力を込めたようには見えなかったのに、縦に裂くよ

うに、光の筋が走る。そのまま奥へと開いた扉の向こうには、今までゼルが見た王宮の部屋の中で、一番の広さと高さのある空間があった。

灰色の敷物に沿って立つ円柱は白く、目を動かしただけでは天井まで見ることはできなかった。両壁には、脚立がなければ届かなさそうな位置に窓があり、内部を照らし出している。

真正面は前を歩く青年の背が占めていたが、先の方には階段があり、それを守るように貴族らしき男達が数人、立ちふさがっていた。らしき、というのは、彼らの外套は大木の幹を思い出させる色をしていたうえ、胸も同じ色の布で隠されているという、特殊な形をしていたからであった。体の前に垂れた部分には、ベレンズの紋章が銀糸で縫い上げられている。

フェルティアードに続き、新兵が並ぶ。そこでやっと、ゼルは国王を目にすることができた。

階段の一番上、ゼル達を見下ろすような場所に据えられた玉座。長すぎる背もたれに背を預けることなく、毅然たる表情で彼らを見ていたのは、若い男であった。おかげでゼルは、危なく“醜態を晒す”ことになりそうだった。

自分とそう歳は変わらないのでは、とゼルが感じた国王は、デュレイやエリオのような金髪をしていた。その輝きが神々しく見えるのは、全権力を持った人物だと知っていたせいか。服装こそ、白地に金や銀のモールがあしらわれ、貴族とはまた別の風格を漂わせていたが、肌は服と競っているかのように白い。まるで、ついさっきまで頭の中を占領していた、ゼルが一人で想像した街の女性の肌色そのものだった。

「私、レイオス・リアン・ノル・フェルティアード、及び私めが指導致します新兵、参上致しました」

片膝をつき、フェルティアードが頭を垂れる。伏せているというのに、低い声は広大な部屋によく響いた。その彼を追って、ゼル達も同じように膝を折った。胸に触れた脚に、うるさいまでの鼓動が

伝わってくる。
　若いといっても、この場にいる人間の中で、誰よりも地位が高いのがあの青年であることは、疑いようもなかった。視界が自分の影の落ちた敷物の色で染まり、ゼルは少しだけほっとした。ここで新兵がしなければならない儀式などなかったはずだ。フェルティアードの言葉に耳を傾けながら、ゼルは足元の布の模様を見るのに集中することにした。
「今期兵を代表しまして、我らの持てる武力、知力全て、ベレンズ王国、そして国王陛下の御為に捧げることを、お誓い申し上げます」
　叔父から何度も聞かされていたことその通りだった。ひどく堅苦しい台詞だ。でもこの環境では、少しでも型から外れれば、白い眼で見られることになるんだろう。貴族になることが夢ではあるが、この形式張った会話には、そう簡単に慣れることはできなさそうだ。
　高い位置から、布のすれる音がした。身動きをとったにしては大きすぎる。気になるからと、そう簡単に顔を上げられる状況でもない。
「フェルティアード、それに新兵のみなさん。顔を上げなさい」
　ゼルが望んだ行動の許可は、あっさりと下りた。隣の同期が動くのを察知して、ゼルはそろそろと目線を上にした。玉座を立った国王が、そこにいた。
「きみ達の活躍、大いに期待しています。しかしまず、きみ達には自分の身を大事にしてほしい。無用な争いは慎み、日々の鍛錬に励むように」
　静かな、だが芯のある声だった。フェルティアードのように響きはしなかったが、その言葉は、ゼルに真っ直ぐ届いた。
　国王は女性らしい顔立ち、というわけではなかった。線の細い印象はあったが、緑がかった碧眼は少しも揺らいでいない。王族と自分とでは、歳が近そうでも天と地ほどの差があるとわかっている。しかし、身分が違うだけでこんなにも変わるものなのか。
　と、突然左の腕を小突かれた。エリオだ。何だろう、と思う前に、

ゼルは気付いてまた頭を下げていた。何のことはない、先ほどの国王の言葉に従う意を表すため、フェルティアードとゼル以外の新兵が、再度伏せていたのだ。

くすり、という笑い声。静寂の中でのそれは、十分すぎるぐらいに聞こえた。ゼルに向けられたものであることは、この状況下では間違いなかったので、その声に小馬鹿にしたような色があったのか、それとも全く純粋におもしろかっただけなのか、ゼルには想像する余裕などなかった。

何よりも、これでフェルティアードに目をつけられてしまったのは確実だ。国王陛下が笑ってくれたからいいものの、皆の行動に遅れて倣うなど、失礼極まりない。恥ずかしさと悔しさで、顔が熱くなった。

高い音を鳴らして、国王の靴が段に下ろされた。歩み寄ってくる彼に、動いたのはフェルティアードだ。国王が降り切る頃を見計らったように、悠然と起立する。再度膝を折っていた新兵達も、また直立の姿勢をとった。国王はフェルティアードの前に立つと、そっと右手を差し出す。

「近く、貴方に頼ることになりそうだ。その時はぜひ力を貸してくれ」

「承知致しました」

見上げてきた王に、フェルティアードは皮手袋を取り、その手を握り返して礼をした。その彼に、王は「気をつけて」と囁いたが、それは二人以外に届くことはなかった。

そのまま席に戻るかと思いきや、国王は新兵達にも握手を求めてきた。フェルティアードの隣にいた青年が、救いを求めるように彼を見ると、彼はわずかに目を開けて、小さく頷いただけだった。

青年のぎこちない動きの握手を終えると、国王は順にこちらへやって来る。やはり全員と交わすつもりらしい。

これ以上の失態は犯すまいと、ゼルは早くに皮手袋を外していた。自分の前に国王が立ち、にこやかに手を差し伸べてくる。その微笑

が、さっきの笑いの続きのような気がして、ゼルは気を紛らわせるため、不必要なぐらいに王の手を握り締めるところだった。
「フェルティアード」
大貴族の名を呼んだのは、玉座に戻ろうとしていた国王ではなかった。見れば、階段の下部に男がいる。瑠璃色の法衣を着込んだ彼は、目だけを彼に向けていた。
「きみに話がある。彼らを帰したのち、わたしの部屋へ来てもらいたい」
ややしわがれてはいたが、深みのある声の催促に、フェルティアードは短く、だが明瞭に了解の意を伝えた。
顎先だけにある髭が特徴的な、猫背気味なその男は聖職者らしい。しかし一介の聖職者が、国王のすぐそばに、数人の男達に守られて居られるわけがない。ということはあの人は宰相なんだろう。フェルティアードとは違う、心の奥を探られるような目つきに、ゼルは不安に駆られそうになった。
国王が退出の許可を下すと、フェルティアード達は深々とした礼を残し、元来たように王の間を後にした。

「こっ、国王陛下にお会いした！？　ごほっ」
「デュレイ、何つっかえてるんだよ、落ち着けって」
席を立って手を伸ばし、ゼルは向かいに座る友の背を叩いてやった。口に入れたばかりの米を、上手にのどに引っかけてしまったようだ。
「あ、ありがと、ゼル。でもすごいなあ、さすがは大貴族だ。新兵全員の代表なんだね」
目元ににじんだ涙をこすって、デュレイはやっと顔を上げた。ゼルもほっとして、腰を下ろして夕食を再開する。メンクの宿と同じように部屋で楽しんでいる食事は、王都ということもあってか品数も豊富だ。

「ぼくもびっくりしたよ。フェルティアード卿と顔合わせしたと思ったら、その次に国王陛下とだなんて。おかげで早速目をつけられたみたいだし」
「うん？　何かあったのか？」
ゼルはデュレイに、フェルティアードの部屋でのやり取り、そして国王と対面した時の一件を、少々恥ずかしかったが事細かに教えた。国王と握手を交わしたことは、またデュレイがむせることになりそうだったので、彼の手が止まるのを見て、思い出したように付け加えた。
聞き終えたデュレイは、予想通り握手の話で、血の気が失せてしまったように見えた。その衝撃で前半の話を忘れたのではないかと思ったゼルは、そっと彼に問いただしてみた。
「デュレイ、大丈夫か？　今のでぼくの話、吹っ飛んでないよな」
「えっ、ああ、大丈夫だ忘れてないよ。いや……すぐには信じられないや。その点では、フェルティアード卿のところじゃなくてよかったと思うね」
「きみがその場にいたら、卒倒してたんじゃないか？」
「ほんとだよ」
苦々しげに笑ってから、デュレイは話を戻した。
「でもさ、顔を覚えられたってことは、いいことをしてもすぐに気付いてもらえるんじゃないか？　あの方だって何にでも厳しいわけじゃないだろうし」
「それにしたって、あの言い方はどうかと思ったぜ。こっちのやる気が削がれるじゃないか」
「まあ、そうだけど……」
言葉の矛先が大貴族に向いていることに、デュレイはたじろいでいるようだ。
フェルティアードの話になって、ゼルはふとあることを思い出した。そう言えば、フェルティアード卿は自分のことをル・ウェールと――出身地名で呼んでいたな。

見知った村や町にしか行かなかったゼルにとって、村の名が自分を指すことには違和感があったのだ。上か下のどちらか、あるいはゼル、と親しみを込めて呼ばれることしかなかったのに。
ベレンズでは、遠方から来る人は地名で呼ばれる傾向でもあるんだろうか。ゼルがフェルティアードに村の名で呼ばれたことを教えると、デュレイは、意外そうな顔で答えを返してきた。
「へえ、きみのことそう呼んだのか。地名を呼称にすることはあるけど、一般的には下の名前かな」
「ふうん。なんでおれのこと地名で呼んだりしたんだろ」
「多分、ウェールって名前が珍しかったんじゃないかな」
確かに小さい村だし、名を轟かせるような特産品もない。あの時のフェルティアード卿も、ウェールと聞いて詳細を尋ねてきたんだっけ。
しかし、“ル・ウェール”は“ウェールの者”という意味を持つだけだ。ジュオール・ゼレセアンという一個人ではなく、ただの“その地から来た人間”としか見られていないようで、ゼルとしてはいい気分ではなかった。
「物珍しいからだなんて、こっちとしちゃたまったもんじゃないよ」
呆れて、だらしなく椅子の背にもたれかかる。あくまでぼくの想像だぞ、とデュレイが言ってきたので、わかってるよ、と軽く返した。
「そうだ、ゼル。きみもこれから下宿を探すんだろ？」
この白鳥亭に世話になれるのも、あと数日になっていた。それまでに、これから自分が暮らす場所を探さなくてはならないのだ。
「ああ、そのつもりだよ。でも明日明後日は探す時間ないだろうな。もう王宮に通わなくちゃならないもんね」
「じゃあさ、ぼくが住む予定の下宿屋の人に、空きのある所がないか聞いてみるよ。なるべく早いうちに決まったほうがいいもんな」
それを聞いた瞬間、夕食を楽しむために押さえ込んでいた焦りが、すっと軽くなっていった。ここを出なくてはならない期日になるま

で、下宿か新しい宿かを見つけられなかったらどうしようか、と思っていたのだ。ゼルは勢いよく跳ね起き、
「本当か！　お願いするよ、デュレイ」
「ああ。うまくいけば、最初の休日までに見つかるかもしれないから、その日になったら教えるよ」
「ありがとう」
生活するための不安の種を消し去ってくれたデュレイに、ゼルは手をつけていなかった揚げ物を、彼の皿に乗せてやった。

第三節

そのきしんだ扉の音は、聞く者に壊れそうだ、といった不安を抱かさせることはなく、逆に重ねてきた歴史を感じさせるようだった。

ゼルはその音に、入る時こそどきりとした。だが今ではエリオが押し開ける様子と、彼に案内された神殿の内部を、振り返ってもう一度見回す余裕があった。

王の間のものと似た造りの柱とは別に、大広間を挟み込むように通った廊下の壁側には、エリオの言っていた彫刻が並んでいた。彫ったものを置いたのではなく、石壁から直に彫り上げたようだ。廊下の先の部屋は神官しか入れないが、名のある彫刻師が作り出したのであろう作品は、すべて見ることができた。

入り口から数歩進んだところから祈りを捧げる祭壇まで、優に三十脚は越える長椅子が整然と置かれている。敷物はなく、祭壇までまっすぐたどり着ける通路が長椅子によって縁取られているのは、神官が行う儀式のためだろう。

そして顔を上げれば、描かれている絵も見えないほどに高い、吹き抜けの天井が広がっていた。あの絵画は、二階部分の窓際に通っている通路に上がれば見えるのかもしれない。

窓は、無色透明のものと多彩な色のガラスから成っていて、そこからは屋外に負けじと、大量の光が取り入れられていた。

それでも、若干暗いのは避けられていなかったようだ。高い位置にあったとはいえ、開ききった扉から真っ直ぐ届いた日差しの直撃は、三人の目を細めさせるにはたやすかった。一緒に流れ込んできた風は、もうすっかり暖かくなっている。

広場に出たゼル達は、並んで門へと歩き出した。ベレンズに着いたあの日、ゼルが神殿と一緒に見たあの門だ。広場の奥にある噴水目当てなのか跳ね回る子ども達や、祈りを捧げに来たらしい年配の人々とすれ違う。今日まで何度かこの敷地前を通ったが、その時よ

り人が多くいるように感じるのは、この天候のせいもあるのだろう。
「今日は一段とあったかいや。な、デュレイ」
手で太陽を遮っていたデュレイを見上げ、ゼルが言った。
「ああ。でもそろそろルストアになるからなあ。ちょっと風も強いし、今度はしばらく雨になりそうだね」
「確かに、今日の風は少し湿気があるね。雨季も近いみたいだ。ところで二人とも、今日はこのあと何か予定はある？」
エリオと自分の休日は同じだ。それに今回のキトルセン大神殿の見学は、自分のためにエリオの好意から決まったものだった。そのために使うつもりだった休暇の日に、ゼルは他の用事など入れるはずがなかった。
「ぼくは何もないよ。それよりもきみだよ、デュレイ。やっとぼくらと休みが合ったんだからな」
本当は二人だけの予定だったのだが、デュレイを誘ってみたのはゼルだった。しかし隊が違うこともあり、なかなか休みの日が重ならなかったのだ。あまりに延びてはエリオに申し訳ないと思い、デュレイのことをエリオに話すと、彼はデュレイも行ける日になるまで待っている、と言ってくれた。おかげで、こうして三人一緒に出かけることができたが、結局あの日からふた月が経とうとしていた。
「なんだよ、何もないから来たんじゃないか」
「本当は用事があるのに、ないふりでもしてるんじゃないかと思ってさ」
むくれたようなデュレイに、ゼルはからかいを込めて返してやった。それを見て、エリオがほっとしたように口を開く。
「よかった。二人にうまい店を教えたくてね」
「へえ、実はぼくもあるんだ」
昼の食事について話し始めたエリオとデュレイが、ゼルは少しうらやましかった。どちらともベレンズに住んでいるわけではないが、自分が住んでいた村に比べたら、距離的に近い場所にある町の出身だ。その分ベレンズに行く機会も多かったのだろう。

叔父はよくベレンズに行っていたが、ゼルはそれについて行くことはなかった。行ってみたいとは思っていたものの、いざ叔父が出かける時になると、やはり村で子ども達と遊んでいたい、という気持ちが強くなってしまうのだ。何度か叔父と一緒に行ってればよかった、と後悔したが、今思っても仕方がない。これから詳しい二人に教わればいいんだ、と気を取り直し、ゼルは二人に割って入った。

「で、どっちのおすすめの店に行くんだい？」

「今日の案内役はぼくだからね。ぼくが知ってる店に連れてくよ」

デュレイはその言葉に気落ちした様子もなく、逆に意気込んだように、

「よし、じゃあ次に休みが同じになったらおれの番だな」

と、ずいぶん張り切っているようだ。

「期待してるぞ、デュレイ」

「まかしとけ」

ゼルの声に偉そうに胸を張った様は、頼られて得意になる子どもそのものだ。だがその顔にさっと影が差した。デュレイの所にだけ雲の影が落ちたのかと、ゼルが空を仰いだぐらいだ。そろそろとデュレイの首が巡り、ゼルの頭越しにエリオの方を向いたところで止まる。その目は、まるでエリオは実は殺人犯だったのだ、とでも聞いたかのように、恐ろしさから震えているように見えた。

「エリオ、きみが知ってるその店って……なんて名前？」

「ん？　ハベラってとこだよ」

当然ながら、悪びれた風など一切ない透き通ったエリオの表情は、ゼルには計り知ることのできないほどの衝撃を、デュレイに与えたようだった。大柄な身体が、めまいでも起こしたようにぐらつき、その腕がゼルにぶつかった。ゼルはその様子に目を丸くし、

「おいデュレイ、もしかしてそのハベラって店は」

「おれが行こうとしてたとこと同じじゃないか……」

地面に倒れ込まなかった代わりに、デュレイは片手で目をすっかり覆って呻いた。エリオは、なぜデュレイがそんな反応を見せるの

かと不思議に思ったか、彼を覗き込んでいる。
「デュレイ？　きみも好きな店なんだろう？　その……。ゼル、どうして彼落ち込んでるの？」
　店の名前を言っただけなのに、デュレイの気分を損ねたように見えるのだ。エリオが実に真面目な顔つきで聞くので、ゼルはデュレイの落胆ぶりに笑いをこらえることはできなくなった。
「エリオ、きみが気にすることなんかないよ！　こいつは自分が案内してやれなくて、がっかりしてるだけなんだから」
「ああ、それでか」
　やっと笑顔になったエリオにも、ゼルは笑ってしまった。デュレイがこうなるきっかけを作ってしまった当人ということで、極度に心配したのもわかる。だがデュレイの性格を知っているゼルにとっては、正直なエリオの反応は面白おかしく映ってしまうのだ。
　本当は肩でも叩いてやりたかったのだが、背伸びしてもとてもそこまで腕は届かない。仕方なく対象を背中に変え、ゼルにぶつけた腕をさすっていたデュレイを慰めながら、ゼルはエリオに店に案内してくれるよう促した。
　普段なら義務である帯剣もない今日は、心なしか足取りも軽くなるようだった。外套も皮手袋も、デュレイに紹介され無事住むことができた下宿に置いてきたのだが、それがなくても汗ばむくらいだ。さっきまで、外より少し涼しい神殿の中にいたというのに。
　そんな陽気とは、完全に正反対の空気を漂わせるデュレイを元気付けようと、ゼルは街並みの中で気になったところについて、彼を質問攻めにすることにした。あの建物は宿なのか、それとも人を集めて見せる物でも置いているところなのか。王都にも、自警団のようなものがあるのか。
　そうしている内に、デュレイの顔にいつも通りの輝きが戻ってきた。ベレンズに関しての知識は無いに等しいゼルに、そんなことも知らないのか、などということも言わない。むしろ、自分の知っていることが友の役に立っていることが嬉しいらしく、エリオが「着

いたよ」と足を止める頃には、ゼルの一つの質問に対し、三つも四つも答えが返ってくる有様になっていた。
「それでな、もう少し歩くとまた大きな館があるんだ。以前はさる貴族の家だったらしいんだけど、今はベレンズ唯一の博物館になっててな」
まだ答えを連ねる彼をなだめて、ゼルが店に着いたことを告げると、デュレイは頭から水を浴びせられたかのようにゼルを見つめ、そして店に向けられたゼルの視線を追うと、一人驚きの声を上げた。
「えっ、もう着いたのか？」
「もうって、だいぶ歩いたと思うぞ。なあエリオ」
「うん。ゼルと話すのに夢中になってたんだね、デュレイは」
エリオとデュレイが知っていて、なおかつゼルを連れて行こうとしていたその店――『ハベラ』は、交差する街道の角にあった。席の大半が屋外にあり、平屋の店の内部にはカウンター席しか見当たらない。
店からせり出した布屋根の影が落ちている席を、エリオは選んだようだ。屋根の範囲外にあるテーブルの真ん中には日傘が通っており、その影は椅子までもすっぽり覆っている。夏の強い日差しや、突然の雨を遮るためなのだろう。今日は雨が降る様子もないし、暑くてたまらないというほどの気温でもないためか、その傘をたたんでもらってお茶を楽しむ客もいた。もうすぐ昼という時間だが、席の数が多いせいもあるのか、混んでいるようには見えなかった。
「さ、どれにする？」
人数分の水を持ってきた店員から、食事や飲み物の名前が記された冊子を受け取り、エリオはそれを開いて丸テーブルの真ん中に置いた。
「おれはいつものこれだな」
「鶏のオーブン焼きか。ぼくも好きだよ」
メニューの一行を指差し、まず選び終わったのはデュレイだ。飲み物も選べるからな、と付け加えて、彼は冊子をゼルに押しやった。

まだエリオが決めてないじゃないか、と顔を上げると、エリオは、
「ゼルはここ初めてだもんね。じっくり見て選ぶといいよ。ぼくはもう決まってるから」
と笑顔を返すだけだった。
「あとな、ゼル。ここはパンを好きなだけ食べられるんだ。チーズや木の実が入ってるやつとか、たくさん種類があるんだぜ」
相づちを打ったゼルに、別料金だけどな、と囁いたデュレイに苦笑しながら、ゼルはメニューに目を戻した。
角のよれたページ自体は二枚しかないが、エリオが開いてくれた見開きとその前のページは、すべて食べ物の一覧だった。最後のページには飲み物の種類と、デュレイが言っていたパンの食べ放題についてが書かれていた。
「へえ、魚料理もあるのか」
「そうだよ。種類もたくさんあるんだ、ここは」
「おれはそこまで好きじゃないけど、食べてみたらどうだ？」
ゼルは机上にひじをついて唸った。空腹で仕方ないわけじゃないのに、どの料理名もうまそうに見え、じわりと唾液が口にあふれてくる。デュレイが決めたオーブン焼きというのも気になった。鶏以外にも、羊の肉を使ったものもある。野菜も肉もどっさり入っていそうなスープ、香辛料をまぶしたころもで揚げる魚。目移りしてしょうがない。
ゆっくり選んでいいとは言われたが、そう長く待たせても悪いし、何より自分も早く食べてみたい。ゼルは冊子を睨むと、姿勢を正してある一行を指差した。
「よし、ぼくはこれにする！」
「おっ、セリエのドリアか」
興味深そうに、デュレイが料理名を読み上げる。
「セリエ以外にも、具に魚介類が一杯入ってるんだよ。それじゃゼル、飲み物は？」
料理ばかりに目が行って、飲み物も選べることをすっかり忘れて

いた。慌ててページをめくり、馴染みのない名前のものは無視し、無難なお茶にすることにした。そんなんでいいのか、と、さももったいなさそうにデュレイが言ったが、これはどんな味がするのかなんて聞いてたら、また時間を食ってしまう。
「いいんだ、早く料理を食べてみたいし」
「決まりだね」
エリオは、ちょうどパンを配りに席を回っていた店員を呼んだ。彼は少々お待ち下さい、と叫ぶと、早足で店内に戻って、バスケットの代わりにペンと紙を持って現れた。
「お願いします。まず、セリエのテザンチーズドリアを。飲み物はキーネで」
――どっちが店員なのかわからないな。エリオの話し方は、さらさらと流れるようだった。この店に慣れているのと、彼の丁寧な態度が偽物でないことがよくわかる。つっかえるなどとは程遠い流暢さで三人分の希望を伝えてから、彼は最後に例のパンも注文した。
ゼルはエリオの頼んだ料理の名に耳を傾けていたが、ずいぶんと長い名前で、全部聞き取ることはできなかった。かろうじて、肉の煮込み料理らしいことだけ判断できただけだった。
注文を取った店員は、店の奥に引っ込んだかと思うと、あのバスケットを抱えてゼル達の席に帰ってきた。真っ白な皿を各々の前に置き、パンの種類を述べ上げる。ゼルはとりあえず、店員が一番最初に言った、小さく切った肉が入っているパンを頼んだ。その後に続いたのがどんな名前だったのか、覚え切れなかったせいもあったが。
パンは食べやすいように、小さく切り分けられていた。皿と一緒に手元に置かれた、濡れた木綿布で軽く手を拭いて、ゼルはまだ温かいパンを取り上げた。
「デュレイ！」
聞き覚えのない声が友の名を呼んだので、ゼルはついその方向を向いていた。客がまばらに座る席の向こう、街道から走ってくる人

がいる。
「あれ、ミックじゃないか」
「同じ貴族に教わってるのか？」
「いや、下宿が近くてね。時々会うんだよ。やあ、ミック！」
長く走っていたのか、顔を赤くし息を切らしているミックという青年は、空席にぶつかりながら歩みを緩め、デュレイの前で長い深呼吸を一つした。跳ねの目立つ短い黒髪は、走っていたせいなのか元からなのか、ゼルにはわからなかった。
「よかった。確かきみ、フェルティアード卿のところに友達がいるっていってたよな」
「ああ」
デュレイはミックの目を見たまま答えたが、残りの二人はお互い顔を見合わせていた。ミックの言う“フェルティアード卿のところにいる友達”は目の前にいるのだが、もちろん彼が気付くはずもない。ゼルは、ここで割って入ってもな、と思い、黙って話の続きを聞くことにした。
「その人をつてに、ウィッセルって人に伝えてくれないかな。なんでも、幹部兵のどなたかが、彼に話があるって」
「えっ」
当然、声を上げたのはエリオだった。口にパンを含んでいたせいでくぐもってはいたが。
「きみ、ウィッセルって知ってるの？」
「いや……その、ぼく、なんだ」
「本当か！　よかった、すぐ見つかって」
安堵に満ちたミックの顔は、しかしまたすぐに曇ってしまった。デュレイが声をかけると、ミックは困ったようにぼそぼそとしゃべり出した。
「実はもう一つ、フェルティアード卿の人に頼みたいことがあってね。これは至急なんだ。神殿のある神官が、フェルティアード卿に話があるらしくて。ぼくなんかより、あの方のところの人ならすぐ

呼んでこられると思ってさ」
　エリオは答えあぐねているようだった。それもそうだ。ミックの発言は、指導されているならば、隊長である貴族の居場所はわかるだろう、という前提のもとにあった。自室でなくとも、それ以外によく行く場所を知っていると。
　他の貴族はそうかもしれないが、あのフェルティアードには通用しなかった。直接の指導は、各貴族が所持する幹部兵が行っていたものの、フェルティアード本人に用ができることも度々あった。だが、顔合わせの時に言っていたように暇ではない、というのは事実だったらしく、彼が自室にいたことなど一度たりともなかったのだ。すれ違う騎士や貴族、果ては侍女や給仕係にまで行方を聞いたほどである。ミックが行こうとゼル達が行こうと、そう大差はないだろう。
　そう思っていても、ゼルは口に出すことはなかった。言ったところで、彼の腰が引けるのはわかりきっている。この日を迎えるまでの間、ゼルは同期の者達が――同じフェルティアードの指導下の者でさえも、彼を恐れていることを嫌というほど感じていた。
　兵に対し厳しいのは、どの貴族も同じだ。しかし、勉学や稽古が終われば、労いの言葉をかけてくれる。フェルティアードは会うことが極端に少ないばかりか、会ったと思っても終始あの固い表情だし、口を開けば作法や礼儀の注意、忠告しか出てこない。指摘してくれるのはありがたいが、神経を逆撫でするような言い草に、ゼルは小さな怒りと共に、疑心も抱いていた。本当にこの貴族は、ジルデリオンという位にふさわしい人間なのか、と。
　一介の地方民が、そんなことを考えるのはおこがましいのかもしれない。だが逆に、一介の地方民にまでそう考えさせるあの態度は何なのだろう、とも思うのだ。
「ウィッセル君の用事は、今すぐじゃなくてもいいんだ。多分その呼んでるって方も、今は昼食の時間だろうからね。ただ、フェルティアード卿のほうはそうもいかないみたいで」

エリオがここで王宮に出向き、フェルティアードに会った後に彼自身の用を果たすのが理想だろう。フェルティアードがすぐに見つかればの話だが。そうなり得ることがまず不可能なのは、エリオにも簡単に予想できたに違いない。でなければ、答えに詰まったりするものか。

「うん……。わかった、ぼくが」

「エリオ、フェルティアード卿の用事はぼくが行くよ」

今まで黙っていた青年が声を大にして言うので、ミックはその小柄な男に目を移した。

「きみも、もしかしてフェルティアード卿の？」

「うん。だからエリオ、きみはゆっくり食べてろよ」

そう告げたゼルは、すでに席を立っていた。エリオはすがりつくようにゼルの腕をつかみ、

「おいおい、きみに教えたくてここに来たのに、本人がいなくなっちゃ意味がないじゃないか」

「だってエリオ……フェルティアード卿がすぐにつかまると思うか？」

ゼルはそっと声量を落とした。

「あの方を探すのに王宮を走り回ってたら、きみの用事に支障が出るじゃないか。ああ、一応ぼくの分のお金は置いてくよ」

「ゼル、そうじゃなくって……」

細かい値段までは覚えていないが、十分お釣りがくる分の金をテーブルに置くと、エリオは呆れたようにゼルを見上げてきた。話があるのにうまく表現する言葉が見つからなかったようで、結局エリオはため息をつくだけに留まった。

「じゃあ、フェルティアード卿の件は、きみにお願いしていいのかな？」

「ああ、ぼくが行く。デュレイ、ぼくの分食べていいからな」

「馬鹿だな、そんなに食えないよ」

「嘘つけ、余裕だろ」

ぽんと彼の肩に手を乗せて、ゼルはせめてもの腹の足しにと、パンを口に放り込んだ。

第四節

ゼルはまず下宿に戻り、外套と皮手袋を引っつかんで王宮へ走った。今回はいつものように兵として赴くわけではないので、剣は持たなかった。門番には兵の証である、ベレンズの紋章が描かれた札を見せ、早足で入り口へと進んだ。試験の日は人気のない庭だったが、今では騎士や女官が散歩を楽しみ、庭師が草木の手入れをしているのも目に付く。

そんな和やかな空気の中、ゼルは正面玄関ではなく、数ある裏口の中から、フェルティアードの部屋に一番近いところへと向かっていた。ゼルにとっては、あの重苦しい玄関から入るよりも、こじんまりとした扉から入るほうが気が楽だった。

近いと言っても、大貴族である彼の部屋は奥まった場所にあり、そこからまたしばらく歩かなくてはならなかった。彼の態度に難癖をつけられても、部屋の場所にまでは文句は言えない。それに、彼が部屋にいる可能性はまずなかった。

扉のいかめしい装飾は、今ではフェルティアードの態度そのものを表しているように見えた。ノックをする前から、ゼルは諦めの混じったため息をつき、あの取り付けられた鉄の輪で戸を叩く。間を置いてもう一度叩いてから、またため息をついた。

（まあ、忙しいんだろうけどさ……）

こうもつかまらなさ過ぎるのも困るのである。

今度ばかりは自分ではなく、フェルティアード本人に対する、しかも至急の用なのだ。廊下で会う人々全員に、彼の所在を聞いて回るゼルの足取りは、焦りから次第に早くなっていった。

こういう時に限って、有力な情報が得られないものだ。見かけたという場所に行っても本人はいない。懐中時計などという高価なものをゼルが持っているはずもなく、王宮に入ってからどれだけ時間が経ったのかさっぱりだ。これでは、一般兵が王宮に留まれる刻限

になる前に、見つけることはできないのではないか。
ゼルは、そんな不安を募らせる自分を少し可笑しく思っていた。相手はどうも好きになれない人間なのに、なぜこんなにも必死になっているのだろう。たった今侍女から聞いたフェルティアードの行方を、一瞬だけ頭の端に追いやって考えてみる。答えは案外すぐにわかった。おれは、自分の感情と成すべきこととは、切り離して考えているんだ。
気に食わないからって、フェルティアード卿が不利になるように、やらなきゃいけないことを放棄するなんてできない。大体この用件は自分が進んで引き受けたんだし、その責任はちゃんと――
「わっ！」
どうも考え事に没頭し過ぎていたらしい。廊下の角からぬっと現れた影に気付けず、早足どころか駆け足になっていたゼルは、盛大に正面衝突してしまった。
「おっと！　大丈夫かい」
「す、すいません」
じわじわと痛み出した鼻を押さえ、ゼルは相手の顔を見たが、にじんだ涙で歪む視界では、色の判別しかつかなかった。どこかで見たことのある頭の色。ゼルには、まずそれしかわからなかった。
「したたかぶつけたみたいだな。血は出てないか」
声のする場所が低くなった。わざわざ自分のためにしゃがんだようだ。泣いたわけではないが、涙を見られるのは恥ずかしい。急いで両目を腕で拭き、「大丈夫です」と力を込めて答えた相手は、剣術試験の時ゼルを部屋に案内し説明をした、あの偉丈夫だった。
「おや、きみは確か試験で」
夕日のような髪と口髭に鋼色の瞳は、間違いなくあの時の貴族だった。何より、彼の今の言葉が裏付けている。しかしゼルはにわかには信じられなかった。試験時に一時だけ見せた、緊張を解くように和らいだ顔。それよりさらに緩んだ笑顔が、目の前にあったからだ。

「はい。あの時はお世話になりました。あの、わたしのほうこそ、ぶつかりなどしてすみませんでした」
立ち上がった彼を目で追いながら、ゼルはまだむずむずする鼻をもんだ。やはり背の高い人だ。その上横幅も大きい。フェルティアード卿もそれなりに体格がよかったが、この人の前では細く見えてしまう。
「なあに、おれなら鎧を着た兵士がぶつかったってびくともしないさ。えっと……、確かゼレセアン、だったかな？」
「へっ？　えっと、はい、そうです」
つい素っ頓狂な声を上げてしまったが、彼は気にも留めていないようだった。頭をかき、探るようにゼルを見回す貴族が、自分とは軽く二十は歳が離れているはずなのに、まるで同年代のように感じる。
それにしても、彼はなぜ自分の名前など知っているのだろう。そんなに目立つ名前だったのか。
「本当に大丈夫か？　鼻」
「えっ。はい、なんとも……」
なくないですけど、と続いた呟きは、無意識のうちに鼻を覆っていた手の中に吸い込まれた。かの貴族は眉をひそめ、嘘ついてないか？　と心配そうな眼差しだ。
「でもなあ、そう言うやつに限って、重症だったりするんだよな。念のためだ、医務室に連れてってやるよ」
「いえ、あのっ」
否応なく肩を抱かれ、歩かせられる。心配してくれてるのはわかるが、いささか強引だ。
「さすがに大げさすぎて嫌か？　医務室は」
歩くのに多少遅れを取ったのを、ささやかな抵抗と受け取ったらしい。彼はすぐに足を止めた。用事があるのを伝えられると、ほっとして口を開こうとしたのだが、それもつかの間だった。
「ああ、おれの部屋によく効く塗り薬があるんだ。そっちにしよう」

友達でも連れ込むのかとゼルが勘違いしそうになるほどの、気軽で明る過ぎる言葉だった。彼は大股に歩き出す。いや、ゼルがそう歩かざるを得なかっただけで、彼は普通の歩幅だった。
ゼルはもう一度この状況を見直して、自分は彼の友人などではないし、たかが鼻を痛めた程度で薬なんて、しかもそのために大貴族の部屋に行くなど、できるはずがないと言い聞かせた。
そう、この貴族と話す間、ゼルは彼の外套を留める金具の中心で輝く、宝石の色をしっかりと確認していたのだ。それが、フェルティアードのジルデリオンに次ぐ階位を表す紫の石、ヴェルディオであることを。
お邪魔するなんてとんでもないとか、自分はただの兵士ですとか、やっと口に出せた自分の意見が少しずつ、断るための理由ではなくなってきているような気がしたが、とにかくゼルは彼に対し、あなたについていけない、と伝えたかった。だが当の本人は楽しそうに笑い、
「気にするな。同じく陛下に仕えてる身だ、上も下もあるものか」
と、取り合ってくれない。試験場の彼とはえらい違いだ。どちらが本当の顔なのだろう、と困惑もした。でも、きっとこっちが素顔なんだろう。これが繕ったものだったとしたら、ある意味フェルティアード卿より恐ろしい。
とにかく、このまま彼と一緒に行くことはできない。フェルティアードへの至急の言伝があるのに、ゆっくりしている暇などないのだ。好意を示してくれた彼には、少しばかり悪いと思ったが、ゼルは声を大にして彼に事情を話すことした。
「あの！　真に申し訳ないのですが、急用がありまして」
自分の肩をすっかり覆っていた大きな手から、さっと力が消えていくのをゼルは感じた。それに合わせて歩くのをやめると、彼もそれに倣う。
「ああ、それで走ってたのか。すまないな、無理強いさせちまって」
彼はゼルから離れて間を置いた。どうやら解放してくれたようだ。

「いいえ、とんでもないです。……あの」
「なんだい？」
せっかくなので、フェルティアード卿の居場所を、彼にも聞いてみようと思った。しかしゼルは、そこで言葉に詰まってしまった。彼の名を言おうとしたのだが、そういえば名前など聞いていなかった。向こうは自分の名を覚えていたようだったが。
突然質問するのもぶしつけな気がする。だが彼は、自分が発言するのを待っているはずだ。厳しさの欠片もない、彼の柔らかな笑みが、今のゼルにとっては重しになっていた。
「おっとそうか、きみはおれを知らないんだったな。おれはゲルベンスだ」
どう切り出そうか迷っていたゼルに助け舟を出したのは、そう名乗って素手を差し出してきた彼本人だった。
「ゲルベンスのヘリン・ディッツ。よろしくな、ゼレセアン君」
「あ、よろしくお願いします、ゲルベンス卿」
ゼルはその手をおそるおそる握ったが、ゲルベンスの方はがっちり力を込めてきたので、指の一本も動かせなかった。それに差が大きすぎて、自分の手など爪の先しか見えていない。にこにこと笑っている辺りから、これが彼の普段通りの力らしい。
「で、おれに何か？」
急用がある、と告げて口ごもったので、自分に聞きたいことがあると予想していたようだ。ゼルは手袋をはめなおしてから、ゲルベンスに顔を向けた。
「はい。実は今、フェルティアード卿を探しているんです。どこにおられるかご存知ではありませんか？」
「ああ、あいつなら確か、誰かに呼ばれたって言って、あっちのほうに行ったな」
と、ゲルベンスが指差したのは、ゼルが目指していた方とは正反対だった。当のフェルティアードはそこにいないのに、思わず彼の指先を目で追ってしまう。彼に会っていなかったら、またいない場

所へ行くために体力を消耗するところだった。
今までは誰に聞いても、その情報の最後に「多分」とか「おそらく」とか、欲しくもない言葉がついて回った。ゲルベンスにはそれがなく、ゼルには確証に満ちた返答であると感じられた。
（そうか、この人はフェルティアード卿のことを）
なぜこんなにも信じられる気になるのか、ゼルも最初はわからなかった。その根拠がゲルベンスの、フェルティアードに対する台詞の中にあったことに気付いた。
「ありがとうございます、ゲルベンス卿」
そんなことに頭を使うよりも、ゼルは眼前の大貴族に礼を言うことを優先させた。一歩引いて、深く頭を下げる。
「あいつ自分の部屋にずっといることなんかないから、きみらも大変だろう。ゼレセアン君」
はい、とゲルベンスと目を合わすと、彼はとびっきりの知恵が浮かんだとでも言うように、親指で自身を指した。
「あいつがどうにも見つからない時は、おれのとこに来て聞いてもいいぞ。おれもいつも部屋にいるわけじゃないが、フェルティアードよりはよっぽどいる方だ」
それを聞いて、ゼルはつかえていたものが外れたような、すっきりした気分になった。フェルティアード卿にたどり着く道は、今までは不安定だったが、この人のおかげでぶれることがなくなりそうだ。
「では、今後は是非そうさせて頂きます。重ねてお礼申し上げます、ゲルベンス卿」
また礼をすると、おいおい、と心底つまらなさそうな声が降ってきた。意識するより先に、鼓動が速くなる。さっきと何も変わらない礼をしたはずだが、何か間違えたのか。
姿勢を正そうにも、体はすっかり固まってしまっている。それにさらに追い討ちをかけたのは、頭部に降りた温かさだった。
「そうかしこまられるのは苦手なんだ。おれ自身と、フェルティア

ードの指揮下にいるやつにされるのが、特にな」
あの巨大な手が、自分の頭に乗せられている。それに気付いた途端、ゼルは平衡感覚を失って倒れ込むかと思った。前後左右、どの方向に倒れるかも、自分でわからないほどに。
「礼儀正しく気ぃ使うのもいいが、おれにはそこまでがちがちにならなくていいぞ。なあ、ゼル君」
がちがちにさせてるのはあなたです！　とゼルは叫びたかったが、縮こまった舌では、それすらもかなわない。その上、彼はデュレイやエリオのように、下の名前を短くして呼んできた。ここまでされては、この貴族が取りたがっている立場に報いる態度を示さなければ、逆に失礼というものだ。
だが、突然そんなことを言われても、すぐに切り替えられることなどできない。自力で硬直を振りほどき、やっとの思いでゲルベンスと視線を合わせると、
「こ、今後とも頼りにさせて頂きます」
ゼルはそう言うだけで精一杯だった。
その言葉から、ゼルなりに堅苦しさを排除したのが伝わったのか、ゲルベンスは笑って腰に手をやった。
「ありがとよ。いらん足止めを食わせちまったな。さ、行ってきな」
顎で合図をされ、ゼルは「失礼します」とゲルベンスに背を向け、廊下を駆けた。小さな背が角を曲がって見えなくなると、彼もまたその場から去っていった。

第五節

廊下の壁際で、二人の貴族が立ち話をしている。その片方がフェルティアードだと認めた時、ゼルは心の中でゲルベンスに謝辞の雨を降らせながら、さらに駆け足を早めたい衝動に駆られた。だがここで音を立てて走ったら、また何か言われるに違いない。ゼルはやや速度を落とし、早足に切り替えた。

完全にこちらに背を向けているわけではないが、フェルティアードの視界にゼルは入っていないだろう。話しているもう一人が、一瞬だけゼルに目をくれる。フェルティアードは、それを追って振り向くことはなかった。

「フェルティアード卿」

ゼルは、そう口にしたところで立ち止まった。だが、少し早すぎたようだ。ゼルと彼との間には、面と向かって話すには大きすぎる隙間ができていた。

呼ばれた大貴族は、まず瞳だけをゼルに向けた。足先から頭まで、凍えるような風が舐め上げてくるのにも似た感覚。回数は少ないにしても何度も会っているはずなのに、彼からあふれ出る重圧感は少しも減ってはいない。気軽にしてくれ、と言ってくれたゲルベンスと会った直後ということもあって、堅苦しさはいつもより倍に感じられた。

「何の用だね、ル・ウェール」

外套をゆらめかせ、フェルティアードはわずかに体の向きを変えた。真摯にゼルの話を聞こうとするようには見えない。その声にも、煩わしげな色が込められているようだ。

「卿への至急の言伝を賜って参りました」

フェルティアードに負けじと、ゼルも背筋を伸ばした。伝言を述べるだけなら、いくら彼でも注意するところなど見つけられないはずだ。今日ばかりは、自分に礼を言うしかできないに決まっている。

ゆっくりと開いた口が、言葉を紡いだ。
「神殿に来て欲しいということなら、今しがた聞いたが」
今度は、内側から体を凍らせられたかと思った。開きかけていた口も閉じられていないゼルに、フェルティアードの話し相手が声をかけた。
「すまないな。そのことについては、たった今わたしが彼に伝えたのだ」
手柄を横取りしてしまったようだな、と申し訳なさそうに呟かれた台詞すら、理解するまでにじっくり二呼吸分は消費した。
あれだけ探し回って見つけたのに、すべて無駄に終わってしまったのか。フェルティアード卿に会い、用を伝え、礼をして彼の元を去る。その些細な、しかし何度も頭の中で反復した予定が、こうもたやすく崩れるとは。
「用はそれだけか」
「……はい」
声を張らせることなどできなかった。低い位置に落ちた視界には、すでにフェルティアードの顔は映っていない。村で暮らすだけなら一生必要としなさそうな、素人目にも高価だとわかる彼の軍服。それと壁の模様を見て気を紛らわせ、ゼルは早急にここから離れようとした。
「こんなに時間を要しては、至急の意味がないとは思わんか。ル・ウェール」
その一言に、今日これまでの行動を否定された気がした。そしてそれは、ゼルにとってはさらに気落ちさせるものにはなり得ず、逆に怒りの元となって、彼の顔を跳ね上げさせた。
こっちだって、できる限りの手を尽くしたんだ。わざとゆっくり来たわけでもないのに、理由も聞かずに言いたいことを言って。好きで急ぎの用を先延ばしにするやつがいるもんか！
そう言おうとして、一息に空気まで吸い込んだが、結局その感情が言葉を伴って出てくることはなかった。口にしたところで、もっ

と辛らつな答えが返ってくることは、なんとか耐え抜いた理性でも予想できたし、何より暴言以外の何物でもない。だからゼルは、唇が震えるのを隠すために歯を食いしばり、フェルティアードを睨み上げるに留まった。

いや、本人にそのつもりはなかった。だが二人の貴族の反応を見れば、睨むという行為に相違なかったことは明白だ。どちらとも、ゼルの表情に目を丸くしていた、という点では同じだったが、それぞれ微妙に違う部分もあった。

一足違いで伝言を先に告げた貴族は、この大貴族に喧嘩を売る気か、とでも言いたげに、ゼルから目を離していなかった。そして当の大貴族は、まさかこの青年が、自分の言葉で怒りの表情を見せてくるとは思わなかったらしい。彼が一度だけ見せた、あの意表を突かれたような顔が、そこにはあった。

しかしそれも一瞬で、身を切るような琥珀色の瞳でゼルを一瞥すると、フェルティアードは話していた貴族に短く別れのあいさつを残し、身を翻して行った。

逃げるのか、と後を追おうとした足を止めたのは、ゼル自身だった。逃げるも何もないではないか。フェルティアード卿は、自分も伝えようとしていた急用とやらに向かったに過ぎないのだ。

(何熱くなってるんだ。しっかりしろよ)

フェルティアードがいなくなって、ゼルはさざ波の立った心が穏やかになっていくのを感じていた。自分がしようとしていたことが、どんなに馬鹿らしいことだったかもわかってくる。何度目かわからぬため息をついたが、今のは自身を落ち着かせるためのものだ。

とにかく、もうここに残ってもしょうがない。多分デュレイとエリオも、それぞれの下宿に戻っているだろう。

「失礼、ル・ウェール君?」

ゼルは心臓が飛び出るかと思った。貴族が一人残っていたのを、すっかり忘れていたのだ。その振り向き様は、呼びかけた貴族までたじろぐほどだった。

「はっ、はい！　何でしょうか」
ゼルはその貴族を見上げた。フェルティアードより背は低かったが、平均的な身の丈だ。ゼルが小さいので、首を上に向けなくてはならなかっただけだ。
「わたしはシャルモールという。きみには本当に悪いことをしたね」
するりと音を立て、色の濃い茶髪が肩を滑った。ゼルに対し礼をしたのだ。目上の者にするような、深々とした礼ではなかったが、ゼルに驚きから来た鳥肌を立たせるには十分だった。
「そんな、とんでもないです！　それに、頭を下げて頂かなくても」
どう言葉を選んでいいかわからないゼルに、面を上げたシャルモールはゼルと目を合わせた。きっちりと分けられた前髪の下で、黒瞳が優しげに輝いている。やや頬がこけているせいで、本当の歳より上に見られそうな気がした。
「きみは、フェルティアード卿の？」
「はい。ゼレセアンといいます」
短い問いだったが、それが“フェルティアードの指揮下の者か”どうか、という意味だとわかったので、ゼルは自分の名も添えて答えた。シャルモールはそうか、と頷き、髭で覆われた顎を指でなでる。
「彼のことを好いてはいないようだね」
つい彼を見つめてしまっていた。確かに強い尊敬の念を感じたことはないが、なぜ会ったばかりの彼にわかるのだろう。ゼルにはわからなかったが、先ほどのゼルの目つきを見た者なら誰でも、この青年がフェルティアードにいい感情を持っていないことは明らかだったろう。
そんな風に見られていたとは露知らず、ゼルは返す言葉に迷っていた。まさか己の師となっている貴族について、本心のままの気持ちを話すことは、さすがに憚られた。かと言って嘘をつくのも、自分を偽るようで気分が悪い。
しかし、当の相手はゼルの発言を待っている様子ではなかった。

フェルティアードが姿を消した廊下の先を眺めながら、シャルモールは続けた。
「変わってしまったからな……彼は」
呼吸と聞き間違うかと思ったその声はか細かったが、ゼルの関心がそれに向くのに、声量の大きさは関係なかった。だから、
「シャルモール卿は、フェルティアード卿と親しいのですか？」
そう聞く直前、彼がこちらに振り向くまでのほんのわずかなあいだ、眩しそうに細められていたシャルモールの目を見ていたゼルは、彼の唇が、大貴族に向けるには到底ふわさしいとは言えない形を作っていたことに、気付くことはなかった。その唇が、嘲りの如き笑みを作っていたことなど。
「いやいや、まさか。わたしなんか彼の足元にも及ばないさ」
ゼルを押しやるように、彼は胸の前に手をやった。彼がその手を下ろす時、ゼルは彼が持つ宝石を見ることができた。貴族の外套よりももっと深い、しかし美しく輝く紺碧。どの辺りの階位だったかは思い出せないが、ゲルベンス卿より二つは下だった気がする。
「ですが、“変わった”とおっしゃったので。以前は今とは違うお人柄だったのですか？」
彼が話題を提示したわけではないのに、ゼルはそのことに踏み込んでいった。
シャルモールは、遠慮がちに口を開く。
「わたしは、貴族になってそんなに年数も経っていないし、昔の彼というのも人から聞いた話なんだ。だからあまり詳しく話しもしないよ。全て真実だと思い込まないでほしい。それでもいいかい？」
これから向こう二年、ずっと付き合う男なのだ。その長い期間を、悪い印象を持ったまま過ごすことを、ゼルは望んではいなかった。
フェルティアード卿ににについて、何か少しでも知ることができるなら。ゼルはためらわずに「お願いします」と答えていた。
「それじゃ、少しだけ。フェルティアード卿は、それはそれは勇ましい戦士だったそうだ」

おとぎ話みたいな語り口にゼルがくすりと笑うと、シャルモールの口も緩やかな弧を描いた。当然、ゼルが見ることのなかったあの笑みとは異なっていた。

彼の口にしたことは、その口調もあってすんなりと頭に入ってきた。しかしそれの意味するところは、“今はそうではない”ということだ。

「特に国王陛下に対する忠誠心は人一倍厚く、今現在の地位に上りつめる前から、彼は“国王の牙”と呼ばれていた。陛下に仇名す者があれば、それを排除し陛下を守ろうとする。まるで伝説に出てくる銀狼が、人になって現れたようだと言われていたらしい」

彼は黒髪なのに、初代キトルセンに力を授け、共に戦ったという銀の狼に例えられるなんて。そのくらい、彼の勇猛さには目を見張るものがあったんだろう。

しかしね、と続いた押さえ気味の声に、ゼルは改めてシャルモールの目を覗き込んだ。

「今の彼は、動く“国王の牙”ではない。平和な世になって、それでも陛下に敵対する者を根絶やしにしようと暴れる銀狼の化身を、陛下は自らお諌めになった。追放もできたが、陛下は彼を石像としてお残しになったんだ」

「石像？」

初対面の貴族に対する言葉としては、留意が足りなかったかもしれない。だがシャルモールは、ゼルの反応に首を縦に振っただけで、咎めることはしなかった。

「そう。陛下に刃を向けようとした者がひるむような、恐ろしい石像だ。彼に動いてほしくはない。しかし、存在することは頼もしい。だから陛下は彼をも、銀狼と同じ伝説としてしまったのさ。かつてそうであったことを示すだけの、石像という伝説にね」

これでわたしの知ってる昔話は終わりだ。シャルモールはそう言い、懐から手に収まるほど小さな何かを取り出した。

「おや、もうこんな時間か。ゼレセアン君、そろそろ刻限だ。早め

に出たほうがいいぞ」
　彼の手中にあったのは時計で、ゼルにも文字盤を見せてくれた。ゼル達一般兵士が王宮に居残ることができる時刻を、短い方の針がそろそろ指そうとしている。
「本当だ。ご親切に感謝します、シャルモール卿。では、失礼致します」
　やっぱりそんな時間になっていたか。ゼルは焦りを感じて、王宮を去ることを第一に考えることにした。
　本当はもっと聞きたいことがあった。でも、話を終えると同時に時計を出したところを見ると、彼にもこの後に用事があるんだろうな。
　ともかくこれで、フェルティアード卿が大貴族の名に恥じない活躍をしてきたことはわかった。あの手厳しさの理由は謎だけど。
　シャルモールが時計をしまうのと、ゼルが礼をしたのはほぼ同時だった。顔を上げる瞬間、彼の腰の辺りに、拳銃が収められているのが見えた。
　そういえば、貴族が持つ銃を初めて見た。王宮内だから弾は入っていないのだろうが、剣とは違う艶に、ゼルは一瞬目を奪われていた。
「ああ、ゼレセアン君」
　別れを告げるようにゼルの外套がはためいた時、シャルモールが引き止めてきた。ゼルが振り返ると、表情を固くした貴族がいた。さっきの話の続き――ではなさそうだ。
「もうしばらくしたら、フェルティアード卿は戦地に向かわれるかもしれない。きみも覚悟していたほうがいいぞ」
　戦地と聞いて、ゼルは身が強張るのを感じた。いつの間に戦が始まろうとしていたのか。戦争となったら、街はすぐその話で溢れてしまう。それを欠片も耳にしていなかったので、戦をすると決まったのは、つい最近なんだろう。
　いつかは来ると思っていた出兵が、こんなに早い時期になるなん

て。叔父さんに手紙を出しておかないとな。下宿に戻って、まずやることを決めたゼルは、再びシャルモールに謝意を告げた。
期待と興奮、そして一抹の不安を、ゼルが抱えているなどとは知らないシャルモールは、小さな青年が手近な裏口へ早足になるのを眺めて、踵を返した。
彼が足を踏み入れた廊下は比較的細く、窓からの明かりも届かない。奥に進むにつれ光が薄らいでいくなか、彼は呟いた。不気味なほどに薄い笑みを浮かべながら。
「石像に成り果てても、そこに在るのなら同じこと。我らの障害ならば、砕かねばなるまい」

第一節

「出兵が決まった？　本当かいゼル！」
うん、と頷いたゼルはちょっとだけ恥ずかしそうだった。その原因が、自分が大げさにゼルの言ったことを繰り返したからだということは、デュレイにもわかっている。でも、そうしたくなる気持ちを抑えるなんてできなかった。親友に活躍の場が与えられたんだ。
「よかったな、おめでとう！　厳しいって言っても、やっぱ大貴族は得だよな。こんなすぐ戦に出られるなんて」
薄暗い書庫の中、デュレイは本の束を抱え直した。嫉妬を覗かせた言葉が、淀む空気の隙間をわずかな風となって流れていく。ゼルが持ち込んできていたランプの火が、小さく揺れた。
「でも、戦って言ってもそんなに大きいものじゃないよ。エアルのごく一部の兵が攻め込んで来てるだけらしいから」
今日は長いことここにいるせいか、嫌気が差してしょうがなかったカビの匂いも、今では心地いいぐらいだ。でもさっき来たばかりのゼルは、棚から本を取り出す度に咳き込んでいる。
「それに、ぼくらは戦いには参加しないんだ。先に兵を出して、制圧が確認できたら行くみたいで。まあ、今回は戦の見学ってところかな」
取った本から舞い上がったほこりに邪魔されながら、ゼルは続けた。表紙の汚れを払った手を自分から遠ざけ、大きく振る。だがいつもの通り皮手袋をしていたので、大して落ちることはなかった。
ランプを持って移動し、立ち止まって本を漁る。なかなか目当てのものが見つからないらしい。デュレイは横目でゼルの背を確認した。
この第二書庫の整理を任されたデュレイは、ゼルの探し物を手伝いたくて仕方なかった。王宮の裏手に建てられているここは二階部分もなく、そう広くもない。そのくせ、作り付けの本棚は天井にま

で伸び、最上段の棚ははしごがなければ無論届かない。
比較的取りやすいはずの足元は、しかし本棚に入り切らなかった本達で塞がれてしまっている。申し訳なさそうに佇む机にも、容赦なく分厚い書籍が積み上げられているのを見れば、滅多に人が来ないのは明らかだった。
そんな整とんもされていない場所だ。目当てが何であれ、そう簡単には見つからないだろう。そう思って、デュレイは手伝うよ、とゼルに申し出ていた。しかしその前に、彼には書庫の片づけを頼まれている、と言っていたので、それを覚えていたらしいゼルは「ぼくの用事のせいで、きみの仕事を遅らせるなんてできないよ」と丁寧に断ってきた。
それもそうだった。今思えば、仕事を命じたローデル卿本人も、第二書庫の惨状を知っているようだった。まず、大まかな種類別でいいから、本を分けて置いてほしい、と。今日王宮に来てからずっとここに入り浸っているが、さっぱり終わりが見えないのが現状だ。
そんな状況でゼルの手伝いなどしたら、大幅に時間を失うことになる。ただでさえ刻限ぎりぎりになりそうだというのに。結局、デュレイは片付けに専念することにしたのだが、時折沈黙を裂くため息に、デュレイは幾度となく手を止めていた。
ゼルは何も言わなかったが、きっとフェルティアード卿に言われて来たんだろう。ランプに照らし出された彼が、苦みに耐えるような表情をしているように見えるのは、あながち気のせいではないのかもしれない。
ゼルは顔合わせの時以降も、フェルティアードを嫌う態度を薄れさせていなかった。デュレイが見る限りでは、むしろ深まっているようだった。暴言を吐いたなどということがあったら、あっという間に王宮に広まるだろうが、そんな噂も聞かない。とりあえず、無礼な言動を取ったりはしていないらしい。
しかし、兵として属する期間は二年。その間に苛立ちを溜め込んで、いつか爆発させはしないだろうか。出会って間もない相手だと

いうのに、デュレイはひどくはらはらしていた。
「あった！」
足音と、本がこすれる微細な物音を覆い尽くしたのは、デュレイにも喜びを伝えるゼルの声だった。ほっとした拍子に、胸の前に持った本の山が崩れそうになった。
既に床を占領している本を崩さないように、慎重に下ろしていく。本と床に指が挟まれたが、もう慣れたものだ。倒れない程度に重心をずらして、するりと手を引き抜く。黒くなりつつある皮手袋で汗をぬぐうのも、すっかり気にならなくなっていた。
「見つかったのか」
振り向きながら、わかりきったこととは思いながら聞いてみる。ゼルは手にしていた本から、丁寧にほこりを払い落としながら答えた。
「ああ。よかった、見つかって。いつデュレイが『やっぱり手伝うよ』って言い出すか心配してたんだ」
自分の心中はすっかり読まれてたみたいだ。浮かんできた笑みを噛み殺そうとしたが、もう顔に表れてしまったらしい。
「あ、図星か。気持ちはありがたいけど、まず自分のことを優先させてくれよな」
言い訳するより先に、先手を打たれてしまった。
「わかってるよ。そうだ、次はいつ休みになるんだ？」
気恥ずかしくなったデュレイは、別の話題を切り出した。結局あの日、ゼルはフェルティアード卿への急用を携えたまま帰ってこなかった。なるべく早いうちに、またハベラに連れて行ってやりたい。
個人的な用がなければ、エリオも一緒に来るだろう。ゼルが口にした日付を、自分の休日と照らし合わせる。その中で一日だけ、ゼル達と重なる日があった。これで出かける日にちは決まったも同然だ。
綺麗になった本を抱え、ゼルはランプをもう片手に取った。
「それじゃ、エリオにも言っておくよ」

「頼んだぜ」
ゼルが開け放った扉から、外からの明かりが差し込む。まだ明るいが、もう陽は傾き始めているはずだ。
部屋が再び薄闇で埋め尽くされる。芝生を踏みしめる音が遠ざかるのに耳を澄ませていたデュレイは、それが聞こえなくなると両腰に手を当て、深く息を吸った。文字通り、仕事はまだまだ山積みであった。

「よし。こんなもんかな」
デュレイが働いていたことを知らぬ者が見たら、どこが片付いているのだと問い詰めていたに違いない。はた目には変化はないが、これでもだいぶ見やすくなったほうだ。
今まで本の上にしか置けなかったランプを、やっと表面を見せた机に乗せる。偏った持ち方をしていたのか、左腕が疼くように痛んだ。その手で、割れ物でも扱うようにそっと懐から覗かせたのは、黙々と時を刻む懐中時計だ。
「やっぱりちょっと過ぎちゃったか。急がないと」
もちろん、この時計はデュレイのものではない。様子を見に来たローデルが、デュレイに貸し与えていたのだ。
ゼルが帰った後新たな来客があるはずもなく、作業に没頭していたデュレイは、王宮の者に時間を聞くどころか、外に出て太陽の位置を確認することも失念していた。刻限が迫っていることをローデルが告げに来なければ、衛兵のお叱りの一つは喰らっていただろう。
第二書庫にやって来たローデルは、途中でも構わないから帰るようにと言った。確かに、刻限調度に終わらせることは無理そうだった。しかし、もう十数分あれば。
あとほんのわずかの手間で片がつくところを、デュレイは放っておきたくはなかった。ローデルにその旨を伝えると、長居はしないように、と念を押し、彼は懐中時計を手渡してきたのだ。

「ここ周辺の当番になっている衛兵と門番には、きみのことを言っておこう。声をかけられたり王宮を出る時には、その時計を兵に見せなさい」
下部についた突起を押し込むと、家紋らしき模様が彫られたふたが跳ね開き、文字盤が現れた。持ち歩ける時計を収めているのが、真っ黒になってしまった自分の皮手袋なのに気付いたが、素手で触れるのも気が引ける。
指先でつつくようにふたを閉じるのを見て、ローデル卿は少しぐらい汚れてもいい、と笑ってくれた。それでも、清潔とは言いがたいこの空間に、裸で置くわけにはいかない。そっと服のポケットにしまい、外に出て行くローデル卿に礼をした。
最初に時間を見た時は、刻限の十分ほど前だった。ランプの炎を吹き消し、手袋の汚れを払って戸を開けると、肌寒さも混じった新鮮な風が吹いてくる。そよ風がこんなに気持ちいいと感じるなんて、沈んだ空気に慣れ過ぎたらしい。
西の空がやや赤みがかっているのが、王宮の陰からかろうじて見える。予定より長引いてしまったが、ローデル卿が見回りの兵に言い伝えてあるらしいから、心配はないはずだ。
鍵をかけながら、ローデル卿が鍵について何も言わなかったことを思い出した。まさか彼がいつも管理しているのではないだろうから、これも衛兵に頼めばいいか。鍵を握り締め、すぐそばにそびえる宮殿に足を向けた時だった。
デュレイが向かおうとしていた、宮殿内部に繋がる扉が左右に押し開けられた。この時間では、衛兵か貴族しか残っていない。どちらにしろ、緊張で体がぎくしゃくし出したのに代わりはなかっただろう。
しかし、こちらに歩いてきた人物――いや、その人物が身に着けていたひときわ目を引く輝きは、デュレイの足を地面に縫い付けてしまっていた。
宮殿の陰りをものともせず、逆にそれらを糧として、その存在を

しらしめているようにも錯覚する、深緑の一滴。
（フェルティアード卿……！）
薄く開いた瞼から金色が覗き、デュレイの碧眼と重なる。洗練された見本のような足の運び以外で、大貴族が取った行動らしい行動はそれだけだった。それもたった一瞬のことで、両眼はすぐに金髪の青年を対象から外し、前だけを見据えている。
幸い、デュレイが固まってしまった位置は、フェルティアードの歩く線上ではなかった。それでも、石のように重い足を引きずり、後ろに下がる。実際には半歩も移動していなかったのだが。
ここを通って、フェルティアード卿はどこへ行くのだろう。第二書庫以外にも、剣の稽古をする場や宿舎などが、表の庭以上に広大な敷地に連なっている。自分の前を通り過ぎていく大貴族に頭を下げたところで、デュレイは出兵のことを思い出した。
「フェルティアード卿」
大きな声ではなかった。人の気配もなくこうも静かなら、そうする必要はなかったのだ。ただ、はっきりとした言葉にすることは忘れなかった。
芝生の鳴く音がやむ。黒髪の間から一点の光が現れ、ぐるりとデュレイの顔を捉えた。
「近く、戦地に参られるとお聞きしました。一介の兵の身ではありますが、私めもご健闘をお祈り致しております」
言い終えて頭を垂れたのは、礼儀に沿うためだけではなかった。細く鋭く刺し突いてくる視線を、受け続けることができなかったのだ。視界にかの大貴族はいないというのに、デュレイはしっかりと目を閉じていた。
かさり、と聞こえたのは草音。フェルティアード卿が歩き出したらしい。声の一言もかけられなかったのは少々腑に落ちなかったが、わざわざ立ち止まって聞いてもらえただけ良しと思わなければ。
大貴族からしたら、デュレイの激励など社交辞令にしか聞こえなかっただろう。そう思われていても構わない。真意が伝わることが

なくとも、フェルティアード卿が戦い、無事帰還することを願っているのに、違いはないのだから。
「誰に聞いた」
目を開き直すだけに留まらず、デュレイは髪を激しく揺らせて顔を上げた。デュレイに対し真正面に向き直っている以外、フェルティアードは先ほどと変わらずにそこにいた。
デュレイにとって初めて聞くその声は、地を這うように重苦しく、抑揚がなかった。それがフェルティアードの普段のものとは知らない彼は、恐ろしく厳しい響きに感じたのだ。
「っ、私の、友人です。フェルティアード卿の指揮下におります」
喉の奥から引きつった声が漏れる。それを無理やり飲み込み、うまく回らない舌に台詞を乗せた。必死に平静を装っているせいか、そんなデュレイの焦りに気付いていないらしいフェルティアードは、畳み掛けるように質問を続ける。
「名は」
「ゼ、ゼレセアンです。ジュオール・ゼレセアンと」
「ゼレセアン……」
口元に手を当て、ふっと下を向いた大貴族を見て、デュレイの脳裏をゼルのとある質問がよぎった。
「ル・ウェールと言えば、おわかりになりますか？」
ゼルは、フェルティアード卿が出身地の名で呼んでくる、と言っていた。本人は嫌がっていたようだったが、この呼び名ならすぐわかるはずだ。何せ当の本人なのだから。
予想通りフェルティアードの口から、ああ、と納得するような声がこぼれた。
「おまえはル・ウェールの友人か。名は何という」
「はい。デュレイク・フロヴァンスと申します」
「おまえもウェールから来たのか」
デュレイにまた礼をする暇も与えず、フェルティアードは問いかけた。

「いえ、私はリクレアの者です」
「ではなぜ奴を友と呼ぶ」
まっとうな疑問であった。同じ、もしくは近隣の町ならまだしも、リクレアとウェールは気軽に行ける距離ではない。そんなに近いなら、フェルティアードもウェールという村を知っていただろう。
「彼は、私の恩人ですから」
髪の毛一本分すら目玉を動かせない。瞬きするのにも神経を使っていたが、“奴”という言葉にその集中が緩んでいた。
どう解釈しても、ゼルを指していたとしか思えない。おれに言ってないだけで、実はぶしつけな言動を取っていたのか？　気に障ることでもやらなければ、大貴族ともあろうフェルティアード卿が、こんな言い方はしないはずだ。
「恩人？」
デュレイは、ゼルと出会ったあの川での出来事を話し始めた。溺れている子どもを助けに行ったこと、そこにゼルが手助けに来てくれたことを。自分が溺れかけたところは、話を進めるのをためらってしまったが、これを話さなければ意味がない。ただ単に手伝っただけなら、ゼルのことを恩人とまで呼ぶことはないのだ。
「変わったやつだな」
いきさつを述べ終わったデュレイに投げかけられた声は、含み笑いを伴っていた。デュレイは心の中で首を傾げて、「そうでしょうか」と返す。
だが、本当は真っ向から否定したかった。危険もかえりみず、ゼルはあの小さな体で自分を抱えてくれた。目を覚ましてゼルと言葉を交わした時は、冗談交じりで重かったろう、なんて言ったが、本気で助けようとしていたからこそ、ゼルはがんばってくれたんだ。
「己と同じく、新たにベレンズの兵となる者を助けるとは、根回しのいいことだ。やつはそんなに高い地位を望んでいるのか？」
根回し？　もしかしてフェルティアード卿は、ゼルは恩を売るためにおれを助けたと思ってるのか？

ゼルは気付いてたんだろうか。先に川を渡っていたおれが、徴兵でベレンズに向かっている人間だと。いや、おれはずっと背を向けていたんだ。わかるはずがない。おれはただの旅人で、ゼルはその旅人と子どもを救っただけだ。

「確かに、ゼレセアンは大きな夢を持っています。ですが、そのために私を助けたのではないと思っています。第一、私をベレンズに向かう兵だと特定する要素を、彼は私を助けるまで持ち得なかったはずです」

「そうか？　舟のこぎ手とおまえの話をしたかもしれんぞ。船頭というのはよく喋るからな」

そう言われて、デュレイは岸に着いた時のゼルの言葉を思い出した。そう言えばゼルはどこかに行くのか、と聞いた時、“きみと同じ場所”だと――ベレンズだと言っていた。つまり、ゼルはおれが、ゼル自身と同じ境遇にあることを知っていたんだ。

それじゃ、ゼルはやっぱり恩を売るために？　その考えはしかしすぐに打ち消された。

「それもあり得ることでしょう。しかし、ゼレセアンはそんな男ではありません。彼には自分のことどころか、他人を気遣ってくれる優しさがあります」

「知り合って間もないというのに、ずいぶんと肩を持つのだな」

言い放つごとに、デュレイの足は少しずつ歩み出ていた。しかし彼は気付かず、さらに続ける。

「ゼレセアンはあなたの兵ではありませんか。なぜ彼をそのように言うのですか」

「知っているか、小僧」

ぞく、と脚が震えた。あらぬ疑いをかけられようとしている友をかばうためとはいえ、大貴族相手に進言し過ぎたみたいだ。デュレイがとっさに非礼を詫びようとしていたなど知らないフェルティアードは、緊張ではなく恐怖で動けなくなった彼に続きを投げかける。

「今の世には、高い位を得たいがために心にもない言葉を吐き、人

に接する者がいるのだ。悪知恵ばかり働き、国や王、ましてやこの地に住まう人々のことなど考えず、己の立身出世しか頭にない愚か者がな」
瞬間、畏怖が激昂に変わった。
「ゼレセアンもそうだというのですか」
口を突いたのは怒気を孕んだ音だった。体の中心から末端へ、じわじわと占めていくものが生じたのは、思いがけず腹に響くまでの声量を出してしまったのが原因ではない。
手のひらと足先にたどり着いたそれは熱に変わっている。そのまま、冷え始めた空気に吐き出してしまいたかった。しかしそれを許すことはデュレイにとって、ゼルを軽んじられたことを無視するのと同じに思えたのだ。だからデュレイは、拳を握り締め地を踏み込んだ。そのせいで行き場を失った奔流が渦巻く。
「奴は夢を持っていると言ったな。それはなんだ。貴族になりたいとでもぬかしたか」
手袋を通しているのに、爪の硬さを感じる。やたらと脇を見たがる目を、強引に前に向かせた。
「彼は何よりも、村のことを想っているのです。村のために何かをしてやりたいと」
白鳥亭にいるあいだ、デュレイは友が抱く将来を詳しく聞いていた。騎士どころか貴族になるんだ、と言ってのけたゼルは、さらなる希望を口にしていた。未だ貴族による統治の手が及んでいないウエールの村を、自分の領にしたいと。
「理由はどうとでもなるだろう」
しかしフェルティアードはデュレイの弁明を一蹴し、会話を打ち切るように身を翻した。
「フェルティアード卿！」
それは怒号にも等しかった。まるで、この場に新たな三人目の人物が現れたかと思うほどに。名を叫ばれた男は金髪の青年に背を向けたまま、踏み出したばかりの足を止めた。

「いかにあなたが大貴族といえど、私の友人にそこまで言う権利はないはずです。ご自分の指揮下にあるというのに、あなたは彼のことをわかろうとなさらない」
反応らしき反応はなかった。ただ一つ、肩越しに睨んできた、静かな炎を灯した鈍い金の瞳以外は。
それを見ても、デュレイの中に恐れが再誕することはなかった。いや、恐れを知覚する隙間すらなかった。デュレイの思考を占めた感情は、既に“畏れ”の壁を突き破っていた。壁を越えた彼が対峙しているのは、貴族の最高位に座する者ではない。命を救ってくれた友を辱めた、一人の男に過ぎなかった。
「それなのに、彼を身勝手な人間だと決め付けるなど。……フェルティアード卿」
その男に対し友の名誉を取り返すため、デュレイは静かに、音の一つ一つを噛み締め、確実に宣言した。
「あなたに、決闘を申し込みたい」

第二節

鋭い光はそのままに、フェルティアードの目が見開かれた。そこに映る青年は、青年自身にしか感じられない小さな震えに包まれている。

デュレイは後悔していた。憤りに呑まれ口走ったその内容は、失礼どころか呆れられても当然のものだ。

煮えたぎる激情が急速に冷めていく。最後に残ったのは、戦慄という名の巨大な岩石だ。恐れが生じなかったわけではない。それは単に、怒りの裏返しだった。熱を逃がすまいと両手を握っていたはずが、いつの間にか震える体に耐えるための行為になっていた。

だが、熱いものは完全に消え去ったわけではなかった。じりじりとくすぶりながらわだかまっている。それが残っていなければ、デュレイは浮かんでいた文の羅列を、フェルティアードに言い渡すことはできなかっただろう。

「あなたは、ゼレセアンを甚だしく侮辱された。彼の友として、私はあなたの言葉を黙って聞き流すわけには参りません」

そこまで言ったところで、デュレイは口をつぐんだ。再び向きを変えたフェルティアードの腰元から、かちゃりと音がしたのだ。紛れもなく、その正体は剣。彼自身は腕もかすっていないのに、デュレイにはそれだけで、彼がすぐにでも剣を抜いてくるように思えた。

フェルティアード卿のこの動きが、自分の意思に同意したからではないことぐらい、察しがついた。そして彼が発するであろう言葉も、容易に想像できていた。

「決闘には立会人を置くのが義務だ。それは知っているだろうな」

第三者がいなければ、勝手に決闘を行ってはならない。それを破れば、たとえ貴族であっても刑を免れることはできないのだ。

「時と場所を改めろ。立会人はおまえが連れて来ればいい。それに――」

剥き身の剣が鞘を滑った。その高音は静寂もろとも、やや声量の落ちていたフェルティアードの声までも裂いている。
おれは何をしている？　大した考えもまとまらぬまま、デュレイは衝動的に得物を抜き放っていた。フェルティアードが、決闘を受けてくれる姿勢をとっているというのに。
今は気持ちがたかぶっているんだ。フェルティアード卿の言うように日を改めれば、それまでに心を落ち着かせられる。ゼルのために剣を交えるのは、それからでいいんだ。
デュレイはしかし、そうなることを恐れていた。平常心を取り戻したら、この大貴族と面と向かうことに臆するのではないか。こんな事態を引き起こした原動力が静まった状態で、剥き出しになるであろう恐怖に押しつぶされずに、闘うことができるのか。
「何の真似だ」
たっぷりと時間を置いて聞こえたのは、感情の欠片も窺えない低音だ。
柄を握り締める。これが規則に反することもわかっている。だが、後戻りは許さないと言わんばかりの強大な焦燥感に、デュレイは襲われていた。
剣を納めたくない。そうしたら、一時の感情に流されて暴走するような男と見なされてしまう。
「今この場で、真剣でやるつもりか？」
何を今さら、当然のことを。出かかった嘲りともとれる言葉を、デュレイは歯を食いしばってこらえた。試験の時のように模擬の剣でも使えというのか。そんな決闘は聞いたことがない。
「あなたの侮辱行為は、木剣ごときの馴れ合いでかたがつくような問題ではありません」
これは本気の決闘なのだ。かと言って、大貴族を相手に勝利をもぎ取れるなど、最初から考えてはいなかった。
ゼルはきっと、偽物の剣のような軽い意志で自分を助けたんじゃないはずだ。だからおれも、真剣を使わないで闘うなんて逃げるよ

うな真似なんかしたくない。
男の眉間に、またしわが刻まれる。
「もう一度聞こう。規則に反してまで、わたしとの決闘を望むのか。今考え直すのなら聞き入れるぞ」
自分から闘いを申し出ることになるとは思わなかったデュレイは、違反行為をした場合どんな処遇があるのかなど、当然詳しく記憶していなかった。さすがに死罪なんてことはないだろうが、ベレンズ兵の身分は剥奪されるだろう。そうなったら、どんな顔をしてリクレアに戻ればいいのやら。とぼとぼと町に帰り着く自分を想像して、フェルティアードに見咎められないよう、デュレイは喉だけで笑った。
「私の決意は変わりません。受けていただけますか」
微動だにしなかったフェルティアードの顔に、一筋の線が走った。
「いいだろう」
彼は笑っていた。歯が覗かないのが不思議なくらいに、引き伸ばされた口角は上がっている。だがデュレイにとっては、今しがた自分で選んだ道は果たして正しかったのだろうか、と逡巡させるような冷笑であった。
来い、と有無を言わせぬ声で告げ、フェルティアードは数歩戻ってデュレイの前を通り過ぎ、王宮と第二書庫の隙間に入っていった。その先は道の幅はあるものの、整えられた植え込みが辺りを飾っている。王宮の隅に近いこの場所は、廊下に並ぶ窓からも見えにくい。
大貴族の後について行っていたデュレイは、前を歩く彼が突然振り返ったので、危うく握ったままだった剣を落としそうになった。当の相手は何も言わず、鞘から剣を抜く。
柄の上部と刀身の根元には、細い金属が螺旋や渦を連想させる複雑さで絡み合っており、それが貴族にしか持ち得ないものであることを証明していた。刀身に巻きつく飾りの中でも一回り太いそれに埋め込まれた石は赤く、地平線に消える太陽を閉じ込め、血潮を混ぜ込み固められながらも、光を忘れぬ塊のようだった。

構えの姿勢をとるフェルティアードに倣い、緩慢な動きで剣を相手に向ける。その先にあるのは、深みを湛えながらも決して暗に染まることはない緑石だ。
「どうした。この期に及んで怖気づいたか」
闘いを申し出た側が踏み込んでこないのを揶揄するように、フェルティアードはまた薄い微笑を貼り付けた。
「いいえ、まさか」
言うやいなや、デュレイは得物を打ち付けた。剣の重なるそれとは全く別の音が耳に入ってきたのは、ほぼ同時だった。
「フェルティアード卿！　一体何をなさっておいでなのですか！」
二人が歩いたものと同じ通路を駆けてきたのは、すらりとした体躯の女だった。視界の端に映った彼女の髪は意外にも短く、デュレイはよそ見をしそうになったが、その一瞬は剣を払ってきたフェルティアードの動きに向けられる。力の強さには自信のある腕に痺れが走った。
「立会人不在での決闘が禁止されているのは、卿もご存知でしょう」
「いいところへ来たな、ティエナ」
会話をするためか、デュレイから目を離さないままフェルティアードは手を止めた。その隙に、ティエナと呼ばれた女性をちらりと確認する。草木の生い茂った川辺を思わせる色合いのドレスは、美しいと思ったが飾り気はなかった。茶の瞳は大貴族を前にしているというのに動じず、腰が引けている様子はない。それどころか、この試合を今にも止めようとせんばかりに、置いていた間を詰めようとさえしていた。
このひとは何者だろう。フェルティアード卿も見知った人物らしいけれど。自分より幾分か年上に見える彼女は、フェルティアードの台詞に眉をしかめ、割り入れようとしていた腕を泳がせた。
「おまえがこの決闘の立会人になれ。おまえがここに来た時に始まったのだからな」
フェルティアードの両目がティエナを捉える。ティエナは困惑し

たように、
「な、何をおっしゃるのです。私が声をかけた時には、お二人ともう剣を……」
最後まで聞かず、闘いを再開させたのはフェルティアードだった。構えを解いていなかったデュレイは攻撃を受け止め、だが少し後ずさる。
ティエナはそれ以上言うのは諦めたらしい。邪魔にならないようにと気を遣ったのか、数歩後ろに下がった。大貴族と青年を見守りつつ、時折裏口や窓のほうを見ているのは、人目を気にしてのことだろう。
デュレイといえば、このままではかすり傷の一つもつけれらないだろう、と観念し始めてもいた。途中で気を抜いて、やすやすと剣を奪われるつもりもないが、こちらの突きはかわされ、あるいは止められてばかりだ。
長期戦になれば、不利になるのは確実におれだ。戦争をくぐり抜けたであろう彼と自分とでは、剣の腕はもちろん戦いの慣れも桁違いだろう。次第に息が上がってきたデュレイに対し、フェルティアードは表情一つ変えていない。
体力には自信はあったが、そこにこんなにも緊張感がのしかかったことはなかった。右腕が重くなっていく。突いた剣先に速さはなく、それは簡単に弾かれ胸の前が空になる。
（まずい）
とっさに身をよじり、予想通り真っ直ぐ向かってきた追撃をかわす。反動で勢いをつけたはずの反撃は、気持ち悪いほどにゆったりとしていた。
「……っ！」
大貴族の剣が、青年の喉を刺し貫いた。そう見えてしまったのだろう、ティエナの口から声になりきらない音が漏れた。その口元をふさごうとしていたらしい両手は、彼女の持つ気丈さに負けたか、胸の上で留まっている。

実際には、フェルティアードの剣はデュレイの首に傷こそつけたが、薄皮一枚程度のものだった。しかし少しでも動けば、不用意に傷を深くしてしまう。冷たいままの目を凝視していると、ぴりぴりとした痛みが少しずつ広がっていった。

「勝敗はついたぞ、フロヴァンス」

フェルティアードは得物を首から離すと、その先端をデュレイの鼻先に突き付けた。デュレイは一旦目を伏せ、己の意見を口にする。

「いいえ。これでは、他人の目にはどちらが勝者か判断がつきません。真の決闘であれば、敗者には敗者たる証が必要でしょう」

負けた者には、勝者により刀傷という烙印が刻まれる。すぐにその行動に移らなかったところを見ると、フェルティアードはやはり形だけの決闘と位置づけていたらしい。

「そこまでこだわるつもりか、おまえは」

「はい」

フェルティアードにぶつからぬよう、デュレイは右腕を下げると剣を逆手に持ち替え、鞘に納めた。両腕をだらりと下げ、戦意のないことを示す。

「潔い男だな。よかろう、おまえの望み通りにしてやる」

「お待ちください、フェルティアード卿！」

ティエナが割り込んできたのは、フェルティアードが剣を引いた瞬間だった。

「この決闘、私は内密とする所存でございます。しかしそれ以上手をお出しになるならば、陛下にこのことをご報告して頂かなければなりません」

毅然とした口調に、懇願するような音色がにじむ。

「敵兵と戦うことはないといえど、あなた様は戦地に行かれる身なのですよ。どうか、今一度お考え直しを」

敗者に対し手傷を負わせなければ、決闘をなかったことにもできる。だが決闘沙汰を起こすのは、白黒はっきりさせなければ満足しない者が多い。よって彼女の進言は、ほとんど意味を成さなかった。

「ティエナ。おまえはこの男の申し出を踏みにじれというのか？負けを恥じて背を向けず、自ら敗者たる証を求める勇気を」
勇気か。デュレイは心の中で苦笑した。おれには“無謀”としか聞こえなかったな。
「で、ですが」
なお続けようとするティエナを遮るように、フェルティアードは剣を左手に移し、空いた右手で彼女の肩をそっと押しやった。手が下ろされると、その後を追ってデュレイの前で刃が踊った。
「フェルティアード卿！」
悲鳴にも似た声が聴覚を刺激する。それと一緒に、左腕を鋭い痛みが走った。思わずもう片方の手で押さえ込むが、疼くのは一ヶ所ではない。見れば、服は二の腕の中ほどから皮手袋のふちまで切り裂かれ、その合間からは鮮血を流す肌が見えた。
血を見るのが怖いわけではなかった。今目の当たりにしている光景が、自分自身に起きているものだと思いたくない節があったのだ。だが、脈打つ鈍痛の大元は、確かにこの裂傷である。
「いけません、そんな汚れた手で触れては」
奥歯を食いしばるのと共に、手にも力を込めていた。先の仕事で黒ずんでいた手袋に気付いたらしいティエナが、草に膝をつき右手をどけさせる。傷口に目立った汚れが付着していないのを確認すると、彼女は息をついた。
「……では、フェルティアード卿。私は彼を医務室まで送り届けます。そののちに、私とご同行願いたい。よろしいですね」
ティエナは体を支えるように、立ち上がりながらデュレイ右肩に手を添えた。女の人にしては、結構背の高い人なんだな。それに、大貴族相手にこんな話し方ができるなんて。
どうでもいいことを考えてるな、と思っていた。でも、こうでもして気を紛らわさないと、すぐにあの痛みが強くなってくる。腕を曲げることも叶わないので、手袋を取って素手を押し当てもできなかった。

「ああ、構わん」
機械的なフェルティアードの返答に、デュレイは傍らの女性が、決闘の経緯を何一つ知らないことに気付いた。
立会人とは、負けた側の言い分を伝えるための存在だ。無理やりも同然だったが、立会人になってくれた彼女には、自分が決闘を願い出たことを言っておかなければ。
「あの、ティエナ……様」
どう声をかけていいかわからず、デュレイはおそるおそる彼女の名前を口にした。初対面で、しかもどう解釈しても自分より上の身分の人に対し、姓でなく名を呼ぶのは抵抗があったのだ。
ティエナはそんなデュレイに煩わしげな目を向けることもなく、むしろいたわるように碧眼を覗いた。
「どうしました、フロヴァンス」
一瞬だけ痛みが飛んだ。どうしてこの人が自分の名前を。
「その、立会人を拒んだのは私なのです。フェルティアード卿は日時を改めるよう言ってくれたのですが」
そんなことで会話を打ち切ってはいられない。デュレイは理由を詮索するより、決闘について述べることを優先させた。
するとティエナは厳しい顔つきになり、
「決闘については、あとで詳しく話を聞きます。今は傷の手当てをすることを一番に考えなさい」
まるで母親が子どもに言いつけてるみたいだ。命令というには一歩届かない言い草は、デュレイにそんな印象を与えた。
「失礼致します、フェルティアード卿。医務室にてお待ちしております」
素早く頭を下げ、ティエナはデュレイの肩を抱いたまま、早足で王宮への戸口に向かった。その場に佇んでいたフェルティアードがどこへ行こうとしていたのかは、デュレイには見えなかった。

第三節

今ほどゼルが人目を気にしない時はなかっただろう。気にする暇すらないのだ。床を駆ける靴音には遠慮などない。

右手に廊下が現れたのを見て、ゼルは壁に手をつきながらやっと走るのをやめた。思いのほか全速力で走っていたらしい。呼吸がかなり速くなっている。もし話を聞いたのが王宮へ着いたばかりの時だったら、ばたばたと騒がしい外套にまで気を配らなきゃならなかった。

喉が焼け付くようで、すぐにでも水を流し込みたい気分だ。でもそんな悠長なことは言ってられない。唾を飲み込んで、ゼルは通路を曲がった。ここまで来れば目的地はすぐそこだ。震える足は、もう早足程度にしか動いてくれなかった。

「ここか……」

案の定、医務室の入り口を前にして出した声は、ほとんど音を伴っていなかった。咳払いをしてから、拳で強めに扉を叩く。

中からの返事を待っていると、ばたばたと細かい、叩きつけるような音がちらついた。ゼルはすぐその原因を理解した。雨だ。昼間だというのに黒く沈んだ空。そこから落ちてくる雨粒が、ゼルが立ち尽くしている廊下の窓を鳴らしているのだ。この時期の雨はありがたいものだとわかっていても、今の彼にとっては気分を滅入らせるばかりだった。

「どうしました？」

ゼルを迎えたのは初老の男だった。銀にも見える短い白髪に、眼鏡をかけた医師らしい彼は、息切れしているゼルを見て小さな目を丸くした。

「あの、こちらにデュレイク・フロヴァンスがいると聞いたのですが」

一息にまくしたて、少しむせてしまった。心配そうにゼルの肩に

手を置いた男は、ゼルが落ち着いて、彼と再び視線を合わせてからそっと話し始めた。
「きみは、もしかしてジュオール・ゼレセアンかな？」
「はい」
男が名を知っていることに、ゼルはさして驚かなかった。きっと、こうやって彼が訪ねてくるのを見越して、デュレイが話していたに違いない。
「彼を見舞いに来てくれたのかい？」
それ以外に何があるというのだろう。友が怪我を負ったと聞いてから休憩の時間に入るまで、こんなに時が流れるのが遅いと思ったことはなかった。しかも、その怪我の原因が決闘で、相手があのフェルティアード卿だなんて。
今すぐ会えるかどうか聞くと、彼は表情を曇らせた。
「わざわざ来てくれたところ申し訳ないんだが、彼との面会はできないんだ」
会えない？　決闘では、負けた側は証拠として傷を受ける。デュレイがここに運ばれたのも、彼が負けてしまったからだ。でも、面会もできないぐらい、ひどい傷を負わせられるなんてことはありえない。
「そんなに深い怪我なんですか？」
「いや、そういうわけではないんだがね……。詳しくは言えないけど、彼の治療はもう少し長引きそうなんだ」
彼はそう言葉を濁した。あまり多くを語れない状況なのだろうが、それはゼルをさらに不安にさせた。深手でないのなら、なぜ話もできないのだろう。まさか、怪我が悪化してしまったのか？　そうであるなら、普通より時間がかかるのもわかる。
男が立ちはだかる向こうにデュレイがいるのに、言葉も交わせない。しかし、彼が面会もできないほどの痛みに耐えているかと思うと、押しのけてまで医務室に飛び込む気にはなれなかった。
「そうですか。では、あとどのくらい経ったら会えますか？」

男が口にしたのは、ちょうどゼルが戦地から帰ってくる辺りの日にちだった。もしかすると、会える日すら目星がつかないと言われるかもしれない、と想像していたので、具体的に教えてもらったのには安心した。予定通り帰還するまでに、良くなっていることを祈るばかりだ。

「先生、患者のフロヴァンスのことなのですが」

医務室の奥からの声に、男が後ろを振り返った。デュレイについての話があるようだ。

これ以上、用のない自分がいても仕方ない。ゼルは、彼が教えてくれた日が近づいたらまた来ますと言い残し、立ち去ろうとした。だが、男が静かに閉じようとしていた扉のあいだからこぼれてきた言葉を、ゼルは拾ってしまっていた。

かすかで、ほとんど不確かな音の羅列。しかし、これは絶対に言っていた、と確信の持てるものが、数個だけあった。

彼。器具。そして、手術。

帰ろうとしていた足が止まり、耳をそばだててしまう。だがその時には、すでに扉が閉まっていた。声どころか、物音すら聞こえない。

どういうことだ？　あの一連の言葉を発したのは、デュレイの姓を言っていた人だった。それは間違いない。その人が彼、と言うのだから、それはきっとデュレイを指している。器具は治療に使うものだろう。じゃあ、最後の手術は？

あの流れから察するに、今のデュレイは手術が必要な容態だということだ。たかが決闘の傷ってわけじゃなかったのか。でも、あの医者は深手ではないと言っていた。じゃあやっぱり、傷が悪くなったのか。

やっと歩き出しながら、ゼルはフェルティアードを思い浮かべた。どちらにしろ、彼がデュレイを傷つけなければこうなることはなかった。それにその行為は、決闘においては必須ではなかったはずだ。フェルティアードは一方的にデュレイに斬りつけたのではないか。

そんな考えに行き着くと、ゼルはすぐにでもフェルティアードのもとへ話をつけに行きたくなった。
いや、そういえば今日は、稽古のあとに彼から話を受けるんだった。新兵が戦地に行く日も近い。多分そのことについての説明でもするんだろう。
大体、今行ったとしても、手ぶらで戻ってくることになるのはわかってるじゃないか。それなら、その説明を聞いたあとのほうが確実だ。
デュレイに会えなければ、その相手であったフェルティアードに聞くしかない。一体何が原因で、決闘などすることになったのか。彼の都合のいいように歪曲される可能性もあったが、当事者は彼しかいないのだ。
雨は激しさを増していく。ガラスを叩く水音は、徒歩で廊下を戻るゼルの耳を、いつまでも追いかけていた。

横にまっすぐ並んだ新兵達と、彼らに話をするジルデリオンの大貴族。あの日との違いといえば、案内の女性がいなく、巨大な一枚窓が雨に濡れ、透けて見える景色が灰色であること、その暗澹たる天候のせいで薄暗い室内を、棚や机の上にある燭台が照らしている程度だ。ゼル達は稽古が終わった直後で、対する貴族も改まった場に行くこともないらしく、外套に身を包んではいない。
質問はあるか、と相変わらず面白くなさそうな声のフェルティアードに、ゼルは疑問ではなく戦地での行動についてを整理し直していた。
ベレンズ国内に侵攻してきていたエアル兵は、エアルの正規軍ではないらしい。エアルは大々的な戦争を起こす意図はないことと、その少数の兵士に対し、物資供給は一切行っていないこと、そして彼らに二度とエアル国内に足を踏み入れさせないことを伝えてきたという。

エアルの言う通り、この兵たちは現在国境付近の森に潜伏し、完全に孤立状態にあることが確認された。しかしそのまま放置しては、近くの村が襲撃される恐れがある。これを防ぎ、なおかつエアルの暴走兵を迅速に殲滅するために、フェルティアードが率いる隊が選ばれたのだ。

主力部隊は明日ベレンズを出る。それを追うように、明後日にフェルティアードと新兵達が出発する手はずになっている。

結局、敵対国とその国の非正規兵の現状、加えて自分達の予定を一通りなぞっているあいだ、沈黙が破られることはなかった。解散だ、と告げた貴族の背中には、たとえ遅れて聞きたいことができた者があっても問いかけることなどできないような、ある種の拒絶があった。

口々にあいさつをし、青年達が部屋を去る。ゼルはそれについていくふりをして、エリオにあとから行く、と小声で伝えようとした。

「ル・ウェール」

エリオの肩に伸びていた手を、突然空気がわし掴みにしたかのようだった。しかしそうではない証しに、ゼルはすぐさま大貴族のほうを向き、裏返る寸前の声で応答している。数人の新兵がゼルを見たが、彼らの歩みが少し速くなっただけで、それ以外の反応はなかった。

「おまえは残れ。話がある」

そう言ったフェルティアードは、にび色の木々と空を映す窓を背に、腰を下ろしていた。足音が徐々に減っていく。扉が閉まるのを最後に、部屋から物音が消えた。雨が葉を打ち、ガラスを伝っていく。

机上の整理を始めたフェルティアードの口がいつ開くのかと、ゼルは気が気でなかった。決闘の話をしたかったのだが、向こうがおれに話があるなら、まずそれを聞かなければ。

それにしても、話があるならさっさと言ってくれ。なんで自分から言っといて、書類の片付けなんかやってるんだよ。

整えられた紙束の上に、フェルティアードの手が乗った。
「さて、ル・ウェール」
顔を上げた大貴族と視線が合う。いよいよか。注意を受けるようなことをしたかどうかで言ったら、残念ながら心当たりはある。あり過ぎるくらいだ。国王陛下に頭を下げなかったのはおれだけだし、不可抗力とはいえ伝言を届けられなかったし。
「おまえはデュレイク・フロヴァンスが怪我をしたことを知っているな」
意外にも、フェルティアードが口にしたのはデュレイの名だった。それにどう聞いても、デュレイはゼルの友人であることを前提とした語調だ。
取り乱さなかったゼルにフェルティアードは、彼がその事実を知っていると判断したようだ。そのまま言葉を続ける。
「その原因も……聞いただろう」
手元の明かりの比ではない、冷たさを感じる目が細められる。
「はい。決闘で負った怪我と聞きました」
「決闘の相手の名も聞いたか」
何だ。何がしたいんだ、この男は。明らかに、おれがことの詳細を知ってると踏んでる。
「フェルティアード卿だと、聞き及びましたが」
ともすれば低く沈んだ声になりそうなところを、ゼルはいつもと変わらぬ調子に見せようとしていた。しかしフェルティアードは見透かしたように、唇の端を機用に片方だけ上げて見せる。
「わたしが憎いか」
何を考えてるんだ、本当に。おれに“憎い”と言わせて、何かさせるつもりなのか。もしそうなら、簡単に乗ってはやらないぞ。
「私はフロヴァンス本人と話したわけではありません。ですので、怪我をしたという事実以外は、真実かどうかわかりかねます」
そうだ、おれが聞いたのはただの噂なんだ。根も葉もないし、誰かが余計な一言を付け加えたものかもしれない。本人がそうだと言

わない限り――
「真実だ。わたしがフロヴァンスと闘い、彼に傷を負わせた」
なぜ。目を見開いたゼルが、間髪入れずに叫びたくなったのはその一言だけだった。だがフェルティアードの発言と重なるように背後の扉が叩かれたので、ゼルの注意はそちらに向いていた。
入れ、と促され、入室してきたのはゼル達を案内したあの女性だった。同じ色のドレスに、短い黒髪。
「お呼びでしょうか、フェルティアード卿」
人一人分の間を取って、女性はゼルの隣で止まった。
「ル・ウェール、彼女が決闘の立会人だ」
女性はゼルを見ると、
「ティエナ・セレズと申します」
小さく頭を下げたので、ゼルも慌ててそれに倣った。
「ジュオール・ゼレセアン。あなたには真に残念ですが、フロヴァンスとフェルティアード卿が決闘をしたということに、嘘偽りはありません。わたしがその全てを見届けたのです」
一息置いて、ティエナは進めた。
「わたしが信じられないようでしたら、国王陛下にもお尋ねになってごらんなさい。わたしが、治療のため陛下にお会いできなかったフロヴァンスの代わりに、てん末をお伝えしましたから」
「そんな……」
例えるなら呼吸をするように自然に、ゼルはそう漏らしていた。ティエナは別の用事があるらしく、引き下がって行った。彼女がいなくなっても、ゼルはフェルティアードが声をかけるまで、横を向いたままだった。
「おまえはわたしに聞きたいことがあるのだろう」
デュレイがフェルティアードと決闘したのなら、ゼルが知りたいのは一つだけだった。向きを正すと、ひじをついてこちらを窺う男がいた。
「では、教えていただけますか。なぜ決闘をされたのです。何が原

因で、フロヴァンスが傷を受けるようなことになったのですか」
　デュレイが、フェルティアード卿の気に障るようなことでも言ったのか。まずそう思ったが、デュレイは彼のことを怖がっていた。そんなデュレイが、自分から墓穴を掘るようなことなんかしない。では逆に、フェルティアード卿がデュレイを怒らせたのか？　でも、そんなことができるほど、彼はデュレイに関して情報を持っていないはずだ。
「わたしがこれから話すことは、すべて真実だ。ねじ曲げはせん。まず、直接の原因はわたしだ」
　ゼルは凍った。血の気が引くとはこういうことか。もし手を出したのがフェルティアード卿だったら、怒りを爆発させてしまうと思っていたのに、いざ聞くとそれが信じられないでいる。
「では、卿がフロヴァンスに決闘を……」
「いいや、決闘を望んだのはフロヴァンスだ」
　わずかにしかめた眉を、フェルティアードは見逃さなかったようだ。
　どういうことですか、とさらに問いかけようとしたゼルに口を開かせず、彼は一部始終を語った。自分がフロヴァンスを怒らせるような発言をしたこと、そのせいでフロヴァンスが、立会人すら拒んで決闘を申し込んできたこと、その結果、負けた彼はその証しを残すため、自ら腕を差し出したと。
　ゼルは、フェルティアードが自分を、出世欲に染まったやつだと思われていたと知っても動じなかった。ただ、そのために卑怯な行動までとるような真似はしない、と固く心に決めていたので、その点だけは反論したかったのだが、今はそれどころではない。
　デュレイが傷を負ったのはわかる。でも、面会もできないぐらいにひどい刀傷をつけなくてもいいじゃないか。その上、デュレイは手術も受けなきゃならないようだった。
　たかが新兵の分際で、自分に盾突くようなことを言ったからって、そこまでやらなきゃいけなかったのか？　もしかしたら、今まで通

り剣を持てなくなるかもしれないのに。
「答えを聞いていなかったな、ル・ウェール。わたしを恨んでいるか」
そんなこと、あんたなら聞かなくてもわかってるくせに。だがゼルは肯定せず、
「いいえ、滅相もございません。卿のおっしゃったことが大元だとしても、結果として怪我をすることになったのは、フロヴァンスの失言失態があったからでしょう」
こう言えば満足か、と心中で罵りながら目を伏せ、フェルティアードの手元だけを見ていた。
再び沈黙が流れた。琥珀色の眼光が、碧色の瞳が泳ぐ顔がいつこちらを向くかと、睨め付けるように輝く。ゼルは当然それに気付かず、友の非礼を詫びてすぐにでも部屋を出るつもりだった。
「嘘をつくな」
礼をしていたわけではなかったので、その声に呼応するかのように開いたゼルの目は、自然とフェルティアードの姿を映していた。
「言ったろう。わたしは心にもないことを言う輩は好かんと」
「そ、そんなことは」
「真意を馬鹿丁寧な話法に乗せるのが難しいか？　なら好きなように話せ」
好きなように、とは、まさか敬語を使わないで、という意味か？
ゲルベンス卿じゃあるまいし、この大貴族相手にそう簡単に話し方は変えられない。
「あとから暴言を吐いたと罪に問われるのが怖いのか？　それなら心配はいらん、わたしが許すと言っているのだ」
いや、言っちゃいけない。そうやって、きっとおれの不逞な言動を何かしらの種にする気だ。こんな見え透いた罠に引っかかるものか。
「強情なやつだな。ではこう言ったらどうだ。次におまえが口にする言葉がいつもの丁寧過ぎるものだったら、わたしはそれを罪に問

うぞ。わたしの命令に従わなかったとしてな」
正直、呆れすら感じた。そこまでして本音を聞き出したいのか。
見知った同期は、皆この大貴族を恐れていた。そのおかげで、本心を隠して接せられていることくらい、この大貴族もわかっていたんだろう。今のおれは、言いたくても言えなかった本音を告げる代表者みたいなもんだ。
言いたいことを吐き出すにしても、辞退して部屋をあとにするにしても、何か一言述べなければならない。その一言がどんな内容であれ、フェルティアードの言う馬鹿丁寧な語法によるものだったら、それを咎めるというのだ。許すと宣言されていても、ゼルはまだ踏ん切りがつかなかった。
確かに自分はこの貴族が好きじゃない。高圧的で、話もし辛い。でも、それと礼儀は別だ。
「そんなにわたしが怖いか。少しは見どころがあると思ったのだが、とんだ臆病者だったようだな」
その声は容赦なく、重圧を伴ってゼルを突き刺してくる。だが同時に、踏み出させてもいた。フェルティアードがゼルに要求した、礼儀を捨て去る道へと。
臆病者だと？　砕けた口調で話せないのがあんたにとって臆病だって言うんなら、おれはそんな人間じゃない。おれはあんたなんか怖くない。怖がってなどやるもんか。
「……じゃあ言わせてもらうけどな」
かみ締めた歯の奥から、低い呟きが漏れ出る。意外にも罪悪感はなく、不快だった心の中のもやが、一緒に出て行くようだった。
「勝ち負けをはっきりさせるのに、デュレイが傷を受けるのを承諾したのはわかる。でも手術まで必要になるほど、あいつの言動があんたには癪にさわったのか？　いくら決闘でも、兵として支障が出るまでの攻撃はご法度のはずだ」
ぴくりと男の眉が動いたが、ゼルの勢いは止まらない。
「あんたぐらいの大貴族なら、兵を一人使い物にならなくしても、

お咎めなんかないんだろうな。こうして何事もなく、予定通りに戦に出ようとしてるのがいい証拠だ」
口元を覆い隠していた手が下ろされる。そこに浮かんでいた微笑に、ゼルは恐怖を感じることはなかった。あざ笑っている。そう思うと、怒りしか生じなかった。
フェルティアードが席を立つ。不必要な物音を許さないその挙動に、ゼルはいら立ちを覚えた。思い切り失礼な態度で出れば、向こうがけしかけてきたとはいっても、怒る様子は見せるはず。普段の寡黙な貴族らしからぬ醜態を見てやる、とある意味期待をしていたのだが、完全に的を外していたようだ。大貴族は薄ら寒い笑みを乗せたまま歩み寄ってくる。
怒っているのに間違いはない。しかしそれを行動にも表情にも出さないのだ。まったく、何枚上手かわかりゃしない。
二歩歩分あるかないかの距離を残して、フェルティアードはゼルの真正面で止まった。あのゲルベンスには劣るといえど、彼も十分長身の域にいる。それに比べ、ゼルは同年代の中でも小柄なほうだ。ただでさえ見上げなければならないのに、こうも近いと首が痛くなる。だがそんなことも忘れて、ゼルは見下ろしてくる二つの目を睨み上げた。
「わたしは今までおまえのような若い輩に、飾らない自分の言葉で言いたいことを言ってみろと、幾度となく聞いてきた。だが皆わたしを恐れて、ありきたりなことばかり並べるのだ」
「そりゃそうだろうな」
少し前なら、口に出さずに自分の中へ吐き捨てていた台詞が、簡単に外へ出ていく。
フェルティアードはどこか楽しそうで、挑発のような笑みを絶やさず、
「ここまではっきりとわたしに意見したのは、おまえが初めてだ。ル・ウェール」
改めて呼ばれる。初めこそ嫌気がさしたが、この男に姓か名を口

にされるほうが、よっぽど嫌な気分だ。
「わたしが憎いか」
憎い、か。デュレイの一件だけじゃない。あんたの見下すような話し方も、偉そうな態度も、全部。
「ああ、嫌いだよ。おれはあんたが嫌いだ。理由もなしに大怪我させたり、人のことを勝手に欲まみれのやつだと思い込んだりな！」
途端に、フェルティアードが笑い出した。喉の奥に押し込めたような笑声は、彼がゼルから視線を逸らしたため、くぐもって空気の中へ溶けていく。ひとしきり笑ったのか、前を向いた彼の顔に不敵な笑みは跡形もなかった。ついさっき、淡々と戦について説明した時と似たつまらなさそうな、それでいて息苦しさを感じる眼差しが、ゼルのそれとぶつかり合う。
「それがお前の本心か。口だけは達者のようだな」
何が口だけだ、と返そうとしたゼルは、フェルティアードの手が揺れたのを捉えた。まさか剣を抜く気じゃ。しかしそれが左手であることに気付いた時には、その手はゼルの顎を乱暴に持ち上げている。思わず閉じかけた目の先では、眉間にしわを寄せ、触れるのも厭うとでも言いたげに、赤色の散る金が待ち構えていた。
「臆せずに言ってのけた部分は褒めてやろう。だがどうせ貴様も、他人を心配するより己の保身が第一になる。金と名誉に溺れてな」
「誰がそんな強欲になんかなるもんか。言っただろ、おれはあんたが嫌いなんだ」
顔を上向かせている手首を握り、振り払う。
「将来おれがそうなるとあんたが言うんだったら、おれは絶対にそんな奴にはならない」
今度は胸倉でもつかみ上げられるかとも思ったが、やはり怒りに任せて手を出すことはしないようだ。かすかに頬が震えてはいたが。
失礼、と言い捨て、振り返り視界からフェルティアードが消えるまで、ゼルは相手の目を凝視していた。
おれは自分のためだけに貴族になりたいわけじゃない。早足に歩

き戸を開け廊下に出たゼルは、その扉に目もくれず、部屋に背を向けた。結局、自力で閉まるには反動が足りなかったらしく、扉はフェルティアードに隙間を見せたまま、動かなくなった。

第四節

あとを追ってくるだろうか。逃げるように廊下を進みながら、ゼルは一瞬だけ大貴族の部屋に目をやった。扉が閉まりきっていないのを見ると、どうやら力を入れなさ過ぎたらしい。

怒っていたとはいっても、力任せに音を立てて去るのは、引っ込みかけていた理性が制止していた。その時は気分が晴れるだろうが、最後に自分の中に残るのは後悔しかない。自分はなんて馬鹿らしいことをしたんだろう、と。

自分でも馬鹿だと思うことをしたら、他人にだってそう見られる。ましてや面と向かってたあの男だって。彼の顔を思い出し、落ち着いてきたはずのゼルの歩みは、床を踏み抜かんばかりに無駄な力が入り始めていた。

「ゼル！」

前方から声をかけられ、ゼルは自分が足元だけ見ながら歩いていたことに気付いた。見れば、壁に寄り添うようにエリオが立っている。

「エリオ。もしかして待っててくれたのか？」

稽古をするための闘技場に、外套や剣を取りに戻ったはずのエリオは、ゼルが顔を上げるとほっとした様子で迎えてくれた。

「うん。ちょっと心配で。どうしたんだい？　フェルティアード卿に何か言われたのか？」

一人自分の帰りを待っていたエリオに驚きつつ、同時に嬉しさも感じた。しかし彼があの貴族の名を言った途端、射したはずの光は暗い雲に遮られてしまう。それが顔に出たのだろう、エリオは「嫌なら言わなくてもいいよ」と、優しく付け加えてきた。

正直、無関係なエリオにまで叫んでしまいそうだった。でも、何も知らない彼にわめいたところで、そんなのは八つ当たりにしかならない。

「ごめん。ちょっと言い争っちゃったから、きみにまでひどいこと言いそうで」
「ぼくなら気にしないよ。その、言い争ったって、フェルティアード卿と？」
肩を並べて歩き出しながら、エリオは意外そうに問いかけてくる。
「そうだよ。まったく……人のことなんだと思ってるんだ、あいつ」
つい悪態がこぼれ出てしまった。エリオの歩みが止まり、ゼルも止まる。さすがに“あいつ”と口に出すのはまずかったか。おそるおそるエリオに視線をずらすと、彼は今にも飛び出しそうな目をしていた。
「……ゼ、ゼル？　どうしちゃったんだい、まさかとは思うけど、あいつ、って」
フェルティアード、と続きを拾ってやると、エリオは顔面蒼白になった。今のは名前を言っただけなのに、どこに衝撃を受ける要素があったんだろう。だが少し考えると、理由は単純だった。敬称をつけるのを忘れていたのだ。
血の気の戻らないエリオを眺めながら、エリオはおれのことを叱るだろうか、と予想する。真面目そうな分、頑固なところもありそうだし。
「ゼルっ！　これからあの方と戦地に行くっていうのに、どうしてそんな」
思った通り、エリオは声を荒らげてきた。だが本気ではないらしい。他に人がいるわけでもないのに、小声になっている。最もな受け答えだったので、ゼルはそれ自体に反論する気はなかった。引っかかったのは、ほんの些細な一節だった。
あの方。また奥深くで怒りが小さく、だが確実に燃え出す。あいつはおれたちを見下してるんだぞ。きっと信じてもいない。それを知ったら、滑るように“あの方”なんて呼べなくなる。疑問と不安を抱えながら、その言葉を使うようになるんだ。
「いいんだ。自分に対して丁寧な言葉遣いで話さなくていい、って

直々に言われたんだから」
　エリオに言い寄られるのが嫌だった。振り切るように、彼に横顔をさらす。
　言ってから、そういう口調で話すことを許されたのは、あの時あの場だけだったのでは、と思いつく。普通に考えたらそうだろう。でもおれとしては、一度あそこまで言ってしまったら、また顔を合わせた時にさっきの話し方が出てしまいそうだ。
「なんだ、あいつがまた気に食わんことでも言ったか？」
　ゼルとエリオが同時に叫び声を上げた。背後から突然、低い男の声が割って入ってきたのだ。二人の息の合った振り向きようを見て、声をかけた本人はにっこりと笑った。
「よお、ゼル君。隣のはお友達か？」
「ゲルベンス卿！」
　人がいたなんて全然気付かなかった。気配を消して来たんだろうか。この人だったら、おれ達を脅かしてやりたいと思ってやりかねないことだ。
　エリオも名前は知っていたらしい。ゼルが叫んだのを聞くと、慌てたように自己紹介をした。
　ゲルベンスがよろしくな、とあいさつしたのを見計らい、ゼルが出兵についての説明を受けていたことを話すと、
「そうか、もうすぐだもんな。で、むかつくようなことを言われたのはゼル君か？」
　どちらだと問われれば、これは確実にゼルだ。なんだか怒られそうな気がして、はい、と力なく答える。
「そう縮こまるな。何もそんな風に言うな、って注意したいわけじゃない。ただ、ちょっときみに話したいことがあるんだ。エリオ」
　なるほど、ゲルベンス卿は基本的に、姓で人を呼ぶことはしないようだ。いつぞやのゼルみたいに体を強張らせたエリオが、普段より高い声で反応する。
「荷物を取りに戻るんだろう？　少しゼレセアンを借りるから、彼

の分も持ってきてくれないか」
「は、はい、承知致しました！」
「おれ達は部屋に行ってるから、そっちに頼むよ」
部屋？　とはどこだろうか。ゼルはもちろん、エリオもすぐにはわからなかったらしい。それを読み取ったか、ゲルベンスが言葉を補う。
「すまん、言い足りなかったな。おれの部屋だ」
てっきり立ち話で済ませるとばかり思っていたゼルは、自分の耳を疑った。しかし聞き違いではない。ゲルベンスは目の前で、軽い調子でエリオに自室の場所を教えている。フェルティアードの部屋から近い所にあるようだ。
エリオがその場を離れる際、ゲルベンスはゆっくりでいいからな、と彼に呼びかけた。ゼルだけに話があることを、暗に念押ししているようだった。エリオもそれを理解していたか、早足にもならずにゼル達に背を向けて行った。
「さて、行くか。その後鼻は大丈夫か？」
からかうように聞かれ、ゼルはやっと笑みを浮かべた。あの時は用事があったせいでお世話になることはなかったが、結局こうして部屋にお邪魔することになるなんて。
大丈夫です、と答えるとゲルベンスはまた笑って、廊下を引き返していく。それについて行くと、彼はフェルティアードの部屋より、数室分奥に進んだところにある部屋の扉を開けた。
「遠慮はいらん。ほら、入りな」
二年間の師と仰ぐ貴族以外の部屋に入る機会が、こんなに早く訪れるとは思っていなかった。部屋の内装はフェルティアードのそれと何ら変わったところはない。家具の位置、机の大きさが異なっているのと、壁や敷物の色合いが若干明るく見える程度だった。
壁際には、座部も背もたれも膨らんだ、柔らかそうな長椅子が据えられており、ゲルベンスは先にそこへ座り、ゼルにも腰掛けるよう促した。予想はしていたが、弾力にも富んでいた座り心地に、ゼ

ルは思わずへりを掴み、体を支えようとしていた。
「いつもなら茶ぐらいは出すんだがな。彼もすぐ戻ってくるだろうし、手短に話そう」
彼とはエリオのことだろう。広げた両膝の上にひじを乗せ、組んだ手の上に顎を置く。そんな格好で、ゲルベンスは傍らの青年に視線を移した。
「おれの見たところでは、きみはフェルティアードと一戦交えたようだな。なんて言ってやったんだ？」
できるだけゲルベンスに対し正面を向こうと、やや斜めに構えていたゼルの体が、一瞬びくりと震える。棘のある口調ではなかった。むしろ、ゼルの返答を楽しみにしているようでもある。さっきのエリオとの会話、どこから聞かれていたのか。
「そんな、一戦だなんて。私はただ、勝手な思い込みをされたくなかっただけです」
つい数分前の出来事を、ゼルは事細かにゲルベンスに話した。自分とフェルティアードの応酬をなぞっていると、また言い合いをしている気分になってくる。その度に、今話し相手になっているのは大貴族の一人なのだと言い聞かせた。
ゲルベンス卿はなんと言ってくるのだろう。彼の反応が気になって、話し終えたら一度口を閉じようと思っていた。しかし、浮かんでくる謎は自分だけでは解決などできなく、口は止まらずに疑問を吐き出した。
「ゲルベンス卿、なぜあの人はぼく達を信じてくれないのですか？ぼく達が何をしても、いつも突き放してくるようで」
彼なら知っている。次第に暗さを増す空に負けじと、夕日色の髪が映える大貴族。一つしか違わない階位だと言っても、あのフェルティアードに親しげに呼びかける彼なら。
わけを知りたい。だが、踏み入り過ぎだろうか。兵になったばかりの自分が、大貴族の性格にまで首を突っ込むのは、やはり失礼か。
いや、とゼルはその遠慮を取り払う。国の兵として精一杯奉仕す

るのに、彼の態度は障害になっている。これでは、能力を出し惜しみする人まで出るかもしれないじゃないか。敬意が恐れになっては、元も子もない。

ゲルベンスは問われても、ゼルから目を離さなかった。その顔には、もうからかうような色はない。かと言って初対面時の厳しさが表れていたわけでもなかったが、ゼルにとっては冷や汗ものだ。

「……あいつはな」

曇り空とよく似た、しかし稲妻の如き閃きを纏った瞳が部屋の中ほどに泳いだので、ゼルは内心安堵した。同時に呟かれた話の始まりに、すぐさま耳を傾ける。

「根っからの嫌なやつじゃないんだ。そうせざるを得なくなった、ってとこだろうな。きみ達に冷たくあたり、信頼もしなければ期待もしない。いや、したくてもできないんだろうな」

「……？　どういうことですか？」

確信を突くかと思われた話題は、ゼルに首をひねらせる程度にはぐらかされていた。あの愛想の欠片もないそぶりは、本当の彼のものではないというのか。

ゲルベンスが手をほどき、背もたれに寄りかかる。そして困ったように眉を下げ、

「すまん、あんまり話すとあいつに怒られるんだ。怒らせると怖いのは変わりないな」

フェルティアードの本心に関わることは、終わりにしたいようだった。

「とりあえず、きみ達を嫌ってるわけじゃないんだ。それだけはわかってくれ」

彼は一言も言わないが、フェルティアードと非常に親しい仲なのだろう。その彼にここまで言われれば、否とは答えられない。承諾する声と頷きは小さかったが、ゲルベンスにはそれで十分だったらしい。紙に水が染み込んでいくように、柔和な笑みが差し始めていた。

「しかし、あいつに食って掛かる子が出てくるとは驚きだ。大抵の奴はびびって、事を荒立てないで引っ込んじまうばっかりだったのに」
今度は頭を支えるように手を組み合わせ、すっかりくつろいだ状態のゲルベンスは、さも他愛のない世間話のように話を振る。挑発されて乗ってしまう馬鹿者と見られているのか、常だった流れを壊した者として注目されているのか。
ゼルは前者のほうだと信じていた。耐えていれば、険悪な雰囲気にもならなかったし、今まで以上にフェルティアードとの関係を悪化させもしなかった。でも、どうしても我慢できなかったんだ。自分の欲だけに忠実な男と思われていたことも、デュレイに深手を負わせたことも。
「ゲルベンス卿、ぼくはつい頭にきてしまっただけなんです。彼が、ぼくなんか遠く及ばない大貴族だってことも忘れて」
「……後悔してるのか？」
ゲルベンスの声から、明るさが消えた。所業を振り返っただけなのに、どうしてこの人は残念そうにおれを見るんだろう。まるで、おれが彼にとって期待外れなことを言ってしまったみたいに。
「ぼくは……」
悔いているか？　後先考えず、偽りのない己をさらけ出したことを。フェルティアードにとって、絶対に気に食わないであろう存在になったことを。
おれは嘘をついたわけじゃない。全部本気で言ったことだ。単なる対抗心から言い合いを始めたんだったら、悔やんでいたかもしれない。でも実際はそうじゃなかった。彼がどう思おうと、おれは自分の考えを曲げるつもりはない。
「後悔はしていません。後悔するほど責任を持たずに発言した覚えはありませんから」
そう断言すると、ゲルベンスは嬉しそうに、
「そうか。だが怖くはないのか？　あいつは敵に回すと恐ろしいぞ」

くつくつと笑い出しまでする。敵だなんて、この人はあり得ない例を引っ張り出してくるんだな。想像もできず、ゼルもつられて笑ってしまう。

「怖くないとは言い切れません。でも、怯えていたくもない。そうしたいと思わないし、何より彼に怯えを見せたくないんです」

強がりではない。おれは本当の自分を隠して、何事もないように演じるのが苦手なんだ。

「なるほど、きみは強い男だな。あのフェルティアードと対等に渡り合おうとするなんて」

上司である貴族と、部下となる兵士としてあるべき姿を対等だと言ってるのだろうか。もしそうなら、フェルティアードはよほど怖がられていたんだな。

強いな、と言われて浮かれそうになったが、いくら自分によくしてくれるゲルベンス卿でも、これは身に余るお世辞だ。持ち上げてもらってもなんにも出やしないのに。

雨音に混じって、よく通る硬い音が二度鳴った。窓から聞こえたものではない。反対側だ。ゼルがそちらに首を向けた時には、ゲルベンスが「入っていいぞ」と声を張り上げている。空気まで震わすような響きに気圧されたように、そろそろと扉が開かれた。

二振りの剣に布を抱え、辺りを見回す青い瞳は落ち着きがない。だが、確かにそれはエリオだ。入るようにとまた呼ばれ、彼はやっと廊下と部屋の狭間から抜け出してきた。

棒立ちのエリオを二人で迎え、ゼルは自分の剣と外套を受け取った。ゲルベンスは一人、小雨になりつつある曇天に文句を垂れ流す。

「まだ降ってるのか。少しは弱くなったみたいだが。傘貸すか？」

「えっ、いえ、やみそうでしたら大丈夫です」

舌を噛みそうになりながら断ると、まあ一つしかないからな、と偉丈夫はからからと一笑した。本当に、彼のところで兵として働く同期がうらやましい。

彼の、フェルティアードの下にいて、騎士になることなどできる

んだろうか。普通に考えれば、地位の高い貴族に教えられるというだけで誉れ高いことだ。よくない噂なんて、その階級があればないに等しい。
騎士は、その働きぶりから貴族が選ぶのが常だ。よって師になっている貴族が引き抜く場合が多い。しかし、今のままではまず望めないことだ。ゼルは良いとは逆の意味で、フェルティアードの目に留まってしまっているのだから。
他の貴族の隊も戦に同行するなら、可能性はあったかもしれない。だが今回はフェルティアードの隊だけで、しかも新兵が直接敵と剣を交える予定はないのだ。手柄を立てようとするにも無理がある。
その上、今は平和な時代だ。そんな世で、騎士に召し抱えられるのは難しいに決まっている。戦争などないのが一番だが、夢を叶えようと思うと、どうにもやりにくいのだった。
ゲルベンスに別れを告げながら、腰に吊った剣を握る。焦ることなんかない。自分にできることを、すべきことをやればいい。そこをほんの少しだけ踏み出して、やれることの範囲を広げられれば。
簡素な戸口から外に出る頃には、雨はほとんどやみかけていた。浮かんでいるのが不思議なくらいに重そうな雲は、青いはずの空を隙間なく埋め尽くし、その色の欠片さえもこぼすまいとしているようだった。

「よお、レイオス」
扉を打つこともなく現れた入室者に、フェルティアードはいささかも顔をしかめなかった。わかっていたのだろう。彼にとって、そんなことをせずに会いに来る人物は一人しかいないのだ。
彼が後ろ手に戸を閉める間も、フェルティアードは書類に目を走らせ、ペンを持った手を動かす。雨は上がったようで、すっかり静かになった。だが晴れたわけではない。未だ室内の明かりは必要だった。

「何か用か」
これ見よがしに、一人用の椅子へとどっかりと腰を落とした男に、無機質な動作で横目を使う。それを見返すのは、温かみさえ感じさせる鋼色の瞳だ。
「あるから来たんだろ。ひよっ子相手に決闘たあ、おまえらしくもない。どうしちまったんだ、ん？」
フェルティアードは答えない。唇は普段より緩んでいるものの、他人に比べても機嫌を悪くしている様子と大差はなかった。
「おまえなら相手にもしないだろうに。ああ、それ以前に決闘しようとするやつがいなかったからな」
「ヘリン」
笑顔になろうとした中途半端な表情で、ゲルベンスは固まった。どこか切羽詰ったような、焦りともとれる語気を、その一言が孕んでいたのだ。それは小さく、長年付き合ってきた彼でさえ、もう一度確認したくなってしまうぐらいだった。
なんだ、と静かに聞き返す。フェルティアードの遠くを見るように注がれる視線の先には、机しかない。その黒髪が垂れる横顔は、他人と接している時のものより堅さが薄れている。
これがおれの知っているフェルティアードという男だと、ゲルベンスは思う。おれだけじゃない。屋敷の使用人にも領民にも、こいつは慕われている。厳しい顔を見せるのは必要な時だけだ。それが王宮に来ると、誰も彼もが敵だと言うように、人を寄せつけまいとあんな風になる。
仕方がないと言えばそれまでだった。ただそのせいで、こいつは自分が求める人間まで弾いてはいないかと、いらぬ心配をしてしまう。
「あの男……フロヴァンスだが、容態を聞いていないか」
――まさかと思ったことを聞いてくるな。ゲルベンスには意外だったが、予測していなかったわけではない。こいつが変わっていなければ、きっとそう聞いてくると確信していた。

「ちらっと小耳に挟んだ程度だが、あまりいいとは言えないようだぜ」
そうか、という平坦な相づちに、ゲルベンスは女でもできたかと詰め寄るように、にやつきながら身を乗り出す。
「やっぱり心配か。愛想が尽きたとか何とか言って、結局おまえは諦めきれてないじゃないか」
「……おれは」
「それ以上言うな。思いのほか悪化してるようだから、気になっただけだってんだろ？　それで十分だ。死んでも構わんなんて言い出してたら大問題だったがな」
「誰がそこまで言うものか」
笑い声を無理に噛み殺したような返答を、ゲルベンスはもどかしく感じた。まったく、そこは我慢するところじゃないだろう。呆れてため息まで出そうだ。
まあ、ちょうど話が区切れたか。今日おれが来たのは、フロヴァンスとやらのことを話すためじゃない。出兵に簡単な激励でもしてやる予定だったが、さっきあの子と会ったせいで聞きたいことができた。
「ところでレイオス、おまえゼレセアンをどう思う」
顔を上げ、フェルティアードはまじまじとゲルベンスを見つめてきた。彼の口から、その名が出てくるとは思ってもみなかったのだろう。
「あれと話したのか」
“あれ”ときたか。どう思ってるかなんて、答えを聞く前にわかっちまったようなもんだな。
ゲルベンスは足を組み、
「おまえと言い合ったらしいが、どんな流れになったんだ？」
「本人から聞かなかったのか」
「ああ、詳細はな」
何食わぬ顔で嘘をつく。あのゼレセアンという青年を信用してい

ないわけではなかった。だが、もし話が食い違っていたら。
　レイオスがおれに対し、話を誇大にすることはまずない。したところで有利になることなどないし、何よりこいつは偽ることを嫌う。ただ、ゼレセアンのことはずいぶんと睨んでいるようだから、多少の誇張はあるかもしれないな。
　ゲルベンスは、理解しやすくまとめられた事の発端から終結までを、ゼルの話と照らし合わせながら頷いてやる。お互い微妙な読み取り方の違いはあったようだが、大体の意味は同じだ。ゼルは、自分もフェルティアードのことも、大げさに表現してはいなかった。
　無駄な心配をしていたか。おれの質問に、あんなにはっきりと答えた青年に。
「大したもんじゃないか、おまえを相手にして弱腰にならないなんて」
　せっかく褒めてやっても、本人はここにはいないのだが。しかしフェルティアードはそれさえも好ましくなかったらしい。ひどく顔をしかめてぼやく。
「何をそんなに嬉しそうにしているのだ。ああいう輩に限って、どうせ口だけだ。自分の言ったこともすぐに忘れて、矛盾した行動をとる」
　ひねくれちまったな。ゲルベンスは椅子に背を預けた。別に仕事にまでこんな姿勢ってわけじゃないからいいんだが、これじゃ不安に思われて当然だ。でもそれについて何故かと問いただしてきたのは、あの子が初めてだった。
　彼はこの男を恐れるあまり、他の同期が進言を遠慮し、ますます双方の溝が深くなってしまうことを憂慮しているのでは。多分、彼は自覚などないだろう。だがそんな意思がなければ、フェルティアードという貴族に、たった一人でこんなに突っ込んだりしない。でも、おまえにはもうわからないんだな。
「やれやれ。見込みのある青年だと踏んでたんだが、そう言うんじゃどうしようもないな」

反動をつけて椅子から立ち上がる。あんなのに目をつけていたのかと、フェルティアードは呆れたような声色だ。
「おまえと違って、おれは見る目があるんでな」
苦いものを無理に飲み込んでいるような表情は、機嫌を損ねたのか怒りに触れたのか、この男とさして会うことのない者だったらどちらなのか見当もつかなかったろう。だがゲルベンスには手に取るようにわかる。ふてくされた子どもに見えるぞ、とまで言ったらさすがに黙ってはいないだろうが、少なくともそのぐらい細かく心情を見破るぐらいは造作もなかった。
「お人よしだぞ、おまえ」
「いいや。おれはあの子を買ってるんだ」
フェルティアードは熱でもあるのかと言わんばかりに、あからさまに眉をひそめる。ゲルベンスは涼しい顔で、目についた机のほこりを払った。
「ヘリン？　一体どうしたんだ」
それはこっちの台詞だ。おまえはまだ諦めていないんだろう。この地位を手放さないのが何よりの証拠だ。その気になれば、おまえは国王陛下のすぐそばまで行けるっていうのに。
「レイオス」
艶のある木目に手をつき、ゲルベンスは親友の目を真正面から見据えた。沈んだ声は喉を震わせ、目の色と同じように締まった面で言葉を紡ぐ。
「おまえは見えなくなってるだけさ」
釈然としない様子で見つめ返すジルデリオンに、ヴェルディオは唇だけに笑みを乗せて、短い別れのあいさつと共に部屋の扉へとつま先を向けた。退室する間際、偉丈夫は「用心しとけよ」と、一番伝えたかったはずの一言を残していった。

第一節

二日前にあがった雨の残り香は、ぬかるんだ地面に色濃く残っていた。進むにつれて木々の葉は幾重にも重なり、黒い土には光の粒が散らばっている。ゼルも他の仲間も、歩くたび形を変える足元に何度も自由を奪われていた。転ぶ者こそ出ていないが、いつ誰が倒れ込み、泥と抱き合うことになってもおかしくない。

そんな道とも呼べない悪路を、フェルティアードと新兵以外の兵士は、整えられた街道と同じように歩き進めていく。そのせいで遅れを取るまいと早足になるので、ゼル達は余計にふらつくのだ。

フェルティアードの脇を固めている兵士は、自分達より一つ上どころではなさそうだった。おそらく先輩にあたる兵は、戦闘部隊の一員として先に行ったんだろう。ここ数年、エアルとの大きな戦争はなかった。たかが一年違うだけで、森とは言っても山道に近い起伏に富んだ地を、戦いの経験なしで易々と抜けることなどできない。つまり彼らは、フェルティアードと同程度に場数を踏み、力を見込まれ軍人であることを職にしている人達なのだ。

そんな彼らは、後ろに続くゼル一行を度々振り返っていた。時には太い根があるから気をつけろ、と注意してくれもする。どっかの誰かとは大違いだな。ゼルは前だけを見、黙々歩んでいく黒髪を一瞬だけ目に映した。少しでも意識を逸らすと、つまずいたり滑りそうになってしまうからだ。

緩やかな坂道を延々と登っていくと、先頭の貴族と兵士、そして木の枝の隙間から、天幕の先端が見え隠れし始めた。ようやく陣営にたどり着いたのだ。ほっと胸をなでおろし、その安心から坂を転げたりしないよう今まで以上にしっかりと、楔でも打ち込むかのように地面に足を踏み下ろす。

「うわっ」

斜め後ろにいたため、視界から消えそうになっていた一人が声を

上げた。枝にぶつかったのか虫でもまとわりついたのか、それだけでは彼に何が起きたかなどわからない。だがゼルは反射的に身体をねじり、腕を伸ばしていた。自分も道連れに合わないよう、低く体重を落としてからだ。

その行動は彼――エリオにとってまさに必要なものだった。ゼルの手首を掴んだエリオは、寸でのところで泥だらけにならずに済んだ。もう片方の手は、地面と彼自身を隔てるためにひどく汚れてしまったが、そんなところまで気にしてはいないらしい。すぐに起き上がりながら、エリオは礼を申し出てきた。

「ありがとう、ゼル。根っこで滑っちゃったみたいで」

植物なんかのせいにしているけど、エリオも気が抜けちゃったんだろうな。ゼルには、歩き詰めで上気した彼の顔が、隠し切れていない照れのせいのように見えていた。

道中での会話を禁じられていたわけではないのだが、ゼルは前方から強い視線を感じた。その主は見なくてもわかっている。エリオの体の具合を心配するのに集中して、その存在に気付かなかった振りをした。前進する速さが落ちることなどなく、二人は最後尾について残りの道を歩いた。

天幕が林立する陣営は、森の奥にしては開けた場所に張られていた。布でできた即席の住まいのあいだを、兵達がひっきりなしに通り過ぎてゆく。しかし物々しい空気はなく、今すぐにでも敵と戦えるような格好をしている者は誰一人としていない。笑い声すら聞こえてくる。

この様子だと、当初の予定の通りに事は運んだらしい。先に派遣された彼らと戦い、エアル兵は敗れたのだろう。敵がすでにいないことを知ってゼルは安心したが、少し残念でもあった。

「お待ちしておりました、フェルティアード卿」

歯切れのいい声でフェルティアードを迎えたのは、今さっき天幕の一つから小走りに出てきた兵士だ。金色になり損なった茶の髪をなびかせたその兵士は、周りの一般兵よりもしっかりとした軍服を

着込んでいる。無論フェルティアードには及ばないが、ゼルは一目で、ここにいるベレンズ兵をまとめている中心人物だとわかった。彼はたるみなどとは無縁そうな姿勢と顔つきで、今日までの戦況をかいつまんで話し始めた。

その中身は、敵兵数人を捕虜として捕らえたということ以外は、ゼルが想像していたものとほぼ同じだった。軍勢とも呼べぬ少数のエアル兵は、本国からの援助が皆無だったせいもあってか、その倍もないフェルティアードの兵によって敗退。いや、殲滅されたと言ってもいいかもしれない。そして、かろうじて生き残った者は虜囚になったという。

捕虜に関しての話題になると、若い幹部兵はわずかに声量を落とした。それは新兵一同にも届いたが、何か問題でも起きたのだろうか、と懸念させるには十分過ぎるものだった。

「捕らえたエアル兵の話では、我々が到着した時と前後して、逃亡者が出たようです」

「しかし、エアルはやつらを見捨てたはずだ」

フェルティアードの眉間に、さらにしわが刻まれた。

「その通りです。ですので、その数人の逃亡者が身を隠せる村でも見つけ出したのでしょう」

「なるほど、裏切りか……。面倒なことになったな」

舌打ちもしかねないほど、フェルティアードはわずらわしげに言葉を吐いた。

「そのエアル兵と話はできるか」

「はい。ご案内いたします」

自分達のことなどまるで眼中になさそうな大貴族に、ゼルはここで何ができるのかと辺りを見回した。まさかこのまま、敵兵との談合に新兵が加わるわけはないし、そんなことをこの貴族が許すはずがない。

するとフェルティアードは彼らに、それぞれ休憩を取るように言ってきた。ゼルは目をしばたいた。てっきり無視してしまうかと思

っていたからだ。慣れない山道のようなところを通り喉も渇いていたので、実はそこまで考えていてくれたのか。
しかしゼルはそこで見方を変えた。相変わらず面倒そうな、義務的な喋り方だった。休むよう言ったのは、そうしなければこれからのおれ達の動きが鈍くなるからだ。おれ達を労っての言葉じゃない。
ゼル達と共に来た兵士の中から二、三人を伴い、フェルティアードは茶髪の兵に続いて行った。その背を目で追うのもそこそこに、ゼルはまず水を分けてもらおうと、エリオと一緒に近くにいた兵士に声をかけた。
水だけでなく食い物もやる、と快諾した一人のベレンズ兵は、二人を天幕に連れて行ってくれた。大きく見えていても、中にいた数人の兵は狭苦しそうに、寝台や小さな腰掛けに座っている。それなのに彼らは嫌な顔一つせず、入り口近くにいた兵などはわざわざ席をエリオに譲り、並列した寝台の三人目の座客になった。
ゼルも同じように席をもらい、先導してくれた兵士から手のひら大の水筒を受け取った。一口分だけで事足りるだろうと、感謝の意を示してから口に流し込む。しかし決して冷たくはないその水が伝った喉は、待ちわびた癒しに歓喜し、さらにその液体を求めた。
これじゃ全部飲んでしまう。染み渡らせるように力強く嚥下し、ゼルは水筒を返そうとした。だが当の兵は気にしなくていい、汗だくだろう、と押し返してきた。言われて、滝のようにとは言い過ぎだが、それなりに汗もかいていたことを思い出す。フェルティアードの目を気にして、体の調子まで失念していたなんて。
好意に甘えてその水筒の中身を頂戴し、隣の兵からは干し肉を渡された。少量だったが、不足ではないのは食べてすぐわかった。あまりに固くて、そう簡単に飲んでやれないのだ。こればかり食べていれば、顎だけ強くなってしまいそうだった。
思いのほか和やかだった彼らの雰囲気は、ゼルをその場に引き止めようともしていた。しかしそう長居はできない。フェルティアードはいつ戻ってくるかわからないのだ。早めに行っていたほうが無

難だろう。
　席を立つと、兵達はもう行くのか、とか、あの方のところは忙しいな、とこぼした。忙しくはないのだが、まあ似たようなものかもしれない。二人はお礼を残して天幕を出た。葉や土の香りが混ざり、鼻を突いてくる。
　大貴族に注意されるのを避けるためか、他の新兵も早々に元の場所に集まっていた。が、彼らはそれからさらに軽く十分は待たされた。集合に遅れて注意されるよりはもちろんましだ。それにしても、そんなに長い話でもしているのか。
（逃亡者、か）
　ベレンズ側としても、逃げ出したという敵兵を放置する気などないだろう。もしあの若い兵士の言う通り、国内の村に身を潜め、あげく占領などしていたらなおさらだ。
　とすると、ベレンズの勢力がここに居座ってももう意味はないのか。それよりも周辺の集落を調べ、彼らが遠くまで行かないうちに探し出したほうが。
　今後の動きを考えていると、天幕のあいだを縫って、ようやくフェルティアードが姿を現した。後ろには、連れ立っていった兵と、あの幹部兵が見える。何分間休んでいいかくらい言い残して欲しかったもんだ。いらつきから生じたため息は、彼が話を始める前に消え去っていた。
「わたしはこれから敵陣を視察する。ついて来る者はいるか」
　前置きも何もない発言に、一同がうろたえたのがわかった。ゼル自身もそうだった。自分達の意見も聞かずについて来い、というのではない。選べというのだ。そしてそれは、本来は予定になかった行動でもあった。
「それは、義務ではないのですか？」
　そう聞いた同期は、ゼルの中で顔と名前が一致している人物だった。ラジッド・セアス。最初にフェルティアードに手厳しい返答をされた、あの青年だ。

「そうだ。逃亡者は、我らベレンズ勢の指導者の命を狙っているようだ。わたしがここを離れれば、奴らはわたしを殺すため姿を見せるかもしれん」
数少ない勢力で、大勢のベレンズ軍に太刀打ちはできない。それならば、その軍勢に対抗するよりも、指揮する者を倒せばいい。エアルから見れば逃亡者、裏切り者とされた彼らはそう考えたのだ。そしてフェルティアードは、その残りの敵兵をおびき出そうとしている。この罠に相手がうまくかかれば、当然大貴族に付き従う者にも命の危険が生まれる。だから彼は、新兵に選択の余地を与えたのだ。
とは言っても、これは半ば試されているようなものだ。陣営に残ると言えば、この男はその兵を見限るに違いない。ゼルの中にも恐れはあった。不確かといえども武器を持ち、自分を殺そうとしてくる人間に出会うかもしれない。
だがそんな怯えもへし折るぐらいに、ゼルはフェルティアードについて行く覚悟を確固たるものにしていた。ほんのわずかであっても、この男に迷いや隙を見せるものか。
「是非私を行かせてください」
第一声はゼルだった。あの一件から数日しか経っていないせいか、見知った人物相手にやむなく口調を丁寧にしているような気分だ。最も、非常に険悪な意味での“見知った人物”だが。
ゼルに続いてエリオが名乗りを上げると残りも次々に同意し、結局ここに残る者は出なかった。フェルティアードは、思惑通りに事が運ばなかったのか、つまらなさそうに口を曲げたように見えた。二、三人は脱落者が出ると思っていたのか。彼のことだから、新兵達は敵に遭遇する恐怖より、臆病であることをさらされる恐怖のほうが勝って、嫌々ながら敵地に臨むことにしたと解しているだろう。
「全員か。では来い、列を乱すな」
進行した方向は陣営の北だ。ゼル達はここから見て南側から入ってきた。北はさらに森の内部――山へと進むことになる。

フェルティアードが、自身の脇に茶髪の幹部兵を従えたのと、陣営から呼ばれたらしい三人の兵士が最後尾を務めている以外は、来た時と同じ形態だ。生い茂った草葉を手で払っていると、地面の傾きが変わった。下り道になっている。

天幕の並んだ領域の地面は乾いており、歩きやすかったが、しっかりと足跡を残すこの土は、また兵達の靴を絡め取ろうとしていた。おまけに今度は、転びなどしたらフェルティアードに激突してしまう。慎重に足場を見極めながら、ゼルは平地が待ち遠しく感じていた。

坂が終わってから五分ほど進むと、先ほどの味方陣営ほどではないにしろ、人の手が入ったことが窺えるような、下草の少ない場所にたどり着いた。それと同時に、黒く汚れた大布や骨組みらしき物の残骸が散乱し、到底使い物にはならないような、小型の刃物が放置されている光景も広がっている。周りは木々が密集し、数十歩先は暗がりと言ってもいいぐらいだ。

慣れたはずの森の匂いに、異質なものが混じっている。鉄か血か。自然物しかないこの場とっては、不釣合いなことだけははっきりとわかった。

生きていない人間の姿は、ざっと見ただけでは目に入らなかった。無意識に避けたのかもしれない。目を凝らさなければ、気になった物の詳細はわからなかったからだ。

人の気配は、自分達以外にはない。これが戦場だった場か。どんな表情でこれを見ているのだろうとフェルティアードに向けようとした碧眼は、背後から聞こえてきた声の主を映した。

「ん？　もう一人はどこだ？」

それは大貴族の耳にまでは届かなかったようだ。聞こえていたら、誰かいなくなったのかと問い詰めかねないその内容は、ゼルも不思議がるものだった。

一人はぐれたのか。人数を数えてみたが、新兵は全員いる。もしや、一番後ろにいた兵士が？　そういえば、三人いたはずなのに二

人しか見当たらない。フェルティアードと話すのに前方に移動したのかと前を見るも、当の彼は幹部兵と言葉を交わしている。すぐ隣にいるのは警護役の兵士で、話が終わるのを待っている様子ではない。目を移す過程で兵士の数も数えなおしたが、やはり一人足りなかった。

まさか、道中に敵が潜んでいて、襲われたっていうのか？　二人に気付かれずに？　しかし現に、二人になってしまった元三人の兵はフェルティアードに報告しようとしている。彼らのすぐ前、新兵の列で見れば後部にいた同期などは、やはり同じく敵の存在に思い当たったのか、顔が青ざめているようだった。

がさがさと揺れた低い位置にある枝と茂みは、その表情からさらに色を抜いていった。彼らはもちろん兵士二人も、間を空けていたゼルもとっさに身を低くする。風ならいいのだが。幹の陰から、あるいは茂った草木を押しのけ、何かが飛び出してくるのでは。

目を凝らせば凝らすほど、緊張で体が固まっていく。出てきたのが小動物であっても、柄にかけた手が得物を抜けるとは思えなかった。

一際大きく揺らいだ茂みが、大きく割れた。

「死ね！」

獣ではない。人間。それと同時に理解できたのは、その人が細長い刃物を掲げていることだけだった。凶器は一直線に、硬直していた一人の新兵の胸に吸い込まれていった。

第二節

危ない、と叫ぶ暇すらなかった。駆け出したが到底間に合わない。彼をかばおうとしていたゼルは、刺される覚悟で腕を伸ばした。だがその腕が届く前に、彼はぐらりと後方に倒れている。

やられたのか。一瞬、乱入者の剣先が血に濡れているのを幻視した。しかしその兵は剣など手にしていなかった。

嫌な音を立てて、襲われた新兵が地面に尻餅をつく。その時には、警戒していたはずの二人の兵が大笑いしていた。無様にも両手を泥に埋もれさせている彼は、周りよりもだいぶ遅れて状況を理解したことだろうが、ゼルは敵だと思った男をまじまじと見て、馬鹿らしく感じながらも胸をなでおろした。

高らかに死ね、などと宣言してきた男は、はぐれたのかと思われていたベレンズ兵その人だった。顔を覚えていたわけではない。ベレンズの軍服に身を包んでいたからだ。フェルティアードや幹部兵と比べると金属の装具が目立つそのいでたちは、横で笑っている二人と全く同じものであった。

剣の光ったのが見間違いだったという証拠はなかった。確かにあの瞬間、彼は剣を差し向けていた。どうやらそれは手の込んだいたずらだったらしい。動けなくなっていた新兵ばかりを見ていたのでゼルはわからなかったが、このたちの悪いベレンズ兵は、ぎりぎりのところで剣を収め、代わりに彼を突き飛ばしたのだ。いや、つついた程度だったかもしれない。標的になった彼の足を掬わせるのに、そこまでの腕力は必要なかったのだ。

「おいおい、消えたと思ったらおまえは。何やってるんだ」

「若輩をからかうにも度が過ぎるんじゃないか？」

言うことは最もだが、笑いながら、というのがゼルには不快だった。心から当のベレンズ兵に注意しているようには見えなかったからである。

なにも脅かすことはないだろう。ようやく立ち上がろうとした仲間に、ゼルは手を貸した。それを助けるように、近くにいた数人もよろめく肩を支えたり、声をかけたりする。

しかし、いずれはこうして馴れ合うこともなくなるのだろう。これから先、どのぐらいの頻度、規模で戦が起きるかはわからない。どんな状況になろうとも、手柄を立てるためには彼らも好敵手となるのだ。

それならばせめて今だけ。今日一日だけでも、お互いを思いやってもいいだろう。まだ楽しげに笑う三人を眺めて、ゼルは自身がしぼんでしまいそうなため息を吐いた。

笑い声が聞こえたのか、フェルティアードと幹部兵が歩いてきた。空気を震わせていた三つの音が、はたと止まる。

「やかましい奴らだな。ここは宴会場ではないぞ」

今回ばかりは、フェルティアードに大賛成だった。硬く重い低音は、相変わらず容赦がない。もっと言ってやってくれと心の中で押したが、それは三人のうちの一人の進言によって、あえなく阻まれてしまった。

「これは失礼致しました。実は今この者が……」

彼はたった今起こった、彼らにとっては面白おかしいらしい事件を述べ上げた。話の途中、フェルティアードは新兵達を一瞥した。しょうもないいたずらの餌食になったのは誰だったのか、確認したかったのだろう。彼ほど観察力に優れているはずの者でなくとも、一人汚れに汚れた服と外套の青年がいれば、推測するのに苦労はなかったはずだ。

フェルティアードは兵の口が閉じられる寸前、歯を見せ頬を歪めながら、呆れて物も言えないという風に空気だけを吐き出した。

「ふざけている暇などないだろう。士気を乱す邪魔者は早々に引き返してほしいところだが、今は数が要る。二度と馬鹿な真似はするな」

緩んだ笑顔はどこへやら、三人は足並み揃え承諾の台詞を発した。

一人だけ声が際立って明瞭だったのは、当然と言えば当然だ。ゼルはその一人の顔を汗が伝っているように見えた気がした。しかし、肝を冷やすほど焦ればいいと、彼のことをよく思っていなかった節もあったせいだろう。強張っていたものの、その額にも頬にも、汗などにじんでいなかった。

暗い青色の外套が翻り、金色と見紛う瞳が新兵に向けられる。こんなことでひるむなどけしからんとか、そんなお小言でも飛ぶんだな。予想できていれば、この男の厳しい口調などそう刺さってくるものでもない。

「おまえ達、今すぐに陣営へ戻れ。これではただの足手まといだ」

お小言どころではなかった。今のは本当に自分達に向けられたものかと疑ってしまったゼルは、フェルティアードの視線を追っていた。しかし彼は、あの三人の兵にしっかりと背を見せている。この命令の対象が、兵として初めて戦場に出た者達であったことは明らかだった。

突然の退陣を命じられた彼らは、その事態についていけていないようだった。誰かがどういうことですか、とおそるおそる言いかねない。この男ならそれに答えず、帰れと言うのもわからないのかと、さらにのし掛けてきそうだ。

「今さらなんなんだ、来るかどうか聞いたのはそっちじゃないか」

その重圧を避けようと、ゼルは先手を打った。義務なら文句はないが、自分で募っておいてこの場を去れとは、あまりに勝手過ぎる。きっと全員が思っていて、だが言い出せないことだ。

皆が恐れるならおれが、という思いがなかったわけではない。それよりもゼルは、自分の意見としてフェルティアードに口を出さずにはいられなかったのだ。

しかしゼルは、何よりも大きな失敗を犯していた。数え切れぬほどの視線を感じ、ゼル自身もそのことに嫌でも気付かされ、心内毒づく。

今おれは、誰を相手にしてあんな話し方をした？

あの時は一対一だった。会話を遮る人はいなかったし、いたとしても状況を知った人物になっていたはずだ。でも今回は？　誰も知らないんだ。おれと彼のあいだに起こったことを、エリオでさえも。

「ゼ、ゼル……！　ちょっと今のは」

脇にいたエリオが、前兆もなしに舞い降りた静けさに溶け込むような声で囁く。相手は大貴族で、しかも最も位が高いのだ。ゼルの意見が通る以前の問題で、この態度云々で倍になって返ってきておかしくはない。

誰も彼もがはらはらとした様子で、ゼルとフェルティアードを交互に見る。怒りを露わにしているゼルを見下ろす大貴族は、いつも通り不機嫌そうではあったが、それだけだった。いくら表情に乏しいといっても、こんなにもなってない口の利き方をされれば、何らかの変化はあるだろう。そう踏んでいたらしい大多数は、逆に面食らったようだった。

「ここまで腰抜けだとは思わなかったからな。とっさの対応もできんとは、敵が現れたときに邪魔になるだけだ」

「それなら、彼だけ帰してやればいいだろう。どうしておれ達まで戻らなきゃならないんだ」

視線が合った。ゼルは今の発言が、全体ではなく自分に対してのものだと解した。何より、この言葉遣いに突っ込んでくるかと構えていたのだが、彼はもう気にしていないのか。

それならそれでと、ゼルは一瞬よぎった後悔を無視し、同じように理由を問いただしていた。突然のことに動けなくなった彼は仕方ないにしても、全員帰されるのは腑に落ちない。

「おまえ達の力量など、一人見れば十分だ。敵兵どころか、獣に食い殺されるのが落ちだろうな」

勝手なやつめ。でもおそらく、他のみんなの腹は決まってる。なんせ隊の指揮者が言うんだ、黙ってあの坂道を上るんだろう。

「おれは残ります。自分で行くことを決めたんだ、人間だろうが獣だろうが、命を危険にさらす覚悟はできてる」

けれど、おれはそう簡単に諦めないからな。誰でもあんたの言いなりになると思ったら大間違いだ。
「いいや、残ることは許さん」
「あんたは兵士の一人も信じないのか！」
「戻れと言うのがわからんのか」
もう一言言わせれば、確実に大声になっただろうな。ゼルがそう読み取るぐらいに、フェルティアードの声は膨らんだ苛立ちを押さえ込んでいるように聞こえた。
「……失礼」
その引き金にしようと目論んでいた続きを、冷水を浴びせるように、しかし柔らかい物腰で遮ってきた者がいた。ゼルの肩にそっと手を乗せてきた彼は、フェルティアードから離れたところで控えていた、あの幹部兵だった。
「言いたいことはわかるよ。でも、今回はあの方に従っておいたほうがいい」
比較的歳が近そうに見えたからだろうか。大貴族をよく知った同年代の友に、的確な助言をもらったような気分だった。
「すみません……」
わざわざ割って入ってきた彼にまで、当たり散らす気にはなれなかった。謝りながらあんたに言ったんじゃないぞと、フェルティアードを睨んでやる。向こうは興味を失くしたように、ゼルを見てすらいなかった。
なりを潜めていた森のざわめきが、張り詰めた緊張をほぐしていく。フェルティアードは三人の兵についてくるよう合図し、まばらに散っていた新兵達のあいだを突っ切って、元敵陣へと引き返していった。若い幹部兵はそれを見送ると、ゼル達に陣営へ戻るよう言ってきた。
「フェルティアード卿の言われた通りだ。向こうでは自由にしてくれて構わないからね」
ここで拒んだところで、あの男が折れるわけがない。何より、眼

前の彼の厚意を無下にしたくはなかった。
「あの、失礼ですが」
お名前を、と言い出すのに間が空いてしまった。その空白に、相手はゼルの意を読み取ったか、求めていた答えを口にしていた。
「ギレーノだ。そう呼んでくれて構わないよ」
「は、はい。私はジュオール・ゼレセアンといいます。騒ぎを起こしてしまってすみません、ギレーノさん」
様、と言うには、親しみやすさが強過ぎた。ギレーノはぽんとゼルの肩を叩き、
「気にしなくていいさ。きみは間違ったことは言ってないんだから」
悲しそうに目が細められていたのは、気のせいだったんだろうか。ギレーノはすぐにフェルティアードを振り返っていたため、そのわずかな変化を確認することはできなかった。
新兵だけの列は指導者にその背を見られることもなく、背の高い林に覆われすぐに見えなくなった。

彼らが襲われなければいいが。ギレーノは青年達を心配したが、敵がいた広場にさっさと行ってしまったフェルティアードを追いかけた。現時点では自分は、この大貴族の補佐役だ。彼が来るまでは実質的な隊の指導者だったものの、本来の長が来ればただの幹部に過ぎない。
逃げ出した兵は十人前後だと言っていた。その情報を全面的に信じてはいない。もし二十人とまでいくと、この人数ではきついものがある。
しかし、敵兵は火器を所持していなかった。銃を持っているのはギレーノとフェルティアードだけなのだが、扱いには長けている。剣にしても、かの大貴族なら一人で二人分以上の活躍をするだろう。
逃げ出したエアル兵は、フェルティアードの命を狙って近くに潜んでいるのか。それとも物資を求め移動したか。後者のことも考え

て、ここでの探索も長くはできない。
　ギレーノが、つれて来た兵士数人と指導者を目で追った。フェルティアードは湿っぽく光の少ない林に、半分以上入り込んでいる。部下を差し置いて一人で消える方でないのは知っている。わずかな手がかりも見逃すまいとしているのだ。
　それはいいのだが、またあの三人が消えている。目の届かないところまで行かれると困るというのに。嘆息し、ギレーノと共に先頭を担った兵は全員いることを確認すると、やっと件の兵が二人、林の奥から出てきた。駆け足になっている。
「どうした。また遊んでいるんじゃないだろうな」
　そう聞いて顔を見ると、見当たらないのは新兵を脅かしたあの兵ではなく、笑っていた二人の片方だった。
「も、申し上げます。敵兵が近くにいるようです」
　聞き取る分には支障のない、だが息の切れた声がギレーノの耳朶を打った。見るからに険しい顔つきで、彼はその意味を問い詰めた。
「どういうことだ。まさかやられたのか」
「そのようです。私達が駆けつけた時には、サーディはもう……」
　ここにはいない彼の名前か。唇を噛み損ねた歯が鳴り、顎を不快な振動が伝った。
「わかった、詳細はフェルティアード卿にも話してもらう。来るんだ」
　踏み出した靴が、木製の何かをへし折ったらしい。固い音が柔らかい地面に吸い込まれた。ギレーノは構わず歩き、フェルティアードを大声で呼んだ。暗がりに包まれた外套がはためき、ただ一箇所光を失わない対の金が三人を振り返った。
「やはり、逃亡者は付近にいるようです。兵が一人やられました」
　堂々としながら、嫌気がさすほどの威勢は感じさせない足取りで、フェルティアードは彼らの前に立った。ギレーノは仲介するように、彼と兵二人の様子を見届けられる位置に移動する。大貴族の背後は警護の兵が固めていた。

「敵の姿は見たのか」
「いいえ。彼と離れたほんの少しのあいだにやられたようです」
フェルティアードは二人の顔の上から、林の奥を覗いたようだった。
「そこまで案内できるか」
「はい、それはもちろん。……ですが」
言い淀んだ兵――悪ふざけした男に、ギレーノは訝しげに首を傾けた。何をためらうことがあるのか。フェルティアード卿を連れるのが、そんなに緊張するのだろうか。
「なんの問題がある」
「問題はございません。ただ」
へりくだった言葉を発していた口が、突如形を変えた。
「二度とベレンズには戻れませんが」
嘲笑。そう判断した途端、ギレーノは目にも見えず肌にも感じない風に吹かれたように全身をわななかせた。彼に追い討ちをかけたのは、大貴族の背から飛んできたくぐもった悲鳴だ。
その状況を最初に目の当たりにしたのは、当然ながら振り向いたフェルティアードだった。四人いた兵のうち三人は首筋から血を溢れさせ、最後の一人は今しがた、幅の広い短剣を頸部に突き刺されたところだった。すぐ後ろ、張り付くように立っていたエアル兵の手によって。
そこからのフェルティアードの動きは尋常ではなかった。剣を抜こうとギレーノが瞬きした直後には、彼の右手は柄を握り、刃さえ覗かせている。ギレーノの手はしかし、空中で動かなくなっていた。味方だったはずの兵の一人が腕を抑え、反らさせた首に短い刃を突きつけたのだ。
「動くな」
言ったのは、未だ下賤な笑いを浮かべるベレンズ兵だ。遅れて抜かれた剣が、ゆっくりと大貴族を照準に定める。先端のみを鞘に残した彼の得物は、凍らされたように硬直していた。

「大人しくついて来て貰いたい。下手に動くとこいつの喉に穴が開きますよ」
押し付けられた剣に、うっすらと赤いものが浮かび上がる。フェルティアードは無言で、握り締めていた武器を収めた。
「おれを殺さないのか」
気管を通さず口だけで、囁き声のような薄い音をギレーノは漏らした。
「あんたは使えるからな。殺しはしない」
剣を軽く振り、フェルティアードに後ろを向くよう指示する。許し難い行為だろうが、両腕をさらして彼は従った。そして兵士はちらりとギレーノを見て、退場を告げた。
「だからここで眠ってな」
間髪入れず、鈍く重たい衝撃が後頭部を走った。脚からは力が霧散し、ついた膝はふらつく上体を支えることはできなかった。山道に比べれば乾いた地面にどさりと倒れ落ちる。
ギレーノの意識は、即座に消えはしなかった。脈打つ痛みに耐えながら、自分の腕ごしに見上げるように指導者を探す。この手をどかせられれば、もっと状況を把握できるのに。だが、力を込めても四肢は全く反応を示さない。
睡魔とは違う感覚が、ギレーノを蝕み始めていた。意識が遠のくとはこういうことか。物を考えている自分が、目の奥に吸い込まれ、引き寄せられていくような。ぼやけていた視界に、小さな黒と暗い碧色を見つけた。周りには二つ、自国の兵が纏う軍服の色。その前方には、欠片しか見えなかったが確かに敵国、エアルの軍服の色。薄い水色をあしらった、派手気味のあの色。
足音と一緒に小さくなっていくそれらは、ここから遠ざかっている、ということしかギレーノにはわからなかった。起き上がって追わなければ。そう心に決めまぶたを閉じたところで、彼の意思は現実から断ち切られた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5501t/

狼の騎士

2011年10月2日11時13分発行